

---

# 剣と魔法と世界と簿【改】

久乃 銑泉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣と魔法と世界と筈 【改】

### 【Nコード】

N8206V

### 【作者名】

久乃 銑泉

### 【あらすじ】

とある少年が、とある異世界にほつぱり出される。そんな少年の手元には、一本の筈。そんなお話。端的に言えば、異世界召還ものです。

・・・注：題名に【改】とありますが、これは小説を区別するための便宜上の記号であり、内容には一切関係ありません。何かしらの続編とかいう訳ではないのであしからず。

## 第零話 序話発端・ぶろろーぐ(前書き)

はるか昔に連載してたとあるファンタジーの改訂版だけど、ほぼ別物なんで。とりあえず題名の【改】は気にしないでください。

## 第零話 序話発端・ぶろろーぐ

質量を持つかのように広がる闇。手を伸ばせば真つ黒な塊の掴み取れそうなの、そんな、漆黒の中。黒き空を伝い、微かな音が聞こえてきた。

「……イヲ、ラムツヤハヒウ……」

囁き声だ。何者かが、この闇を小さく震わせている。

「……イヲフサニコツ又シウイラ、スソ……」

ふわり、と。人が、闇に浮かんだ。どこかから光が射したわけではない。ただ黒かった世界に、人の姿が描かれたのだ。

「……イイヲハヤナヨツウイクマケティアササハトシクモナラムキウイト……」

浮かび上がったのは、青年。長身、かつ金髪。そして彫りの深い顔。赤いマントのような物を全身に被っている。

光が、増した。青年に近い場所から、だんだんと白くなる。白く、白く。

「……イイヲハヒアカイウフネゼ“アルナクス・ラックドルサ・カ  
ーリナグム・ベンフィード・テリクア”ヒウ」

青年が、初めて言葉を切る。その体から純白が溢れ出た。それは、ただ白く辺りを染めあげてゆく。

白い世界の中で一人、青年は笑みを浮かべていた。

……

9月の初め、残暑もなりをひそめる午後9時。夜道を歩く小さな影がひとつあった。街灯に照らされたその影は、見た感じ小学生高学年な少年だ。

「……見ちゃだめ見ちゃだめ見ちゃだめ……」

なにやらぶつぶつ呟いているが、決して不審者ではない。不審だ

が。

……この少年、名を把臥之<sup>はがの</sup> 双羽<sup>ともはね</sup>という。少し見られない珍しい名前の持ち主だ。ちなみに現在、すぐ近所のコンビニ二へのお使いの帰りである。ちなみに住むのも目と鼻の先な住宅地だ。

と、彼の右手にある空き地を風が吹き抜けた。廃材やら何やら放置されている場所特有の、掠れるような風音。

ひっ、と小さく悲鳴を上げた少年は思わず振り向き、見てしまった。先より全力で目を逸らしていた、ある物。

「い、いぎゃああああ……！！」

……数ヶ月前よりこの広場に捨てられている、“お化け屋敷の看板”を。オドロオドロしく、を指してむしろ滑稽な緑の顔を背景に、ペンキを垂らした以外に表現の見つからない赤字の“お化け屋敷”。幼稚園児でも半分は指さして笑いそつな看板を背に、少年は飛び上がるようにして全力ダッシュを開始する。

「わああああはぶえっ!?!」

「おぐっ!?!」

3秒後、曲がり角にて人に激突。前も見ずに走っていたのだから、まあ仕方ないことだが。ここで車に曳かれたり電柱に突っ込まないだけマシだろう。

「ちよ、つとアンタ、前見て走り、って、双羽?」

「……お、お姉ちゃん!」

さらに、どうやらぶつかった相手の人物、少年の姉だったようだ。歳の頃17、8ぐらいだろうか。髪さえ短ければ男に見えなくもない、と口が滑れば地獄を見かねない雰囲気をもっている。そんな彼女は把臥之<sup>あみ</sup> 朝美。見ての通りチキンハートな弟とは違って変わった豪傑な女性である。

「ふええ、怖かったよー」

「またあの看板? 双羽、アンタちよつと怖がりすぎでしょ」

「だって、だって、お、お化けの顔描いてて、風がビュー、って…

…」

「意味分かんないわよ」

未だガタガタ震える双羽。確かに夜道というのは多少なり恐怖の対象ではあるのだが、この反応は少々行き過ぎな気もする。しかも

……

「アンタももう中三なんだから。こんなことでいちいち怖がってちゃダメよ」

「怖いものは怖いんだもん！」

「んな力説されてもねえ」

……しかもこの双羽という少年、実はもう中学生なのである。それも後半年で卒業、な15歳。少なくとも街灯の立つ夜道を真面目に恐怖する年齢ではないはずだ。しかしその幼い容姿、言動に相まってそれほど違和感が無い、というのも事実ではあるから問題である。

「さて、双羽もう帰るんでしょ？」

「……え、お姉ちゃんは帰らないの……？」

「アタシは今家出たところよ」

「うう、お姉ちゃん着いてきてくれると思ったのに……」

「すぐそこなんだから、ひとりで帰りなさい」

「……はい」

こんな姉弟ゆえ仲は良いのだが、姉には姉の用事がある。それに実際家はすぐそこだ。距離にして100メートルも無い。ゴネる弟の背を押し、姉は友人宅へと足を向けた。明日のテストに備えて貸しているプリント類を回収しなくてはならない。絶対必要というわけでもないのだが、直前の見直しには有用なのだ。

テストの範囲やら何やら思い出しながら例の看板の前ほどまで来た朝美だったが、そこでふと双羽が気になった。振り向くが、もちろぬ彼の姿はすでに曲がり角の向こう。見えるわけもない。自分の行動に首を傾げつつ、角に背を向けた彼女の視界の外。ちよつと双羽のいるであろう場所を、街灯とは違う薄い白光が照らした。

## 第巻話 起床天青・めざめてそして

「……ん？」

なんだか、眩しい。確か、部屋のカーテンはいつも閉めてあるはずなのに。姉が起こしに来たのかとも考えたが、今日は休日だ。特に、用事も無いはず。……というか、昨日家に帰った記憶が無い。よほど疲れていたのか。

そんなことを考えながら目を開けた双羽の、寝起きで霞む視界いっぱい草原が広がっていた。どうやら木が何かにもたれているらしい。

「え……えーと……？」

状況を整理してみよう。双羽は昨晚、お使いへ行っていた。そして起きたら草のベッドに木の枕、そして澄んだ青空がお出迎え。

「意味分かんないよ……」

多分、ここで意味分かる人間は極希少だろう。

と、混乱しつつも、とりあえずは周囲を見渡してみることにした双羽。

「このままぼーっとしててもしょうがないもんね……」

ふう、と息を吐きつつ、青空を仰ぐ。……太陽が二つ見えた気もするが、まあ気のせいということで一時的保留。

そのまま右に視線を落としてみれば、正面と同じく見渡す限りの草原が広がっている。左手には、森。……とおぼしき緑色が広がっていた。いやしかし、樹木というのはあそこまでねじ曲がって生えるものだっただろうか。

よっこらせ、と立ち上がり、持たれていた木の裏手に目を向ける双羽。左手の森はこちらまで続いていた。森の途切れた先にはうっすらと山のようなものが見える。

立ち上がったことで分かったのだが、どうも自分の着ているものまでなんだかおかしい。残念ながら双羽、こんなゴツゴツした生地

の丈夫そうな服を買った覚えは無いのだ。まるで真面目に登山でもするかのような出で立ちではないか。

そうやって服装を確認したところで、ふと気になって木の裏側をのぞき込んでみる。……木の根本部分に、やたらとカクカクした黄色い物体がでんと鎮座していた。一昔前のポリゴングラフィックのような、多角形の集合体だ。全体が黄色っぽいのが、黒い縞模様が表面に浮き出ている。もう少しよく見ようと双羽が首を伸ばした、そのとき……

「……ん？」

「……ガウ？」

黄色の物体と、目があった。両者、一時停止。後、黄色の物体が動き出す。持ち上がった“頭”に、黄色い三角ふたつ、赤い逆三角がもつふたつ。反対側からひよろりと飛び出てきたのは、尻尾だらうか。……このフォルムには、見覚えがある。

「……虎？」

「ガウウ」

全体に角張ってはいるが、確かにこれは虎だ。全長およそ3メートルくらい。立ち上がったそれは、四本の足でもって双羽と同様の高さに頭があった。

「でっかいね……」

「ガウウウ……」

まるで返事でもするかのように唸る虎。しかし、その声から親しみは感じられない。かといって敵意があるわけでもなく、何というか、これは。

「えっと、……おなか空いた？」

「ガウ」

肯定にも聞こえる一鳴きの後、虎は無造作に口を開けた。その鋭利な牙を目にし、この異変によって麻痺していた双羽の神経がやつとこさ復活する。曰く、このままじゃ食われるぞ、と。

「わぁあっ……!」



「ガウ、ガアアツ！」

間一髪、とびのいた双羽の髪を掠める真つ白な刃。それを努めて視界に入れず、双羽は先ほど見た周囲の景色を思い出す。逃げ場は、続く平原か変な森。虎なんでジャングルとかは得意そうだが、まこと残念ながら双羽に平地で野生動物と徒競走するほどの走力は無い。ここは素直に、森へ全力ダツシュ。

「う、うわあああっ！」

「ガウ、ガウウ」

まるでこちらに合わせるような速度で追ってくる角張り虎。どうやら、こちらを完全に“獲物”と認識しているようだ。間違っではないが今のところありがたい。本気で追いかけてしまえば、森へたどり着くことすら夢物語だろう。

「ガウ、ガウウ、ガウガウ」

「わっ、とっ、わわわっ」

こうして、双羽の冒険は命がけの追いかけっこと共に始まったのであった。

.....

少しばかりの時を経て、場所はあるとき見えてた森の中。

「えーっと、と、虎さーん.....」

「ガウ」

「ぼ、僕を食べてもおいし...くないと、いいなあ」

「ガウウ、ガウガウ」

案の定、ねじ曲がった木を背に追いつめられている双羽がいた。一応まだ左右に逃げられないこともないのだが、彼の残り少ない体力がこれ以上の逃走を許さない。そもそもここまで逃げ切れたこと自体わりと奇跡だ。目覚めた場所から見て、この森まではそこそこ距離があったように思えたのだが。

「ガウ、グルルルル.....」

「わ、わわ……」

野生動物にとつて、疲れきった獲物はご飯と同義。いただきまーすと歩み寄る虎もどきを相手に、双羽は悟った。

ああ、食われるな、と。

これは子供一人の力で何とかなる状況を遙かに越えている。まだ自分の身に何が起きたのか考えることすらできていないのだが、残念、どうやらこれまでのようだ。

「空でも飛べたらなあ……」

それならば、とりあえずここで食われるという事態だけは回避できそうなもの。まあ、出来もしないことを願ってもしょうがない。

ため息と共に俯いた双羽は、自分が右手に持っている物体に気づいた。

「ガアアツ！」

同時、飛びかかってくる虎もどき。反射的に右手の物体を前方へと突き出す双羽。突然の反撃に戸惑ったのか、虎もどきは軌道を変え、襲撃を中断する。おかげで双羽は今自分を僅か延命させた物体を観察することができた。

「……箒??」

箒だった。どちらかという天庭掃除とかに使いそうな、魔女とか乗ってそうな、そんな箒。ただ違うのは、全体が金属で構成されていること。先端部分の毛の一本まで滑らかな針金になっている。あと、箒にしては妙に長い。そして見た目以上に軽い。

そんな銀の箒が、いつの間にか双羽の手の中に出現していた。

「ガウウ……」

のんびりと観察している間に、再び虎もどきが臨戦態勢を取っている。相対する双羽の手には、先述の通り箒が一本。

……野生動物を相手取るには少々心もとなない武器だが、まあ無いよりマシだろう。先手必勝とばかり、思い切り箒を振り抜く双羽。もちろん、虎もどきはひょいと軽々避けたわけなのだが。

「……あ、あれ？」

しつかり遠心力を受けた箒は、軌道そのまま、空へと舞い上がったのだ。無論、柄をしっかりと握っていた双羽も一緒。獲物が急に制空権を脱してしまい、焦った虎もどきの鳴き声が聞こえる。

箒はそのまま上昇を続け、奇形の木々を超えたあたりで停止した。仮に虎もどきが木を上ってきてても、ここならば届かない。それを確認したうえで、とりあえず双羽は箒の上へよじ登ることにした。さすがにぶら下がりはなしはキツイものがある。

……四苦八苦の末、なんとか箒に跨ることに成功した双羽。本来懸垂の類は苦手なのだが、不思議とこの箒から落ちる気だけはしなかった。

「……わあ、すっごい景色……」

どこまでも続く青空と、緑の草原。その境界線には先ほど見た山脈が裾を伸ばしていた。この森は大した広さではないらしく、どちらを見ても似たような景色が続いている。

しばらく雄大な景色を楽しんでいた双羽だったが、ふと思ふことがあった。さつきから足下で吠えてる虎がうるさい、ではなく。

「これからドーしょ」

……景色を眺めたことで判明した事実。すなわち、今日中に家へ帰りつける可能性がほぼゼロとなってしまったことについて、だ。

見た感じ電車が走ってそうな気配は無い。というか、そもそもここはどこなのだろう。日本にこれだけ広い平野があったのなら、人口密度なんてそう社会問題にもなっていないはず。ならば、考え得る可能性は二つ。ここは日本ではないどこか別の場所なのか、もしくは夢幻の類か。

「……いでで」

常套手段ということ顔の一部を振りあげては見たものの、やっぱり痛い。夢の線は無さそうだ。かといって、ここが家から遙か遠いどこかというの信じがたい話ではある。ワープ航法なり時間移動なりできるようになった覚えはない。あとそろそろ目の錯覚とも言い難いあの太陽、いつから分身の術を修得したのだろう。

結論、なにがどーなったのかさっぱり分からない。

「……とりあえず、動こつかな」

ここで悩んでいても何かしら解決する見込みは薄そうだ。とにかく動かなければ、比喩表現でなく日が暮れる。

「この筈って、やっぱり飛べたりするのかな。うーんと、……進め！」

すす、つと、筈は滑るように動き出した。そのまま加速を続け、周囲の景色が流れ始める。異様に安定した重心もあって、念じれば念じただけ筈の速度は上昇していく。……非常に、楽しい。

風の抵抗を避けて伏せ、流れていた景色が溶け始めた頃になって、双羽は前を見ていなかったことを思い出した。まあこの高さならそつぶつかる物も無……

「う、わあっ！！？」

……間一髪、一本高く伸びた木を避けた双羽。あまり左右に枝を伸ばしていない木で助かった。

「も、もーちよつとでミンチに……」

それはない。

「……ふう、危なかったー。安全運転、安全運転」

気を取り直し、双羽は景色が認識できる程度の速度で飛ぶことにした。これでも歩くよりは相当早いはずだ。何度か眼下を謎の生命体を通り過ぎているのを見るに、徒歩ならば命の10や20では足りなかったらう。この筈には感謝感謝である。

流れる景色と生き物を楽しみながら、ゆるり空の旅を続ける双羽。

……この地で初めての出会いがすぐそこであることに、彼はまだ気づいていなかった。

## 第貳話 遭遇黒套・であいはくるまんと

ただひたすら広がる青い草原、そのど真ん中に、木が一本立っていた。

別に珍しいものではない。この草原ではごくごくありふれた木だ。あたりを見渡せば、所々にぽつんと生えているのが見えるだろう。少々変わった螺旋形状ではあるものの、この種の木ならばこれが普通なのだ。

「フフフ……」

……ただし、なにやら不気味な笑い声さえ聞こえなければ、の話だが。

「……獲物、発見……」

安心してほしい。いくらこの種の木といえど、こんなこと言うてるやつは断じて普通ではない。

……もし仮にこの声に気づいた者がよく見れば、声の主はすぐ見つかっただろう。明らかに違和感満載な黒い物体が、木の中腹に腰掛けている。もう少しよく見れば、それが黒いマントに身を包んだ小柄な人物であることも、はつきりと見て取れるはずだ。

ただし、何も知らない人間がこの光景を見ても、何の違和感も感じないだろう。今、黒マントの人物の“影”は極限まで薄くなっている。よく存在感が無くてスルーされがちな人があるだろう。これは、その極端なものだ。知らぬ人間がちらと見た程度ではもはや認識すらされない。

「……もうちょっと近づいたら、まずあれで仕掛けて……」

……で、何故この黒マントがこんなとこに潜伏しているのかといえば、まあ趣味とかそういう話ではない。有り体に言えば、金を稼ぐためだ。

この黒マント、実は旅暮らしである。して、旅するためには金がある、これ常識。よって、この場所で金になる“獲物”を待ちかま

えていたわけだ。ただし、その“獲物”は野獣や獣の類ではない。  
……人だ。無論普通の人でなく、“来訪者”<sup>ウィクマケテイ</sup>と呼ばれる者たちではあるが。

来訪者とは、本来“こことは別の世界”からやってきた者の総称だ。が、そもそも、こことは違う世界なんぞというものの存在を知る者はごく少数。一般に使われる“来訪者”は少々意味合いが違う。そしてその来訪者という言葉がどういう意味か説明するためには何故来訪者が金になるかという話からなのだがそれはとある国が彼らに懸賞金を長くなるので以下略。

初めに戻ろう。つまり、こういう経緯で黒マントはこんなところに潜伏し、飛来する影に歓喜していたわけだ。この辺り一帯は割と危険な野生動物が彷徨っているため、普通の旅人はまず通らない。ただ、この場所は地理的に様々な要所間の近道となっているのだ。そのため、“普通でない”旅人、つまり来訪者がやってくる可能性が高い。そう、黒マントは予想した。そして目論見通り、通常の飛行魔法の限度を超えた速度で飛来する人物を発見することと相成ったのだ。

……もうそろそろ、こちらの射程内である。

「……悪夢・万足百足マンフツヒャクジュ」

呟きつつ、右手を空の影へ向ける。特に何か光るわけでも、飛び出すわけでもない。が、一瞬の後、“見えない何かに反応して”空飛ぶ筈が急停止を掛けるのが見えた。

まずは第一段階、成功である。

……

目覚めた場所を離れ、気まま空の旅を続けている双羽。変わり映えしない景色には流石にそろそろ飽きてきたため、筈の動かし方をいろいろ試してみる。念じた通り動くというよりは、この筈が体の一部となっているような感覚だ。歩くのにいちいち足の動きを意識

しないのと同じく、前進を意識すれば何となく前へ進む。まだ多少動きがぎこちないのは、さながら付けたばかりの義足の様。多分、慣れればさらに微細な操作が可能になるはずだ。

曲がってみたり、回ってみたり、横滑りに縦回転、宙返り飛行ぐらいまでは一通り試してみた。現在は後ろ向き飛行の練習中。箒が自動で姿勢の微調整をしてくれるためか、思っていたよりはやりやすい。それでもやっぱり見えない方向に進むのは中々に難しく、集中力がいる。できるだけの高速飛行を頑張ってみたところ、1分ほどで箒がガタガタと揺れ始めた。さて一旦安定させようと前を向いた時、それはそこにあつた。

「わわわっ!!?!?」

反射的に急停止を掛ける。箒の操作を練習しておいて助かった。そう思いながら顔を上げた双羽は、たつぶり一秒ぽかんと間抜け面をさらすことになる。

まず視界を埋めたのは、真っ赤な鉄板だ。それが節を作つて長く繋がり、地上から双羽のいる程度の高度まで伸びている。節からはそれぞれ一対の中折れ丸太棒。上を見れば、先端には巨大な黄色いハサミが生えている。どこかで見たことのある、このフォルム。もちろん虎じゃない。

「ムカデ……」

そう、ムカデだ。少々大きすぎる気もするが、まあ形状そのまま縮めればそう珍しくない多節のアイツになるだろう。だいたい縮尺にして1:1000といったところか。……やっぱりデカすぎる。

「変な虎もいたし、変なムカデがいたつていいんだけどさ……」

しかし双羽も落ち着いたものだ。先の虎のせいでどこか感覚が麻痺しているのかもしれない。……そのお陰かどうかは知らないが。

「……あれ?」

双羽は、とある違和感に気づく。これだけ大きければ当然なぎ倒されているであろう、草原の草だ。無論、ムカデの胴体はぽつぽつ生える雑草を横へ押しつけ鎮座している。しかし、当然この巨大生

物が移動したときに残るであろう跡らしきものが、無い。違和感はまだある。さつき双羽は後ろ向きに飛んでいた訳だが、だからといってこの巨体の移動音に気づかないなんてことがあるだろうか。こいつの登場は、いささか突然すぎた気もする。

「じゃ、確かめよつか」

箒の先をムカデに向け、少し前傾に構える。ムカデはゆっくりと首を伸ばしてきたが、遅い。滑るように飛び出した双羽は、ムカデにぶつかる寸前、箒を横向きにした。そのまま横滑りを応用し、ドリフトよろしくムカデの側面ぎりぎりをかすめ飛ぶ。

もしムカデが“実体であるならば”、真つ赤な甲殻には位置を微調整された箒の先端が激突したはずだ。しかし、箒は止まらない。これで双羽は確信を得る。

お次は真つ正面からの、突撃。結果、双羽は無傷でムカデを貫き、あれだけ存在感を放っていた巨大ムカデはぱつと霧散した。

「やっぱりねー」

ムカデは、幻。疲労が見せたにはリアルすぎるあの幻想は、先の虎と同じくこの場所故のものなのだろうか。

……とりあえず、この場所から離れよう。そう判断した双羽の目に、またも訳の分からないものが映った。

「あ、蟻……??」

数え切れないほどの、蟻の大群。いつの間にやら完全に包囲されている。しかも先のムカデほどでないにせよ、皆巨大だ。一匹につき車一台分はある。それが“空中から”ワラワラと押し寄せてきた。「……蟻って、空飛んだっけ……?」

まあ、普通は飛ばない。がしかし、ここは虎が角張ってたりムカデが消えたりするような場所だ。もう何があったっておかしくはない。

もちろん、あの蟻もムカデと似たようなものだという可能性はある。あるのだが、それを確かめるためにあのワラワラ集団に突っ込むのはいかなものか。もし仮に本物だったりすれば目も当てられ



ない。

ならば逃げるのみだが、180°包囲されているため逃走先は上か下。どちらでもあんまり変わらない。

「んじゃ、木があるし下！」

上へ行つてジリ貧よりも、ちょうど一本ぽつんと生えていた木に活路を見いだす。地面に降りてしまつてはこちらの利点である機動力が損なわれるため、木の中腹めがけて全速力の直滑降。

直後、ちょうど目標としていた地点に、人がいた。現れたのでない、今、いることに初めて気づいたのだ。黒いフード付きマントで頭まですっぽり隠れた、見るからに怪しい人物。

「え、誰？」

「な、なんでこつち来るの！……呪術・金縛り」

「わっ！？」

ぴしつという幻聴と共に、突然双羽は停止する。全身の筋肉が見えない力に押さえ込まれたような感覚。体の自由がきかない。

……が、停止したのは双羽だけであつた。箒は、止まらない。

「え、ちょ、なんで止まらないの……！？」

「いや、そんなこと言われても」

予想外の事態だつたのか、固まる黒マント。そしてそもそも動けない双羽。そのまますっ飛ぶ箒。

なんだかぐぐつと体感時間が引き延ばされて、相手の姿とか色々よく見える。マントの影からちらと顔が見え、ああ、女の子だつたんだ、ということに気づく。

……数瞬後、両者は正面から激突したのであつた。

## 第参話 何故召還・ことのあらまし

遙か深い暗闇から、意識が立ち上ってくる。何か夢を見ていた気がするが、いまいち思い出せない。

薄く目を開ける。瞬間、目を射た光によって視界が真っ白に染まった。思わず目を瞑ったあたりで、何故自分がこんな風に微睡まじろんでいるのかを臆おぼろけ気と思いつく。

確か自分は、路銀を稼ごうと“来訪者”を待ち伏せしていたはずだ。で、うまく遭遇できた。そこで攻撃を仕掛けたは良かったが、何故か相手はこちらに突っ込んできた。止めようとしたがどうしてか相手は止まらず、やむなく正面衝突。それでもって意識がフェードアウトして……

……寝ている場合ではない。急いで起きなければ！

「ぶぎゃっ!？」

「……! ……い、痛い……」

寝ていた体を慌てて引き起こした瞬間、自分をのぞき込んでいた顔と激突。勢い余って相手は草むらの向こうへ転がっていった。こちらもジンジンする額を押さえてうずくまる羽目となる。なんとも今日はよくぶつかる日だ。

「……じゃなくて、あいつはどこ……?」

こちらから攻撃を仕掛けた来訪者が、近くにいるはず。しかし、周囲にそれらしい姿は無い。……と、いうことは。

「いたた……そんな急に立ち上がるなんてさ……」

今さつき転がっていった人物がそうに違いない。敵意とかそういうたものは微塵も感じられなかったが、とりあえず戦闘体勢をとるのそのそと起きあがった相手は、そんなこちらを見て目を丸くした。一体何を驚いているのだろう。

「えーと……「じ」ごめんなさい?」

「……は?」

なにゆえ、ここで“ごめんなさい”なのか。一瞬こちらを油断させる手かとも思ったが、それならもつとやり方があるだろう。それに、今相對するこの若い人物にそういつた雰囲気は無い。そもそもこちらより先に起きていたのだから、その気なら拘束するなり何なりしているだろう。

「……ごめんなさい、つて、なんで？」

「え、だって君さ、なんか怒ってるじゃんか。だからさ、さっきぶつかったのを怒ってるのになつて、だから……」

「……別に、怒ってはないけど……」

そもそも、こちらに気づいたゆえの突撃だと思っていたのだ。しかしどうやらそうではなかったらしい。つまりあれは完全に事故だった、と。

「えと、ぶつかったの、わざとじゃないんだよ？　なんかでっかい蟻がいつぱい襲ってきてさ、それで木に向かって逃げようとしたらちよつと君がいて、それで避けようとしたけどなんか動けなくて、それでぶつかつちやつたんだ」

……実に不必要な一ミラクル（奇跡）だ。

「えーと、それでさ、ちよつと気になつたんだけど。君なんでこんなところにいたの？」

「……それは……」

まさか来訪者を待ち伏せていたとは、さすがに言えない。どうも気づいていないようだが、こちらも来訪者であることがバレれば攻撃してくる可能性だつてある。

「……実は僕さ、ここがどこか全然知らないんだ」

「え？」

「こんなこと言つて信じてもらえるか分かんないんだけど、昨日まで僕全然別のところにいたんだよ。それが今起きたらこの草原のど真ん中でき。もう何がなんだか。……で、もし良かったら、ここがどこかとか教えてくれると嬉しいなー、なんて……」

「……それは、別にいいけど……」

「え、ホント!? やった、ありがとー!」

「……………」  
にわかには、信じられない話なのだ。普通の来訪者がこの世界について知らないなんて。それは本来、あり得ない話なのだから。

しかしこの少年が嘘をついているようには見えないし、つく必要も無い。ならば”本来の意味での”来訪者かとも思ったが、それもおかしい。呪文を必要としない魔法、当たり前のように通じる言葉。これらはどちらも来訪者の証なのである。

「えーっと、僕、把臥之 双羽、っていうんだ。君の名前は……………」

……………まあとりあえず、彼は敵ではなさそうだ。こちらから仕掛け  
ておいて調子のいい話ではあるが。今のところ、それだけ分かれば  
十分だろう。ひとまず、考えるのは後回し。

「……………私は金峰かなみね 夕依ゆいよ。よろしく」

名乗られれば、名乗り返すのが礼儀というものだ。

「じゃあ……………カナちゃん、だね!」

「……………」  
名乗って3秒。さっそく、この少年が軽く変人であることが判明  
してしまったのであった。

……………

「……………まず、ここがどこかという話からだけど……………」

今しがた知り合ったばかりの少女が、説明を始める。

……………この夕依という人物の特徴。なんとと言っても、少々サイズの  
大き過ぎるフード付き黒マントだろう。今の日本じゃ見かけること  
なんぞまず無いであろうそんな服、少なくとも女の子に似合うもの  
ではない。

フードさえ被っていなければ、問題無く美少女の部類に入るだろ  
うに。

「……………ここは、地球じゃないの。……………と言ったら、信じる?」

「信じない、って言うてたら話進まないんでしょ？」

「……そうだけど。順応早いわね」

ある程度順応性がなければ、こんなところにほっぽり出された時点でどうにかなっている。

「ついさつき虎さんに食べられかけたところだからね。もう大抵のことじゃ驚かないよー」

「それは……良かった……？ ……ええと、とりあえず、把臥之くんが知らなさそうなこと、まとめて話すけど、いい？」

「途中に質問挟むの有りです？」

「別に、構わないけど……」

「それじゃ、お願いします先生！」

「せ、先生……」

初めは素っ気ない人だと思っていたが、どうも違うらしい。単に無口なだけなのか。軽口にいちいち反応するあたり、ちょっと楽しい。

「……話、進めるわよ」

「はい」

さて、これで問題が解決するといいいのだが。

……

「つまりここは異世界で僕は選ばれて召還されたけどそこは魑魅魍魎のサバイバルやっほい、ってことで大体あってる？」

「……間違っただけとは言っていないけど……」

まあ、一言でまとめるとつまりそういうことだった。

……とはいえ、これだけではなんのこっちゃだろう。具体的には、こうだ。

まず、ここは異世界。東京とか大阪とか日本とか、もしくは地球とかともさっぱり違う別の世界。もしかしたら宇宙のどこかそのあたりかもしれないし、それ以前の全然違うところかもしれない。剣

と魔法の支配する、絶賛中世ファンタジー空間。とりあえず、そんな場所。

……で、なにゆえ双羽がそんなところに来たのかといえば、ズバリそれは“呼ばれた”から。俗に言うところの召還というやつだ。ちなみに、こうして呼ばれた者のことを一般には“来訪者”と呼ぶらしい。

その召還をやらかした犯人は、ひとつの国。“ベンフィード公国”という歴史ある小国なのだが、とある理由のため影響力と軍事力は高い。この国が、双羽だけでない、実に数千人もの青少年をこの世界へと呼び寄せたのだ。一度に全て、ではない。おおよそ2年以上かけて、順次この世界へと引き入れた。

そして、それら呼び出した来訪者に、ひとつ“魔法”を与えるのだ。通常この世界で使用される魔法は“呪文”を必要とする。しかし、このとき与えられた魔法はその必要も無く、また非常に高性能だ。

何故、わざわざこのようなことをするのか。はっきりとは分からないのだが、どうやらこの国、強い者が欲しいらしい。召還した若者に“ベンフィード公国まで辿り着ければ元の世界へ帰す”と言いつつ、彼らに対する懸賞金を掛けているのだ。選別、なのだろう。ご丁寧に、来訪者の血と混ぜれば発光する判別用の薬品まで準備している。

「へー、そーなんだー」

「……ほんとに知らなかったのね……」

……これら全て、本来ならば召還した際に伝えられること、らしい。気がつけばこの世界にいて、そしていつの間にか上記の知識を得ている。これが、普通の来訪者がこの世界に降りたった直後の状況だ。これだつて混乱することに変わりないだろうが、双羽の場合はそんな説明すら無し。“箒”の魔法も偶然発動したから良かったものの、そうでなければ何も分からないまま食物連鎖に組み込まれて終了だった。これは、明らかなるイレギュラーである。

「……とりあえず、僕はそのベンフィード公国つてとこ目指せばいいんだよね？」

「そうよ。……ただ、他の来訪者には気を付けないといけないのと同じ目的地へ向かってているのだから、かち合う可能性は決して低くない。とはいえ同じ境遇の者同士、協力すれば問題無さそうなもの。ただ、ここで問題なのが、着の身着のままこの世界に連れてこられた来訪者の“懐具合”なのだ。無論、旅をするには金がいる。よって、協力するよりもひつとらえて引き渡し、その高い懸賞金を路銀に充てようとする来訪者が多いのだ。この要因ゆえ、今この世界は来訪者同士のサバイバルゲームと化しているのである。

……ちなみに余談ではあるのだが、この説明をしてくれた夕依も来訪者なのだから。道理で詳しいはずである。

「……大体このくらいよ。……他に、聞きたいことある？」

「うーん、無いことはないけど……ま、今聞いたってしょうがないことばかりだもんね」

「……？」

そもそもなんで言葉通じるのかとか、なんか太陽ふたつあるっばいんだけどそれについてとか、まあ他にも聞きたいことは色々あるのだが、まあ今のところ自分の境遇が分かったあたりで良しとしよう。

この世界で初めて遭遇した人物が親切な人だったことに、感謝感謝。

……とまあ、双羽は夕依が自分と遭遇したそもその理由を知らないわけだが。世には知らない方がいいことだってたくさんある。

「それで……把臥之くんは、これからどうするの？」

「んー、できればカナちゃんについていきたいんだけど……」

「……その、カナちゃん、って……」

「かなみねちゃん、略してカナちゃん、だよー」

初対面の人にはまずニックネーム。呼びかけやすさはそのまま親しさに繋がる。双羽流対人術の基本だ。

「……まあいいけど……」

「……えと、どっちが？」

「どっちも。ついてくるのは構わないし、その呼び方も……まあ、別に気にしないから」

「ありがとう」

いくら自分の境遇が理解できたといつて、それでいきなり自活しろ、はあまりにも厳しい。

とりあえず、少なくとも双羽よりははるかに旅慣れてそうな夕依と行動を共にする。これが今現在の最良選択だろう。

「で、これからどっちに行くのー？」

「今の時間なら……もう、ここで野宿した方がいいわね……」

「あれ、もうそんな時間？ まだ明るいのに」

確かに片方の太陽は地平に近いが、もう片方は斜め上30度くらいだ。……というか、太陽ふたつのこの状況で暗くなることなどあるのだろうか。

「……時期によって違うけど、今はあの上の太陽が速いのよ。あのくらいなら……ほぼ、同時に沈むはず」

なるらしい。時期によって太陽の速度が違うというのも中々に面白い話だ。

「……私は、ここでテント張るから。把臥之くんは、薪 集めてきて」

「薪、つて、どこから？」

わりかし見渡す限りの草原である。初めに逃げ込んだ森も遙か遠い。

「木の枝みたいな草が、あちこちに生えてるの。……飛べるでしょ。上から探せば、見つけやすいはず」

「へえー」

変わった草もあったものだ。

が、まあなんと言ったってここは異世界。何があっても驚くに値しない。木の枝っぽい雑草のひとつやふたつ、どんと来いだ。



「んじゃ、行ってくるねー」

「……暗くなる前に戻ってこないと、迷うから」  
「りょーかい！」

元気よく返事一発、箒を構え、空へと舞い上がる。夕依のいる木を中心として、円を描くように探す方向で。

……ここへ来て初めての、明確な目的を持った飛行である。内心の高揚感を糧に、双羽は箒を加速させた。

## 第肆話 初野宿夜・はじめてのよる

「……疲れた……」

元氣よく空に舞い上がった箒を目で追い、夕依はため息をひとつ。テントの入ったバッグは木の裏側に隠してある。が、彼女はそのまま地面にぺたんと座り込んだ。地平近く、太陽の沈みゆく姿を目で追う。

……あんなに長々と他人に話をしたのは久しぶりだ。比較的無口という性格も、まあ原因の一端だろう。しかしそれ以前に、ここ最近信用できる人間と出会わなかったことが大きい。1年半ほど前からこれまで、夕依には信用のおける人物というものが存在しなかった。

無論、状況だけを見るのならば、双羽だって決して全面信用できる相手ではないはず。

ただ、なんだろう。

「少し、休みたい……」

長いひとりぼっちに疲れた自分。そして、どうも裏があるようには見えない双羽。

……ここはひとつ、自分の人を見る目に賭けてみようではないか。しばらくの間、行動を共にする。どうせ今の彼女の旅の目的など、あつてないようなものなのだから……

「……テント、張らないと」

なんだか仕切るような命令をしておいて、こちらが丸サボリというわけにもいかない。幸い手慣れたテントの設営だ。少々のおんびりした今からでも双羽の帰りには間に合うだろう。そんなに慌てず、木の裏からテント用具一式を取り出した。

……まず、テントの底面積に合わせて地面にピックを打ち込む。本来テントの底布によって位置を測るべき作業だが、そこは長年の

感覚でカバー。年単位ではほぼ毎日使っているテントだ。見なくたって広さくらい分かる。

次に2本の支柱をしなければ、ピックに両端をひっかける。これでテントの概形は完成。あとはこれに天布を被せ、内側から防水シートと支柱保護用の布を設置すれば……

「……あ」

そこで、夕依の手が止まる。テントの体積がはっきりしたあたりで、ある重要な事柄に気づいたのだ。

「ちよつと、狭い……」

このテント、一人用なのだ。一応、荷物を置くスペース程度は確保されている。が、人間ふたりが寝るだけのスペースとしては、ちと厳しい。もちろん、詰めればそれだって不可能ではないだろう。

……しかし、ここでまたひとつ問題がある。

金峰 夕依、年齢14才。ここ最近少々特殊な人生を送ってはいるものの、歴とした思春期の女の子である。つい数時間前に知り合った男の子とくつついて眠れるほど、太い神経はしていない。

「……忘れてた……」

外で寝るという選択肢は、無い。この草原は昼夜の気温差が大きいのだ。十中八九、夜に体温を奪われ、朝露でびしょぬれになって目覚めることになる。……そもそも、目覚められるかどうか自体が怪しい。

……結論、羞恥心が為に命を危険さらすのは得策ではない。しかし、体面というかプライドみたいなのもやはりまた重要なわけで……  
「うう……」

一緒に旅するなんて、軽々と承諾しなければよかった。早速夕依の脳内に後悔が渦巻き始めたころ、その根本原因が帰還した。

「薪、集めてきたよー」

「……お疲れさま」

「あれ、なんだか元気がないね。どーしたの？」

「よく分かるわね……」

尻すばみな細々とした話し方は生まれつき。さつきと今とで、それほど雰囲気を変えたつもりも無かったのだが。

「……えーっと、あ、これテント？ まだ途中だよ。手伝うよー」

「あ、ありがとう……」

さて、どうしたものか。今更彼をテントの外へと追い出すというのは流石に気が引ける。

かといって自分が外で寝るわけにもいかないわけで、それなら一緒に寝るのかってそれは無理なのだからそれなら双羽にやんわりとお願いしてっただからそれも無理だからあれ堂々巡り。

「……ほんと、大丈夫？ 顔色悪いよ。さつき変なところつけたんじゃ……」

「だ、大丈夫、なんともないから」

……悩んでいても仕方ない。ここは、なんとか話を進めよう。

「……その、実はこのテント、一人用なの。だからちよつと狭くて、把臥之くんまで入れないのよ……」

「うーん、それは困ったね……」

詰めれば入れる、ということは敢えて伏せておいた。もし言ってしまうはこの少年、そんなこと気にしないよー、とかのたまいそう。だ。なんとなく、それは確信できる。

「うーん、この広さなら、なんとか詰めて寝れないかな？」

「……う」

即、気づかれた。

「そ、それは……」

「……えーとさ、とりあえず、テント組み立てちゃおうよ」

一理有る。このままグダグダしてたってテントは勝手に建たない。日も落ちてきたことだし、考えるよりもまず寝床を作ってしまうおう。

「……それなら……このシート、テントの底に張っておいて」

「はい」

……寝るときの問題は、寝るときまで後回しにすることにした。

「あ、これおいしいね」

焚き火に薪を一本放り込みながら、双羽が感嘆の声を上げた。手に持っているのは円柱形の木の容器。中身はこの地方の伝統料理だ。確か名前は……

「それは、“マダンチャセ”っていう料理よ」

「……まだんちゃせ？ 変な名前」

「この世界の古い言葉で、“腐らない食べ物”、って意味だったと思う。すごく日持ちがいいから、旅人がよく食べるの」

「へー」

ただし封入されている器の形状ゆえ、かさばるのが難点だ。

「大量に持ち運ぶと邪魔だから、一人の長旅には向いてないけど」

「……あれ、一人の長旅、じゃなかったの？」

「歩いて一日くらいのところに町があるから。……最近は、そこを拠点にしているの」

「んじゃ、明日はそこへ向かうってこと？」

「そう」

まずはその町まで戻る。これは決定事項だ。その先どうするか、軽く予定を練り上げておく。

……旅の道連れが増えたので、とりあえずは食料と生活物資の買い足しか。最終目的地は双羽任せになるわけだが、十中八九ベンフイード公国だ。ならば北部の森を抜けて港へ入り、貨物船にでも乗せてもらうのが吉。

いや、ひとつ寄る場所があった。この地を離れる前に、一度行っておこう。申し訳ないが、双羽にも同行願いだ。

「ふああ……」

「う……」

双羽の大あくびが聞こえ、思考の波から引き上げられる。そうだ、

寝なければいけない。後回しにしていたあの案件だ。

「えと、その、把臥之く……」

「……できた！」

「……え？」

ふと横を見れば、双羽がいない。見回してみると、あの変な木の横に浮かせた箒の上で座っている。そんな彼の横、地面から半メートル程のところに揺れるのは。

「……ハンモック？」

「そだよー。毛布にくるまればそこそこ暖かいし、朝露なんかで濡れたりもしないしね」

材料の出所が不思議だったが、その疑問はすぐ消える。あのハンモックの網。あれは夕依がいつも持ち歩いてる荷まとめ用ロープだ。……というか、何故そんなもの作れるのだ。

「それじゃ、僕はこっちで寝るねー」

一度降りてきた双羽は、テントから予備毛布を引っ張り出すと靴を脱いでハンモックへよじ登る。

こちらの都合である以上、夕依は自分がハンモックでも良かったのだが。なんだか強引に決定してしまった。まあ、双羽自身がいいと言っただから別にいいのだろう。

食事道具をテントに放り込み、夕依もテントに入ろうとしたあたりで、双羽から声がかかった。

「あの一、カナちゃん」

「……なに？」

「あのさ、ランプとかそーいうの、無い？」

どうやら双羽、光源が欲しいらしい。どうせ今から寝るだけだというのに、何に使うのだろうか。

「あるけど。……はい」

「ありがとー」

荷物から予備の魔法光源を取り出す。なんとファンタジーなネーミングだが、外見は至って普通の手提げランプ。内部構造なんか

もほぼ同じだ。違うのは発光装置が魔法由来で、あまり熱くないというところぐらいだろうか。

「操作方法は底に書いてあるから」

「りょーかい。えーと、このつまみを回して、それから発火棒を引いて……」

ボウ、とランプに明かりが灯る。それを見届け、夕依はテントの中に引っ込んだ。

「おやすみー」

「……おやすみ」

こんなやりとりさえ、懐かしさを感じる。思っていた以上に自分には人恋しかったようだ。

そのまま毛布にくるまり横になった夕依は、ちょっとしたことを思い出した。が、疲労が彼女の意識を安眠へと引っ張る。眠たい。寝よう。

どうせ今から眠るのだ。……あのランプの燃料が残り僅かだなんて、些細なことである。

## 第五話 草原独町・そうげんのみち

双羽との出会いから一夜明け、清々しい草原の朝。ふたりは最寄りの町へ向かって移動していた。

湿っている長草が鬱陶しいが、夕依の靴にはしつかりとした防水加工が施されている。この程度じゃ濡れやしない。

対する双羽、靴に防水機能は無いものの、箒で軽く浮いていた。

……これは、セコい。

自分の足で歩けと言いたいところだ。が、当の双羽は。

「……zzz」

……寝ていた。それも細い箒の上で、ぐっすり器用に爆睡中。どうも昨日は眠れなかったらしい。

その理由を聞くと、逆にランプの燃料が少なかったことについてやたらと文句を言われた。何故だろう。

ちなみに、箒自体は双羽に乗せたまま勝手に夕依の後ろを付いてきている。自動操縦可能とは便利な箒だ。

それにしても、暇である。

同行人はちよつとやさつとじゃ起きそうにない夢の中。周囲は見渡す限りの草原だ。これでは一人旅と何も変わらない……

「……！」

……ふと、左方の草むらに殺気を感じた。

何マンガみみたいなことを、と思うかもしれない。しかし、年単位でリアルサバゲーに放り込まれてきた夕依にとって、それは慣れた感覚。

差し向けられた明確な意志というものは、ときに五感を震わせる。思えば、これこそが第六感というやつなのかもしれない。

「グルルル……」

「……マウザンナウイ、ね」

マウザンナウイ。角張った猛獣、という意味の言葉だ。たった今



その草陰から現れた獣を表す名でもある。

その性質は、獯猛かつ凶暴。群は作らないのだが、絶対数が多く遭遇しやすい。普通の旅人がこの草原を敬遠する最大の理由である。つまりここ双羽がこの世界に来た直後出会ったアイツなのだが、まあ夕依がそんなこと知るわけない。

「ガアアッ！」

マウザンナウイが牙をむく。子供のひとりやふたり簡単に串焼きにできそうな、長く鋭い犬歯。それはこの猛獣にとって、人という生物が食料に過ぎないという事実を示す。

「ガアッ……………」

「……………悪夢・火事の素」

「ガ、ガウ……………!?!?」

さて飛びかかろうか、という姿勢で、突然マウザンナウイは動きを止めた。何かに怯えた様子で、周囲を見回す。

きっと今その視界には、草原を焼き尽くさんばかりの火の海が広がっているはずだ。

「……………野生動物は、火を避ける」

「ガウ、ガアア……………!!!」

六角形の瞳に幻の炎を映し、角張った猛獣は草原の中へと消えた。それと同時に夕依の魔法も解除される。

……………彼女の魔法。相手に幻影を見せる、その名も“悪夢”だ。厳密には見せるだけでなく、五感全てに認識させることができる。例えば先程の炎は、見る者に熱気すら感じさせたはず。

つまり、野生動物対策にはもってこいの便利な魔法なのだ。

「……………そういえば……………」

後ろの双羽はどうしているだろう。それほど激しくドンパチやっただけではないが、マウザンナウイは結構吠えていた。起きていても不思議は無い。

「把臥之くん……………」

「……………すー……………」

やっぱり寝ていた。起きる気配は無し。……まあ、なんとなくそんなことだろうとは思っていたが。

静かに寝息をたてる少年の寝顔を一瞥し、夕依はまた歩き始める。今日も草原の風は強かった。

……

「……着いたわよ」

「……むにゃ……くう……」

「……」

「みぎゃあああつ!!?」

突如こめかみを襲った強烈な痛みによって、双羽は現実世界へと引きずり出された。痛い、ズキズキする。

……というか、今いったい何をされたのだろうか。少なくとも、抓った程度の痛みではなかった。

「え、っと……」

「……町はすぐそこよ。見られるとマズいから、箒から降りておい  
て」

「は、はい……」

見れば、わりかしすぐそこに茶色い建物群が見えた。あれが町だろう。

ひよい、と箒から飛び降りた双羽は、そのまま箒をポケットに突っ込んだ。仮にも懸賞金の掛けられた身の上である。人前では、来訪者であることを特定されかねない“呪文無し”魔法の使用は控え

……

「ちょっと待って」

「……ん、どしたのカナちゃん？」

「今、何かおかしかったんだけど……」

そつだろつか。夕依に言われたとおり箒から降りて、そのまま箒を片づけただけ……

「そこよ！　なんであんな大きな箒がポケットに入るの！？」

「ちつさくしたんだよ」

「なるほど……って、なにその便利能力」

「すごいでしょー」

どうやらこの箒、大きさを自在に変えられるらしい。今朝方、遠くの薪を取るうとした際に発覚した事実だ。手を伸ばすと箒が一緒に伸びててちよつと焦った。

機会があれば、一度どこまで大きくなるのか調べてみようか。縮小に関しては、見えないくらい小さくできることが確認済みである。……それじゃ、私は少し用事あるから。把臥之くんは先に宿に行つておいてくれる？

「え、宿屋って……」

そんなもの、いきなり言われても困る。場所だつて分からない。

「……大丈夫。あの町、宿は一軒しかないから」

「うーん……だけど、僕ひとりで行つて大丈夫なの？」

「この札持つて行けば、私の借りてる部屋には入れると思う。ダメなら……宿屋の前で待つて」

「はい」

手のひらサイズの木札を双羽に渡し、夕依はふつとどこかへ行つてしまった。まあ町の方角ではあるので、このまま置いてかれるということはないだろう。というか、少々の用事ならつきあつても良かったのだが。

まあ、いいと言つただからいいのだろう。そう納得し、双羽も町へ向かうことにした。

数分で低い柵に囲まれた建物群にたどり着く。

「えっと、ここが入り口だね。……へー、この町、エサンっていうんだ」

町の入り口とおぼしき木の簡易門と、町内の簡単な見取り図を発見。幸い、町に一軒だけの宿も明記されていた。この入り口が南で、目的の宿は町の南東部。町自体かなり小さいようなので、普通に歩

いてもそれほど時間はかからないだろう。

「…………あれ」

さて、ここまで自然に地図見て場所確認してたわけだが。改めて、地図を見る。

…………残念ながら、こんなフニヤフニヤした文字を学習した覚えはない。しかし不思議と読める、というより、文字の“意味”がダイレクトに理解できる感覚。

これも召還とやらの効果だろうか。だとすれば、なんとも便利なものである。世の語学塾涙目な超高効率勉強法ではないか。

「…………アメリカに召還されてたら、英語話せるよーになつてたのかな…………」

それならいつでも英語のテスト満点取れたのに、などと考えながら、双羽は町へと足を踏み入れた。

この町の建造物は、大体煉瓦のようなブロックを積み上げて建てられているようだ。濃い茶色のブロック塀が並ぶ町並みは、どこか小綺麗である。この場所が、少なくとも日本ではないどこかなのだということ再認識させられる光景。

通りにはそこそこの数の人がいるのだが、特別双羽を注目する人間はいない。召還されたときから勝手に着ているこの服、特に目立つ類のものでもないらしい。似たような服装を見かけないことからすると、旅装か何かなのだろうか。あとで夕依に聞いてみよう。

「あ、あつたあつた。ここかな」

デフォルメされた“宿屋”を示す文字に、丸っこい樽マーク。十中八九ここで間違いないだろう。

カラン、と軽い音を響かせて、これまた軽い戸を押し開ける。…瞬間、数多の視線が双羽を貫いた。

「…………え、と」

大工っぽいゴツイおっちゃんや、細身に似合わぬ威圧感を備えた青年等々。肉体労働上がりと思いき方々からの、“誰だお前は”的な視線が双羽に殺到する。なんで宿屋にこんな敵つい人たちが集結

しているのか。

自然固まるこちらを見据えながら、おっちゃんBが手に持った木のカップをぐいっと傾ける。そういえば、なんだか酒臭い。

……なるほど、あの樽マークは酒場を示していたわけだ。ファンタジーにありがちな宿泊施設付きの飲み屋さん。日も沈み掛けたこの時刻、少々パワフルな方々の溜まり場になっただけでもおかしくない。

「ま、間違えましたー……」

入ってきた動きの逆再生で宿の戸を閉じる双羽。ちら、と店の奥に階段と上向きの矢印が見えた。

どうやら2階が宿泊スペースのようだが、あの集団を抜けてまでして奥の階段に進むだけの気力は今のところ無い。素直にここで待つことにしよう。

それにしても、夕依はよくこんなところで寝泊まりできるものだ。旅慣れるとはそういうことなのだろうか。いくつもの宿を巡り、厳しい兄ちゃんからのプレッシャーなどものともしない……いや、違うか。

「やること、無くなっちゃったなー」

宿に入れなかった場合は前で待つよう夕依に言われている。が、この宿の入り口はメインストリートから一本中に入った路地だ。人通りもまばらで、特に人間観察なんて類の趣味の無い人間にとってはこの上なく暇な場所である。

ひとつだけ幸いなのは、座る場所に困らないことだ。目立たないサイズまで大きくした簾に腰掛け、双羽は思考を巡らせる。イスの背代わりの宿の木壁が背中に冷たい。

「ここ、どこなんだろう……」

……元いたのとは違う剣と魔法の世界のイサンという町の宿屋の入り口を出て3歩。説明すればこうなるし、少なくともこれは日本にいた頃の双羽が日常持っていた位置情報よりも余程詳しいはずだ。彼の口をついた疑問は、そんなことではない。

例え今いるのがリオデジャネイロだろうと月面だろうと、この感覚は生まれないだろう。どちらかと言えば、4才か5才の頃、いつもより遠出した近所の路地でさまよっていたとき感じたものが近い。漠然とした不安感。ホームシック、と言ってしまえば語句説明に60点がつく。

「ふああ……」

なんだかどつばにハマリそうなので、そのあたりで思考を切り上げた。単独で悩み込むのは双羽の悪い癖だ。今度、夕依にでも話してみようか。

なんだそれという顔をされるかもしれない。それでもまあ、この世界で今のところ唯一の知り合いである。こんな訳の分からないこと言い出せるのは彼女くらいしかない。

そういえば、夕依の用事とは何だろう。旅の用具を新調するとかなら、双羽も同行すべきだったのだが。それに……

「……カナちゃん？」

こめかみ、もしくは額の内側がぴりつとする感覚。明確な理由も無く、ただ行動とそこへの衝動が体を包む。長年久しく錆び付いていた、動物的直感だ。

そして双羽は知っている。この感覚が、後に圧倒的根拠をもって納得されるものだということ。

「こっち、だね！」

従って、双羽は走り出した。体の引かれる方向へ足を出し、走り、角を曲がる。

前方から金属の衝突音が聞こえたあたりで、双羽は確信と共に速度を上げた。

## 第陸話 戦闘勃発・たたかいはいつもとつぜん

エサンの南門を見通せる高い建物の上で、彼は内心小躍りしていた。ホントは内心だけじゃなく全身で喜びを表現したいところだが、生憎足の下は見知らぬ民家だ。ガタガタやって、その住人にデカいネズミ退治をさせるのもなんだろう。

よって彼の喜びはその視線に込められ、町に近づく黒いシルエットにぶつけられていた。

「やあつと帰つて来たなあ……」

そんなこと呟く怪しい青年、彼は“来訪者”だ。他と同じく、彼もあの国を目指している。……が、ここに来て路銀が底をついたのだ。

こんな素性の怪しい旅の人間を雇ってくれる仕事場なんぞそうは無い。さてどうする、少しばかりいかかわしい護衛の仕事にでも手を出すか、と考えていたとき、彼はそれを目撃したのだ。

追いかけて遊ぶ子供たちがいた。彼らがメインストリートへと勢いよく飛び出したとき、運悪く乗り合いの魔動四輪が道を横切った。不幸な事故だな、と青年は思った。しかし、彼の予想は外れ、子供たちが四輪と衝突することはなかった。不自然にワテンポ遅れてメインストリートへ飛び出した子供たちは、一瞬だけ不思議そうな顔を見合わせ、そのまま遊びの世界へ帰って行く。

……しかし彼は見ていた。その奥の路地で、子供たちに手をかざした黒マントを。今のは、動きを止める魔法。しかも呪文無し。あの黒マント、明らかに“来訪者”だ。

これで、路銀が手に入る。“狩り”は初めてではない。この町に宿など一軒しかないのだから、泊まる場所だって割れている。

喜び勇んで一晩経ち、この町唯一の宿屋に忍び込み、彼は黒マントがすでに掛けた後だということを知った。

一時の遠出か、別の町への出立か。青年は昨日の自分の“どうと

でもなる”判断を後悔した。しかし他に選択肢は無い。彼は黒マントが町を出たという南門を張り込むことにした。3日経てば、別の行動を考える。

そうやって張り込んだその2日目に彼は黒マントを発見し、初めへ戻るわけだ。

「待あってなあ俺の路銀よお」

静かに建物から飛び降り、ターゲットを追跡する。どこへ向かうつもりなのか、町の西部、比較的寂れた地域へと向かう黒マント。まあこちらにとっても一般人が居ないのは好都合だ。

そのままいくつか角を曲がり、メインストリートの喧噪も聞こえなくなつたあたりで、黒マントがくるりと後ろを振り向いた。背の高さから年齢はなんとなく予想できていたが、フードの下に見えたのが少女の顔であつたことに少しばかり驚く。

「……その木箱の後ろ。分かつてるわよ」

さらに驚くべきことに、こちらの尾行はバレていたらしい。無論彼だって追跡のプロなどではないが、それは向こうも同じ。一般人が一般人の気配に気づくのはそれなりに凄じいことだろう。

「それじゃあ何だ、俺えをここに誘い込んだってえわけかあ？」

「……まあ、そうよ。……あと、その話し方、すごく聞き取りづらいいんだけど」

「生まれつきだあ、ほつとけえ」

誰が好きでこんな喋り方するものか。それに、文字に起こすと読みづらそうだが、聞き取る分にはそれほど問題無いはずなのだ。ここで文句を言われる筋合いも無い。

「……で、何の用なの？ まさかストーカー、とか？」

「まあそうとも言えるなあ。……少々質はあ悪いがあな！」

背中に隠した得物を、手前に構える。身長半分ほどの金属棒。特別なものではない、今朝方町の廃材置き場から拾ってきたものだ。それでも十分凶器になる。

「目当ては……懸賞金、ね」



「分あかってんじゃあないか」

対して黒マントは手ぶら。恐らくは魔法オンリーで戦うタイプだろう。この手合いには、とにかく距離を詰めるに限る。

両者間おおよそ10メートル。全力で走れば……

「……呪術・金縛り」

「おおっ！」

って何だと言う間もなく、ぴしっと体が固まる感覚。……が、動きを止める魔法の使い手であることは知っている。体の固定を感じると同時、手首の動きで思い切り金属棒を投げつけた。

「……！」

とつさに避ける黒マント。なかなかの反射速度だ。しっかり金属棒を視界に捉え、回避している。

……作戦通り。

「閃光う波！」

「っ！？」

黒マントの顔すれすれを横切る金属棒が激しく光った。それに注目していた黒マントの目には、強烈な光が焼き付いたはずだ。これで、あちらの視覚はしばらく役に立たないだろう。

こちらの位置把握ができなくなったためか、行動停止魔法も切れている。

反射的に目を覆う黒マントに向かい、全力のダッシュ。同時に一言呟き、左手の指輪に宿る魔法を発動させておく。

「クシデヌアヤニエノスアイムチトウエ、とお」

パチという軽い音と共に、指輪が微かな光をまとう。魔法がきちんと発動したことを確認した上で、左手を握りしめる。そのまま黒マントの懐まで飛び込み……

「ちいつと、寝とけえ」

「！ あ、ぐ……」

勢いそのまま左拳を叩きつけた。とは言えまあ打撃に関しては素人の一撃なワケで、これに相手を気絶させる威力は無い。……一瞬

遅れ、相手に押しつけられた指輪の放つ魔法が黒マントを貫いた。  
雷の魔法を封じた指輪、その名も“ビリビリの指輪”。触れた相手を麻痺させ行動不能にする便利な代物だ。黒マントの体が一瞬固まり、次いでくたりと崩れ落ちる。

この指輪、彼のような直接攻撃手段を持たない者には重宝する魔法道具である。使用回数に12回と制限があるが、まあそれで特に困ることもない。あと8、9回は使えたはずだ。

「いっちょおあがり、とお」

まずは投げた金属棒を回収しておく。次いで、よっこらせ、と黒マントを肩に担ぐ。見た目の体格通りの軽さだ。

あとはこのまま換金所まで連れて行き、自分が来訪者だとバレないように引き渡して……

「てえええいっ！」

「のぶおっ!？」

突如わき腹に衝撃を受け、換金の算段はそこで中断されてしまう。思わず黒マントを取り落としてしまい焦るが、こちらはこの衝撃の張本人がすっかりキャッチしていた。

「カナちゃん、大丈夫っ!？」

極々普通の旅装を纏った、髪の毛の長い少年だ。ここまで全力疾走でもしてきたのか、肩で息をしながらぐったりとした黒マントに呼びかけている。

「安心しなあ、そいつあ寝てるだけだからなあ」

「……そーなの？ よかったー」

初対面で口調にツッコまれなかったのは久しぶりである。この少年、なかなかのスルースキルを……

……じゃなくて。

「しいかし、そいつに連れが居たあとは予想外だなあ」

「会ったばかりだもん」

「そうかい。で、俺があそいつ連れてえこうつてえ理由はあ分かるなあ?」

「……そりゃ、ね。僕も“来訪者”ってやつだから、さ」

それも来たばかりの、だろう。この世界である程度生き永らえた来訪者ならば、そう簡単に自分の素性を漏らしたりはしない。

どうも今日はツイている。来訪者をひとりしとめたと思えば、そこに現れたのがまだ来たばかりの初心者だというのだから。……2人分の賞金があれば、このままベンフィード公国まで直行できるだろう。そうすれば、このろくでもないサバイバルともおさらばだ。「なるほど、それあつまりあれかい、俺にい懸賞金2人い分プレゼントってえわけかい」

「さーねー」

言いつつ、黒マントを地面に寝かせてこちらを向く少年。どうやらやり合うつつもりらしい。これで、最も恐れていた逃げの一手も無くなったわけだ。

自らの幸運に感謝しつつ、青年は再び金属棒を構えるのだった。

………

不覚だった。そして予想外でもあった。投げつけられた金属棒が閃光弾代わりだったことも、攻撃用魔法道具を使ってきたことも、だ。

金属棒については、まあ相手の作戦勝ちだしよう。しかし、来訪者が通常の魔法道具を戦闘に用いるのは珍しい。そんなものより余程便利な魔法を各自持っているからだ。まさか、そちらを補助に使ってくるとは思わなかった。

「（………まだ、動けない………）」

目の前では、双羽とあの青年が対峙している。青年の表情には余裕が伺えた。恐らくは、双羽がこの世界へ来たばかりだということがバレているのだろう。まあ、しょうがないか。

………ちなみになぜ夕依が意識を失っていないのかというと、それには少しばかり理由がある。

通常、あの雷魔法は麻痺効果と同時にショックによって相手を気絶させるものだ。そこで夕依はあの魔法を受ける瞬間、とつさに自分へと魔法を掛けた。“悪夢・火炙りの刑”。全身を火に包まれる、ような幻覚を見せる魔法だ。

彼女の“悪夢”は五感全てを支配する。これにより、雷魔法のショックが夕依の脳を揺らすことはなかったのだ。まあ、麻痺が効いているため動けないことに変わりはないのだが。

「クシデヌアヤニエノスアムチトウエ。ようし」

双羽相手には隠すつもりもないのか、青年は堂々と指輪の魔法を発動させる。大した自信だが、それも仕方無いことだ。相手は相当戦い慣れしているのに対し、双羽は素人もいいところ。しかも彼は青年の戦法を知らない。勝負は見えている。

「……………なんで、逃げないの……………」

つい昨日出会ったばかりの人間をいちいち助けていては、この世界を生き延びることはできない。

情よりも、理を。ここで生き抜くための鉄則なのだ。

今なら相手は夕依を置いていけないため、双羽は確実に逃げられる。あの箒魔法ならば、スピードで負けることはまず無いだろう。逃げてとにかくこの町から離れれば、危険も去るはずだ。

……………だが。

「……………声が、出ない……………」

これらの事実を双羽に伝えることもできない。逃げてと言えない。「なるほど、やっぱり電気なんだね。……………思った通り」

こちらの気も知らず、双羽は存分にやる気のようにだ。小声でなやら納得している。

電気はどうでもいいから早く逃げて欲しい。

「どーやって確かめようかと思ってたけど、手間省けちゃったや」「す、と箒を正眼に構える双羽。

……………なんだろう、この自信は。異世界という異常な状況に、まだ現実感が追いついていないのだろうか。

無論そんなことに構わず、相手の青年は行動を開始する。

「まずあこいつだあ、そいつ！」

「わわっ」

ひゅん、と音を立てて投げつけられた金属棒を、双羽は器用に箒で弾いた。しかし、それではダメなのだ。その直後に、アレが……

「閃光う波！」

強烈な閃光が迸った。

双羽は左手で目を覆っている。まともに受けてしまったらしい。だから言わんこつちやない。

「は、残念だあつたなあ」

青年の左手が、双羽の無防備な脇腹に押し当てられる。とっさに双羽は箒を回し、青年にその柄を押し当てた。が、そんなもの関係無い。

「ちいつと、寝とけえ！」

指輪より、青白い雷が発された。ぱちん、と乾いた音が響く。

「うあつ……！！！」

一瞬間を置き、双羽の体が崩れ落ちた。

「う、ぐお……！！？」

そしてそれと同時に、何故か青年までもが地に伏せる。両者、意識はあるようだが起きあがる気配は見えない。

「（……な、なんで……？）」

何が起きたのかは良く分からないが、夕依にも分かることがひとつだけある。

……この勝負、結果はまさかの引き分けとなったのであった。

## 第質話 次進情景・つぎへむけて

エサンにただひとつの宿にて、遅めの夕食をとる夕依と双羽が居た。この宿屋の一階は宿泊客用の食堂兼酒場となっている。来訪者の青年との交戦より時は経ち、すでに日も沈んだこの時刻。ここにいるのは一晩掛けて飲み明かそうかというような連中ばかりだ。旅人なんてそう訪れるものでもないし、まともに夕食をとっているのは彼女たちぐらいのものである。

「これおいしいよー、カナちゃんも食べる？」

「……いらぬわよ」

……あの後、真つ先に復活したのは最も早くから倒れていた夕依だった。彼女はそのまま双羽を叩き起こし、青年を換金所に放り込みがてらふたりで町を散策していたのだ。複数人の旅に必要なものを買い揃えていたのである。

食糧などはもちろん、テントだって新しいのが必要だ。幸い青年への懸賞金が手元に入ったため、そこそこ値段を気にしない買い物ができる。……換金時はずっと不機嫌な双羽だったが、結局何も言わないでいてくれた。てつきり文句のひとつでも降ってくると思っただけに、これは有り難かった。

「……それで、あのときのことだけ……」

「僕がああ指輪の電気を受けたとき、だよな？」

そして現在。宿屋付属の食堂にて、夕依は双羽に先の戦闘について問い正していた。

あの戦い、どこからどう見ても双羽不利だったはずだ。それが、結果はまさかの相打ち。そもそも何故あの青年が倒れたのか未だによく分からない。

「んー、なんで、と言えば答は簡単なんだけど。一言で言うとな、あの時、僕を通り抜けた電気はそのままあの男の人の体を伝っていったんだ。それであの人は倒れちゃったんだよ」

……そんなことが、あるのだろうか。少なくとも、夕依の受けた電撃は的確に彼女の体を貫いたはずだ。

「実はねー、あのとき僕、ちょっとだけ浮いてたんだ」

「……浮いてた？」

「そ。見た目じゃ分かんないくらい、ちょっと、ね。それで、電気が通るときに箒を相手の体にくっつけてたでしょ。……これで、逃げ道を失った電気は、箒からあの人の体を伝って地面に流れたんだよ」

「……………」

言葉が無くなる。口調こそいつも通りだが、その語られる内容はとても少年の思考とは思えない。

……もしかして自分は、何かとんでもない出会いをしてしまったのではないだろうか。そう思わずにはいられない夕依であった。

「……で、さ、カナちゃん。話は変わるんだけど……………」

と、打って変わった様子で双羽が口を開いた。少し怖さすら感じた先程の雰囲気はさっぱり消え去り、その物腰は完全に見た目の年齢通りである。

「僕、ベンフィード公国つてところに行けばいいんだよね」

「そうよ」

「でも僕全然道とか分かんないからさ、どうやって行けばいいかとか、大体でいいから教えておいてくれないかな？ ……もしかしたら、ハグレちゃったりするかもしれないし、さ」

なるほど、それならばこちらも丁度その話をしようと思っていたところだ。どのみち双羽とはしばらく行動を共にするつもりだが、途中の道のりは頭に入れてもらっておいて損はない。

「いいわよ。ちょっと待って……………」

言いつつ、いつも背負っている真っ黒な荷物袋から地図を取り出した。この地域から目的地のベンフィード公国まで網羅する結構大きな地図である。

ちなみに、双羽には夕依と同じ荷物袋を買わせた。これも旅には

必需品なのだ。特にこのタイプが丈夫で長持ちするのは、夕依自身で立証済みである。

「ええと……ここがエサン、今いるこの町ね」

「うんうん」

テーブルの上に地図を広げ、2人してのぞき込む。地図の南端にポツンと存在する点、これがエサンだ。その更に南には地図の端を埋めるように草原が広がっている。

「私たちが会ったのが、大体このあたり」

「……地図だとすつごく近く見えるね」

「実際近いわよ、往復2日なんだから。目的地のベンフィード公国なんて、ここよ」

言いつつ、地図の中央部を指し示す。実はこの地図、ベンフィード公国発行の周辺地形図なのだ。よって公国が大凡中心に位置するよう描かれているのである。

その公国を示す地域とこのエサンとの間には、目算で2、3週間の距離があった。

「……遠いね」

「……遠いわよ。まあ、途中のこのあたりは船で移動するから、距離にしては早く行けるけど」

エサンより1週間ちよつとの部分から公国までのエリアは、水を表す青色だ。ここは船で移動するので、歩くよりは早い。

「でっかいねー、これ、海？」

「違うわよ。……とても大きな湖なの、これ。ベンフィード公国は湖の中の島にある国なのよ」

「ほへー、でっかいねー！」

湖の北部は地図からはみ出しているため、正確な大きさは分からない。まあ、少なくとも琵琶湖なんかと比べて良い大きさではないだろう。

「……えーと、それじゃエサンからまずこの森通って、それからこの町で船に乗って行く、って感じかな。全部で……2週間ぐらい？」



妙に的確な予測だ。この年齢でひとり旅などしたことでもあるのだろうか。

あと双羽の予想行程で大体はあっているのだが、何力所か訂正を入れる必要がある。

「……目指すのは、ベンフィード公国の首都、ゲイヌシンよ。この点ね。船下りてからここまでまた歩くから」

「ふむふむ」

「あと、真つ直ぐ北に行かずにちよつと寄り道するわよ。……この沼地に、ちよつと個人的な用事があるの」

「用事？」

「……私がエサンに来た目的、よ。往復1日ぐらいだし、何だったらこの宿で待つても良いけど……」

「一緒に行くよー。……ここ怖いし」

確かにこの宿、割と厳つい外見の方が多い。実際中身が気のいいおっちゃんの種類だということは夕依もここ数日の宿泊で知っているのだが、初日の双羽が1人でくつろげる場所でないこともよく分かる。

それにまあ、いちいちこの町まで戻る手間を考えれば、着いてきてもらった方が都合も良い。

「それなら、明日の13の刻に出発するから」

「うん、分かったよー……って、13の刻？」

「……ごめん、説明してなかった」

“刻”とは、この世界で標準的に使われる時間の単位である。簡単に言えば、地球での“時間”に対応する単位だ。ただし、数え方が大分と違う。

具体的には、まず太陽と太陽の中央点が真上に来る時間を1の刻とする。次に太陽の中央点が同じ位置に来るまでを一周として、これを16等分するのだ。そしてこの区分点に順次1から16まで通し番号を振り、刻とするのである。

こう聞くとややこしそうだが、要するに“一日16時間で、かつ

0時ではなく1時から始まる”と考えればよい。一日が正午から始まるという違いはあるものの、それはあくまで数字の上でのことであり、実際には9の刻が日の境目とされている。

「なるほど、朝6時出発、ってことだね」

「……まあ、そうだけど」

……今の説明をざっと一回聞いただけで、即座に言われた刻を時間換算する双羽。流石にもう驚きはしないが。

ちなみに、町の中央にある時計塔がこの町唯一の時刻を知る手段だ。魔法装置付きの小型時計は高価な上に大きくて邪魔なため、普及していない。機会仕掛けの時計塔が、町全体の生活リズムを刻んでいるのである。

「朝早いねー、早起しなくちゃ」

「朝出ないと、着くのが夜になるから。……できれば、あのあたりで夜を越したくないの」

「ふーん？」

疑問顔の双羽だが、まあそこは行ってみれば理解するだろう。別に今言わなければいけないほど重要な事柄でもない。

明日の行程のパターンをいくつか考えつつ、夕依はふっと息を吐いた。

……

暗闇の中、双羽の目は冴えていた。宿のベッドに潜り込んでしばらく経つのだが、眠れない。

……目を瞑れば、あの青年の姿が臉に浮かぶのだ。別に殺したわけはない。ただし、連れて行かれた来訪者がどうなるのかは、夕依もよく知らないと言っていた。が、どう転んでもろくな扱いをされそうにはない。

彼を換金所に引き渡すのは、正直気分が悪かった。平和な日本に育った双羽には決して馴染めない感覚。連れて行く最中、何度夕依

を制止しようとしたか分からない。

しかしあの青年の身柄と引き替えに、双羽はこれからの旅の基盤を手に入れたわけだ。いくらかは使ったが、まだそれなりの銅貨や銀貨が腰の布袋に詰まっている。この世界、特にこのあたりの地域で流通している通貨だ。

それぞれの硬貨の相対価値などは、敢えて教えてもらっていない。……なんとなく、その情報があつた青年を数値化してしまう気がしたのだ。今回の経験は双羽にとって、数値的な価値を持つものである。てはならないのである。

「できれば、もうやりたくないよね……」

はあ、と溜息ひとつつき、目を閉じた。暗闇に浮かんだ青年が、青白くスパークする指輪を双羽に突きつけてくる。

「お前は一体、何者だ？」

一言、問いかけてくる青年。

いやちよつと待とう、アイツはこんなノーマルな口調じゃなかったはず。……なら、誰だ。

「何故だ。我々は……」

我々、と。そう言う相手の顔は、いつの間にか薄くぼやけていた。表情は読みとれない。

気づけば、相手の左手にあつた指輪は黒光りする金属塊となつていた。握られたグリップ、そしてそこから延びる太い筒が双羽に突きつけられる。

「……いや、同じか。消えろ」

相手は一言呟き、一本だけ握り込まれていなかった人差し指を曲げた。

タン、と軽い音が響き、似合わぬ重い衝撃がこめかみを掠める。耐えられずに体ごと吹き飛び、暗闇の中に放り出されながら必死に手を伸ばし……

「うわ……あ」

双羽は、ベッドの中で両手を中空に伸ばした姿勢のまま固まって

いた。バクバクとうるさい心拍を落ち着ける。今のは、何だろう。

「あ、ちよつと明るい……」

東かどうかは知らないが、空が白み始めていた。少し、眠ることができたらしい。

……それにしても、目を閉じる度あのようなものを見せられてはたまったものではない。これ以上の睡眠は諦めるべきか。

「ふああ……つく」

欠伸を噛みしめ、ごろりと寝返りをうつ。すると、目の前に夕依の寝顔が現れた。

……所持金の関係、同じベッドで寝ていたのだ。忘れていた。

静かに寝息をたてているが、恐らく触れでもすれば即座に跳ね起きることだろう。場合によってはそのまま拘束くらいされるかもしれない。

彼女には非常にお世話になっている。これからも、しばらくはそのままだろう。いつかお返しをしたものだ。元の世界へ帰ってしまう前に、いつか、きつと。

「ふわああああ……」

……そんなことを考えつつ、今度は遠慮なく大欠伸をかます双羽であった。

第捌話 霧奥小屋・ぬまのこや（前書き）

ちょっといつもより長めです。

いつもが短すぎるだけだという意見もあり。

## 第捌話 霧奥小屋・ぬまのこや

昼少し前の16の刻、本来であればふたつの太陽が燦々と大地を照らすこの時刻。薄く広がる霧の底を、2人の旅人が進んでいた。太陽光は何重にも遮られ、僅かな薄明かりのみが申し訳ばかりに視界を白く染める。

この霧、なにも異常気象などではない。エサンから東部へ広がる広大な湿原地帯、特にここ北部の沼地では日常茶飯事の光景である。悪い足場にこの視界不良を加え、このあたり一帯は特に旅人に人気の無いルートなのだ。

「ま、僕には足場云々とか関係無いけどねー」

「……何言ってるの……？」

急に横で謎の台詞をのたまい始めた連れには、冷たい視線を送っておいた。ただでさえ歩き辛いこの道、すぐ隣で空飛ばれた日にゃ、こんな視線のひとつやふたつぶつけたくもなる。

「えーと……あ、そーだカナちゃん、その小屋まであとどれくらい？」

「もうすぐそこ」

小屋、とはこの寄り道の目的地だ。元々夕依が立ち寄る予定だった場所でもある。

……実際のところ、小屋というのは通称だ。その実、外見以外は“小屋”なんてものでは決してない。そもそも、アレを建造物と定義しているのかわるか。

と、そんなどーでもいいこと考える内に、目的地が見えてくる。

「ここよ」

「……えーつと、ここ？ 小屋なんて見えないんだけど……」

「……メセシドアヤニエノサハ又ハスウア又ウイテ」

きよろきよろと周囲を見回す双羽を無視し、夕依は小声で一息に呪文を呟いた。

その言葉に呼応するかのように、ごく一部の靄がすつと晴れる。

視界が少し広がり、焦げ茶色の小屋が姿を現した。……どう見てもこの程度の靄で隠れ切るほど大人しい色合いでない、なんてツッコミは無粋である。なんたってこれは“魔法”なのだから。

「うわぁ……すっごいね……」

「これで驚いてたら、中に入って心臓止まるわよ」

先も言った通り、これが小屋なのはほぼ外見のみ。本当に凄いは中身なのだ。

万が一迷わないよう、もう一度経路を脳内に構築し直す。これで良し、と頷き、ちんまりとした扉を押し開けようとしたあたりで双羽に呼び止められた。

「あのさ、さつきもごもご言ってたのって、何？」

「……呪文よ。普通の魔法使うのに必要なもの」

「そーいえば言ってたね、僕たちの魔法は呪文無しで使えるのが強みだ、って」

同時にそれは、その魔法を使うのが来訪者であるという事をもしつかりと示してしまう。

この世界において、本来呪文を必要としない魔法など存在しない。ここでは日常の隅々にまで浸透している魔法だが、そんな日常生活レベルのものでさえ一言二言は何かしら唱えるのだ。

基本的に魔法の威力と呪文の長さは比例するため、戦闘魔法などはそこそこの長さになってしまう。魔法道具の場合は直接使うよりマシだが、まあ比例関係に関しては変わらない。無言の魔法行使は、この世界の常識からすれば異常な出来事と言える。

「……んー、それじゃ、カナちゃんって普通の魔法も使えたんだね」

「今のは魔法道具。あの雷の指輪と似たようなものだから……」

「ほへー」

どちらかと言えば、この小屋自体ひとつの大きな魔法道具だ。靄による隠蔽は機能のひとつに過ぎない。

とりあえずは双羽の疑問も終了したので、小屋へと足を踏み入れ

る。扉の奥は光の射さない真っ暗闇だ。微かに踏むべき地面の存在だけは認識できる程度。

「……ま、真っ暗……」

なんだか双羽の声が震えている。巨大ムカデに突っ込んだ人間が、暗闇なんぞを怖がっているとは考えづらいのだが。

「すぐ明るくなるわよ……ほら」

さらに一歩進めば、す、っと視界が色を持つ。いつの間にか、周囲には巨大な石柱が整列していた。古代ギリシャの神殿、と聞いて一般人がまず思い浮かべそうな、そんな光景である。見える範囲ずっと石柱というのは、さすがに大きすぎる気もするが。

「……何さ、これ」

「半分は幻で、半分は袋小路になってるの。……迷わないように、ついてきて」

柱を数えながら真っ直ぐに進み、23本目の柱の手前を左へ曲がる。その先にもさらに同じような柱列が続いているが、次はすぐに右の柱の間へ。抜けた先は、ゴツゴツとした岩肌の洞窟だった。

思わず後ろを振り返り、どう見ても洞窟の出口にしか見えない光景に首を傾げる双羽。

「……気にしてたら始まんないね」

彼も、ようやくとこの場所の鉄則を理解したようだ。背景の変遷ごときに一々反応していればキリが無い。

「次はこつちよ」

更に進んで3つ目の横穴へ潜り込み、次の多分岐を右の2番目へ。続くアスファルトのトンネルを真っ直ぐ抜け、出てきた巨大な木のウロから裏側へと進む。目の前に現れた火山地帯の火口を大きく迂回し、遙か下に青白い氷河の流れを望む吊り橋を渡ればそこはどこぞのお堂であった。

「次は、縁側に沿って左に……」

「カナちゃん、こんな道よく覚えてるねー」

「……………」



まあ、彼女はこの場所を作った張本人なのだから知っているとかそんなのはどうでもいい話。双羽の疑問には答えず歩を進める。

左へ曲がった後はすぐ突き当たりのお堂に入り、階段を下りてから……

「カナちゃん危ない！」

「……！」

先の道を考えていたためだろう、少し反応が遅れる。とっさに飛び降りた木の床に、丸太のような腕が突き刺さっていた。

「ウガアアア！！」

幸いその腕の主はすぐにもこちらを襲うつもりは無いらしく、様子見とばかりこちらを睨みつける。その間に地面を転がった夕依は体勢を立て直すことに成功した。

「……カナちゃん。このゴリラもどき、何？」

「……よく分かったわね、ゴリラもどきよ」

立ち上がった夕依の隣へ、双羽が飛び降りてきた。相対する土気色のゴリラっぽい何かは、引き抜いた腕を振り回している。威嚇のつもりだろうか。

「これ、無視して行ってもいいのかな？」

「ウグウウウ……」

「……後ろから殴り飛ばされてもいいのなら、別に」

「よし、倒そっか」

「ウグ、ガアアッ！」

す、っと箒を前に出す双羽。やっと動く気になったのか、ゴリラもどきも地面へ飛び降りてきた。が、そんなもの待つ必要はない。

「呪術・金縛り」

着地寸前で体を固められたゴリラもどきは、バランスを崩してすっ転んでしまう。それでも流石に力が強く、すぐ夕依の魔法を払いのけた。

「せえいつー！」

「ウガアぶツ！？」

直後、双羽の箒がその頭を地面へ縫いつける。のっけから頭部狙いとはまた恐ろしい話だが、残念この怪物の弱点は別にあるのだ。

「……双羽、背中の中みよ」

「りょーかい！」

「ガアッ！」

箒を小さくすることで引き抜く双羽。その足を払うように右腕が振り抜かれるが、既に双羽は箒と共にその頭上。それでも素早く反応し、右手に降り立った双羽を次は長い左腕が押しつぶした。

……そして、そのままの姿勢でゴリラもどきはバラバラと崩れ落ちる。ついさっきまで怪物だった土塊を、双羽がこつんと蹴り飛ばした。

「……悪夢・どっぺるゲンガー……」

魔法によって、右手に着地してそのまま叩き潰された双羽、の幻を見せたわけだ。おかげでゴリラもどきはその弱点を無防備にさらすこととなった。そこを双羽が箒でフルスイングしたのである。

「いっちょあがりー、っと！」

箒をしまい、双羽がこちらへててと駆けてきた。それを横目で確認しつつ、夕依はとある疑問に首を傾げる。

あの土の怪物、魔土偶というのだが、この小屋に元々置いてあったものだ。そこはいい。ただ彼女の記憶が正しければ、あれは作動させ続けるのに呪文を必要とするものだった。一度の起動呪文では3日しか動かず、止まる度誰かが起動させ直す必要があった。そして夕依の知る限り、少なくとも一年と半分前の時点で、小屋は無人だった、ハズだ。

つまり、ここ3日以内に何者かがこの場所へと忍び込んだ可能性が高い。しかもあんなものを起動させているという事は、そこそここの小屋に詳しい人物か。ということは、今もここに滞在していると考えた方が良さだろう。

……一瞬その侵入者として最も確率の高い人物を思い浮かべ、夕依は軽く頭を振った。この先にいるのが“彼”だなんて、考えたく

もない。

「カナチャーン、早く行こー」

思考に没頭し、双羽を待たせてしまったようだ。

一度縁側へ上り、先のお堂へと歩を進める。目的地へと近づきながらも、この異空間への警戒を強める夕依であった。

.....

小屋の最奥に位置する研究室兼物置、その中でも特に堆く積み重ねた本の山に、白衣を纏った長身の男が腰掛けていた。簡単な発火装置から取り出した即席炙り肉を右手に、絶賛早めの昼食中だ。

……と、侵入者発見の警報が鳴った。大切なランチタイムの中断に眉を寄せつつも、彼は横手の棚に立て掛けてあったガラス板をのぞき込む。普段すつきり透明なソレには、丁度巡回させていた魔土偶が侵入者たちを奇襲する様子が映し出されていた。

ここに置いてある物の中には、なかなか貴重な品も数多く交ざっている。そのため、普段から警戒用に魔土偶を巡回させているのだ。

……それにしても、あの体勢からあの攻撃を避けきるとは。手前の黒マント、中々戦い慣れているようだ。まあ、あそこですぐ追撃に行けない魔土偶の頭の弱さもあるだろうが。

対して奥の少年、こちらはなんだか色々と測り辛い感じがする。どっからどー見ても弱そうなのに、いざ相対すると足元掬われそうな、そんな雰囲気。……こればかりは、実際に向き合ってみないと何とも言えないだろう。

「ククク、お手並み拝見、といかせてもらおうか」

念のため、今侵入者を襲撃している腕部強化型以外の魔土偶を全てこの部屋へと召集する。今自由に動かせるのはアレ含め7体だ。一瞬部屋の前に残り6体並べておいてやるうかとも思った。が、仮に腕部強化型を突破してくるような相手ならば、そんなものの威嚇に

すらならないだろう。単純な戦闘力ではアイツが最も優秀なのだ。

「……………む。思ったより早かったな……………」

そうこうするうちに腕部強化型は頭と弱点を粉碎され、ただの粘土塊になっていた。いくら小手調べといえ、予想よりも大分と早いこうなると、他の魔土偶は戦力外と見た方が良さそうだ。

そう判断した白衣の男は、手元の魔土偶を全て“休止モード”に切り替えた。手のひらサイズの土人形となったそれを、隣の物置に放り込んでおく。無駄に物資を消耗させるのは愚策以外の何ものでもない。

「そういえば、まだ昼食終えていなかったな」

もう少しすれば、あの侵入者たちによって食事時間なんぞどこかへ消え失せることだろう。そうなっては困ると最後の炙り肉を口へ丸ごと放り込み、飲料水で流し込む。

「……………むぐ。う、がほっ、ごほっ!!」

……………急に飲み込みすぎたらしい。盛大にむせたのを水で無理矢理押し止め、なんとかかんとか呼吸を取り戻したあたりで部屋の戸が勢いよく開けられた。なんだか、最大限無駄な時間の使い方をしてしまった気がしなくもない。

「……………誰？」

視線の合った黒マントが、開口一番警戒オーラ全開の一言を発する。

「ふむ、それは住処へいきなり不法侵入されたこちらの言うべき台詞だと思っただがどうだ」

「それもそだね」

「そうだろう」

「……………」

何故かこちらに同調した筈の少年とアイコンタクトを交わし、頷き合う。彼とは気が合いそうだ。

「何無言で意気投合してるのよ……………」

「出会いは大切にすべき、そうだろう。……………それより、そのまま立

ち話というのも何だ、適当なところに座るといい」

見た目こそ幼い2人だが、その実、腕部強化型魔土偶をモノの数秒で破壊してのける猛者たちだ。でき得ることなら話し合いが何かで穏便に済ませたいところ。

先に襲撃しておいてと言うかもしれないが、こればかりはしょうがないことだ。そこはもしゴネられてもなんとか納得してもらわなければいけない。

「何か用事があったて来たのだろう。まずは話を聞こう」

「誰が見知らぬ人間に……」

「わわ、このボール何！？ すっごく綺麗だよ！」

「……」

むやみやたらとピリピリしている黒マントに対し、好奇心満載で部屋に飛び込んでくる少年。少しは他人を警戒しろと言いたいところだが、まあこのタイミングにおいては非常に助かるわけ。

「……うむ、その玉は位置把握センサーといってな。別の玉を登録すると、そののある方向と距離を……」

渋谷とばかり足を踏み入れた黒マントを横目に見つつ、少年にこの部屋の道具についての解説をする。どうも様子からして少年は付き添いらしいので、用件は黒マントが口を開いてくれるまで一時保留だ。

「これはー？」

「うむ、“ひとつ押すとそのほか全部が震える石”という魔法道具だ。名前は長いが効果はそのままだな」

「それじゃ、このドク……」

「……白河は、どこ？」

突然、黒マントが口を挟んでくる。だがまあ元々無視するつもりも無いため、しっかりと答えておこう。

「白河というのが白河 貴斗たかとのことならば、知らんな。まあその人物自体は知っているが」

「それはそうよね……それじゃ、あなたは誰？ ……どうして、こ

「ここにいますか？」

「やっ」と話が進みそうだが、少年と魔法道具の話をするのも良いのだが、零下の視線に晒され続けるのは精神衛生上得策でない。

「俺の名は、大田宮 おおたみや 華月 かづき。名前で分かるだろうが、来訪者だ。：

…で、こちらとしては次の質問に答えるのもやぶさかではないのだが、その前にそちらも名乗るのが礼儀ではないか？」

「こちらだけ名乗ったままというのもなんだか不公平だ。それに、いつまでも“少年”や“黒マント”と呼び続けるのも何だろう。別に今から喧嘩するわけではないのだから。」

「……私は、金峰 夕依よ。こっちの騒がしいのは把臥之 双羽。付き添いみたいなものだから気にしないで。」

「まあ、だろうな。……さて、2つ目の質問だが、まあ俺は端的に言えば居候というやつだ。」

「……居候？ 白河とは……。」

「まあ待て、質問はひとつづつ、だ」  
さっきから妙に白河について食いついてくる。そもそもここに入れたことからして、あの変態の関係者だろうか。……にしては真人間のようだが。

あと、ずっと話に付いてこれずぶてくされている少年が見てて面白い。

「……俺が召還されたのは、ちょうど8ヶ月ほど前だ。正確な期間は分からんがな。で、しばらくは右も左も分からずさまよっていたワケだが、すぐに空腹で行き倒れた。そこを白河に助けられたのだよ」

まあどうせヤツのことだ、小屋の出入りの邪魔になるとかそんな理由だったのだろう。

「白河が、ここにいた……。」

「まあ、ふと立ち寄っただけだったらしいが、な。すぐまたどこかへ出掛けて行ったのだが、そのとき俺をここに置いていったわけだ。誰もいないよりはマシ、とか何とか言っていたが」

「……そう」

とりあえず、向こうの疑問は解決したらしい。それならば、次はこちらの番だ。

「さて、次はそちらの目的を話してもらおうか。俺に会いに来たわけでは無かるう。こそ泥などの類でもないようだしな」

「……目的は似たようなものよ。ここに置いてある私物を回収に来たの。……昔、ここにいたから」

「ふむ、なるほど」

実のところ、華月にとってここに置いてある物はそれほど大切でもなかったりする。どちらかというところの隠れ家自体を気に入っていただけで、魔士偶の警備はそのついで。仮に強力な侵入者でも来たときは、迷わずこの品々を差し出していただけだろう。

つまるところ、夕依の目的はこちらの利害と何ら相違無いという事だ。回収目的が私物だというのであればなおさらである。多少そうでない物を持って行かれたところで懐は痛まない。

「うむ、それならば問題無いな。好きなだけ持って行くといい」

「好きなだけ、って……」

少しの呆れを滲ませつつも、棚にある魔法道具を選別し始める夕依。なんとか安息の地の平穏は守られたようだ、と肩を下ろす華月は、しかし重要なことを忘れていた。

……“いつも騒がしいヤツが静かなとき、ロクな事はない”。この世の定理 No. 113 である。

「……む、何の音だ」

突然、隣の部屋から何かを叩きつけるような音が響いてきた。まるで数体の魔士偶が暴れている音にも聞こえるがそんなバカな。

「……何、この音」

「いや、少々思い当たる節が無いことは無いのだが……。む、そう言えばあの把臥之とかいう少年は？」

嫌な予感がする。

見回す華月の視界の端に、ガラス製のドクロを持ってひっくり返

る双羽の姿が映った。……嫌な予感がする。

「……まさかとは思うが、貴様……」

「ん、なに？」

「そのドクロ型と視線を合わせたまま、棚の上から飛び降りたりはしなかったらどうな……？」

「あれ、なんで知ってるの？」

「ぬぐおお……」

……まさか、あのドクロの発動条件“目をしっかりと合わせたまま自分の身長以上の落差を飛び降りる”を室内で実現するヤツがいるとは。世の中はなかなか広い……ではなくて。

「……で、双羽君のその変な遊び、何か問題でも？」

「あのドクロはだな……所有者に強力な不運をひとつだけ呼び込む魔法道具だ」

「不運……」

「ちなみに、今の行動で発動条件は満たされている」

「そう言えば……あの音、魔土偶よね……」

「察しがいいな。まあ、そういうことだ」

あのとき華月は、魔土偶をすぐ再稼働可能な休止モードで隣部屋へ放り込んだ。何故に完全停止させなかったのかというあたり悔やまれるが、まあ今更言ってもしょうがないこと。

「え、つと……僕、何かした？」

相変わらず付いてこれてない双羽は、今回に限り軽い殺意の対象だ。誰のせいだと思っっている。

「とりあえず把臥之とやら、箒を出しておけ。……来るぞ」

轟音と共に、部屋のドアが吹き飛ばされる。それによって壁に空いた穴より、こちらを睨む6対の目。

今回ドクロのもたらした不運、魔土偶の暴走だ。全部一気に来たのは予想外だったが。

「あ、さっきの粘土マン」

「……貴様の蒔いた種だ。死ぬ気で何とかしろ」



「はい」

さ、つとそれぞれの構えをとる3人。少々奇妙な即席メンバー、  
ただし兵力としては十分だ。

……相手の出方を窺いつつ、なんでこんなことになったのかと内  
心頭を抱える華月であった。

## 第玖話 白衣字魔・かつき（前書き）

早々に一日置き連投稿は断念しました。話数2桁になるまで続かなかつたぜ。

とりあえず次は3日に一回投稿目指します。なんたって、こんな短いので週一とかやってちゃ終わらないですから。

## 第玖話 白衣字魔・かつき

頭が、痛い。別に頭痛を発症したわけではなく、何かしら能力が覚醒しそうになっっているわけでもない。

しかし、今夕依は頭が痛かった。原因は主に最近出会った旅の連れの行動に拠るものだ。

「カナちゃん、一体そっち行ったよ!」

件の原因の呼ぶ声で思考を現実に取り戻す。今は戦闘中、それ以外のことは一旦頭から追い払うべきだろう。双羽をとつちめるのは後回し。

迫り来る牛頭の魔人が振り上げた左手を見据え、落ち着いて右に回避する。

「しっかりと押さえておけ。俺が崩してやるぞ」

「……呪術・金縛り」

ちょうど今襲ってきたのは、暴走した6体のうち3体目の魔土偶だ。戦闘場所は再深部の物置から移動し、どこぞの神社の境内となっている。

「さて、貴様にはこいつをくれてやるぞ。……“貫け”」

動きにくそうな白衣を翻し、意外な素早さで魔土偶へと接近する華月。動きの止まった魔土偶の弱点に、手早く“貫”の一字を書き込む。その墨汁滴る絵筆がどこから出現したのとかは、多分聞いてはいけないのだろう。

……数瞬後、牛頭人身の魔土偶は、その背から腹へと貫通した大穴によって膝をついた。力を失った土人形は自重に耐えられず、白い砂利へと崩れ落ちる。

「ざつとこんなものだ」

華月の魔法、どうやら字を書き込むことによってそれに応じた効果を発揮するモノらしい。発動に一手間掛かるものの、汎用性と威力はかなり高いようだ。即効性に優れた夕依の魔法とは対極に位置

する性質と言っているいかもしれない。

「もひとつ行くよ！」

双羽からのかけ声に反応し、次の相手を視界に捉える。不細工なライオンとしか表現できない四足歩行の獣が、こちらへ顔を向けていた。その更に奥では、残る2体の魔土偶が双羽の駆る箒に翻弄されている。

双羽がその機動力で敵を牽制、集団から外れた魔土偶を夕依と華月のコンビネーションで速攻撃破。やり合ううちに自然とできあがった配置だ。相手が単純思考のみの人形だからこそ有効となる戦法でもある。

「……悪夢・見上げれば釣天上」

「“乾け”」

何かにつられて魔土偶が上を向く。その隙に足元へと潜り込んだ華月によって、その両の前足はパラパラと崩れ落ちた。“乾”の字が、粘土細工から水分を奪い崩壊を促したのだ。

そうやってバランスを崩して地に伏した魔土偶の背の弱点を、華月が思い切り踏み抜く。

「ていやーっ！」

見れば向こうでは、ちょうど双羽が魔土偶の弱点へと箒諸共体当たりを敢行したところだった。同時に箒の先端を突き刺し、箒自体を伸ばすことでその場より離脱。横手より襲い来る尻尾の一撃を回避してのける。

「貴様が最後だな。……“壊せ”」

完全に双羽へと注意を向けていた最後の一体は、華月によって文字通り弱点を“壊”され、沈黙した。

「……終わった」

「ふう、疲れたー」

「そもそもが貴様の自業自得だがな」

「なんだか茶色い土だらけになってしまった神社の境内を眺め、三者三様に呟く。

……ふと、華月が双羽を見据えた。

「把臥之、貴様は強いな。相性の問題もあるといえ、魔土偶を複数体同時にあしらうとは」

「空飛べるって、便利だよなー」

「……余程戦い慣れてるようだが」

「この世界に来たの2日前だけどね」

「そうか」

それだけ言っつて、いそいそと泥を片づけ始める華月と泥で遊び始める双羽。

なんとなくあぶれた夕依は、とりあえず再深部の物置へと戻ることにした。一時は住んでいたこともある場所なので、一切迷わず目的地へと辿り着く。物置はふたつ並んでいるのだが、今はそれぞれドアを内と外に吹き飛ばされた状態だ。これはなかなか滑稽な光景である。

「……これと、これ……あ、これ、壊れてる……」

元来の目的通り、置きっぱなしにしていた私物や役立ちそうな魔法道具を回収していく。いくつか先の戦闘時に壊れたと思しき物があったのは残念だ。この塔を象った置物など、お気に入りだったのだが……

「……ふう……」

一通りめぼしい物を回収した夕依は、堆く積み上げられた本の山に腰掛けつつ溜息を吐く。意外と安定していて座り心地も良い。考え事にはお誂え向きだ。

……あの、華月という青年。どうやら夕依の昔の知り合いと縁ある人物らしい。彼の言っている経歴が本当かどうかは分からないが、まあ嘘は混じってなさそうだ。あと、こちらと敵対したくない、という意思が見え隠れ、というか見えまくっている。敵意が無いのも真実と見て良いだろう。

ただ、単に今までここに住んでいただけでは思えない。先の戦闘では、自らの魔法の特性を理解し、使いこなしていた。あれが相手

無しの鍛錬だけで修得できるモノだとは考えづらいのだ。嘘を言うてはいなくとも、真実を全て伝えたわけではないのだろう。

「……敵でないなら、別に何でも……」

別にこれから生死を共にするわけではなく。少しばかり一緒に戦ったりもしたが、それだって一時の同盟関係。立った今敵対しないのであれば、彼についてこれ以上考えることも特に無いだろう。

「……疲れた」

戦い続きの疲れもあったのか。そのままの姿勢で、ウトウトと船をこぎ始める夕依であった。

………

双羽にとつてこの異世界での3泊目は、なんだか変な小屋でとることとなった。夕依はなんだか嫌がっていたが。彼女の元々の予定では今日中に沼地を抜け、その先の草原地帯で野宿をするはずだったとか。しかしあの騒動に時間をとられていたため、結局は小屋で寝ざるをえなかったのだ。というか、そんなに小屋にいたくなかったのだろうか。

「……双羽、何笑ってるの」

「わ、笑ってないけど……」

「じゃあ黙ってて」

「ふひゃい」

そして、今現在。双羽一行は昼下がりに沼地を抜け、その先を歩いている。……のだが、彼女がなんだかとっても不機嫌なのは何故だろう。

口調とかいつも通りだが、明らかに言っていることが理不尽だ。だけど双羽のチキンハートでは逆らえる気がしない。なるほどこれが世の不条理というヤツなのかそうなのか。

「どうした金峰、まるでこの世の真理に気づいた肉牛みたいな顔して……」

「うるさいわね」

そしてまたその不機嫌の原因8割方を占めるであろう人物が余計なことを言う。翻る白衣にマッドサイエンスなその横顔、文字魔法を使う華月だ。

……なんと今、彼は双羽たちと同行しているのだった。

「ほう、うるさいと。しかし口を開けば音を発するのは人として当然の」

「じゃあ閉じてて」

どうも夕依、華月が付いてくることが不満なようだ。なんで不満なのかはさっぱり不明なのだが、それが不機嫌の原因なのはまあ十中八九間違いない。

「まったく。把臥之、よくこんなヤツと旅できるな」

「えと、いっつもこんなじゃな……」

「黙ってて」

「ふひゃい」

もう会話への参加すら許可してもらえないこの状況。理不尽だ。

どうも夕依、華月とことん馬が合わないらしい。華月の方はわざとからかっている節もあるが、夕依は本気だろう。イライラしているのが目に見える。

「双羽。箒降りて！」

「え」

「降りて」

「ふひゃい」

まあどうでもいいと言えはもうでもいいのだが、こちらへとはっちりが来るのは頂けない。

「くくく……そうか、嫌よ嫌よも好きの内、と……」

「……バカじゃないの？」

「残念、バカと言った方がバカなのだよ。小学生でも知っている知識だ」

「……」

……新しく増えたこの同行者、とりあえず賑やかな旅だけは約束してくれそうだ。

……

ベンフィード公国から北西へまっすぐ、更にまっすぐ行けば、とある山脈にぶつかる。連なるのは、赤茶けた岩肌に見える険しい山々だ。名をキシニイ山脈という。

険しいとはいえ草木一本も生えないほどでなく、人という逞しい種族はこの場所にもちらほら村を造っていた。

そんなこの地に住む人々の間で、聖地とも地獄の入り口とも言われる場所がある。レケヲク、と呼ばれるその渓谷には、死者の霊魂がさまよっていると言われていた。実際ここへ入り、狂気を持って帰ってきた者も多くいるため、この話は広く信じられている。実害もでているのだから、誰だってこんなところにすき好んで入らないだろう。

……そんな渓谷に、討伐隊より命からがら逃げ出した盗賊団が身を潜めた。ある意味苦渋の決断だったと言える。

また、とある女性がここではないどこかより降り立った。よくあることでは決していないが、そこまで極端に珍しいことではないかもしれない。

そしてこのふたつは、出逢うべくして出逢った。それが結果何を引き起こすかなんて、誰も知るわけがなかったのだが。



第拾話 森中旅事・あるひもりのなか（前書き）

なんだか夕依ちゃん性格がぶっ飛び気味。初登場時からここに  
至るまで大人しくしてた筈なのに、どうしてこうなった。

## 第拾話 森中旅事・あるひもりのなか

盛大に捻れた樹の群生する森の中を、3人は歩く。捻れてるところまでは草原の木と何ら変わらないのだが、実際にはこの森の木の大半が別の種類である。

「……実は私、この森通るの初めてなの」

「奇遇だな、俺もだ。……話に聞くのと実物を目にするのでは大きく違うものだな」

足を動かしつつも、どこかひきつった顔の夕依と華月。2人の視線は前方よりやや上方へと向けられている。そしてその先には、群れて実る真っ赤な実がたくさん。この木、年がら年中実を付けているのだ。

がしかし、それだけならばこの2人にこんな表情をさせるのに不十分だろう。そう珍しい話でもない。

問題は、この木の実の表面にそろって浮き出ている模様にある。

「……全部こつち見てる気がする……」

「やめる、いくら何でもそれは気味悪過ぎるだろう。よくあるモナリザの怪談みたいなものだ、そう思え……」

実の上部にいい塩梅で並んだ2つの窪み、その下で少しだけ頭を出す突起物。更に下には緩やかなU字を描く溝が刻まれ、縦に長めな実の輪郭と細かく枝分かかれたへた部分が外形を整える。

……この森の木の実、人間の顔にしか見えない、ということでは名なのだ。しかもその色は真っ赤な上、ちょうどぴったり人面サイズ。不気味なことこの上無い。

夕依は長い旅暮らして、華月はすぐ近くに住むが故よく話だけは聞いていた。そのときは、とにかく不気味だったと連呼する体験者を訝しく思ったりもしたものだ。

なるほど、これは見てみれば分かる。頭上から無数の顔に見下ろされる光景はいろいろと圧巻で目に悪い。

「うーん。あれ、食べれるのかな」

「……試してみたら？」

そして、着眼点が他とは次元違う通常運転な双羽。夕依の言葉に頷くと、すぐに箒を駆って木の実のなる高さまで飛んでいった。清々しいまでの有言実行っぷりである。

「……そう言えば、毒とか無いわよね、あの実……」

「知らずに言ったのか貴様は」

最近なんだか扱いの酷い双羽である。

「しかし、まあ安心しろ。あの実に毒などそういった類のものは無い。……どのみち食うことはできんだろうが、な」

「……？」

一応地元の間人というところで、華月の方が情報量も多かったらしい。夕依は双羽を毒殺せず済んだことに安心しつつ、彼の言に首を傾げた。

……3秒ぐらいでその疑問は解消したが。

「んじゃ、頂きまーがっ……!!? ……!!」

「……と、いうわけだ。堅すぎてまず普通には食えん」

「そういうことね……」

思わず木の実を取り落とし、空中で器用に悶絶する双羽。思い切りかじりついたため、かなり痛かったらしい。

そして、それを横目で見つつ解説する華月と納得する夕依。やはり双羽の扱いはこんなもんだ。

ちなみに落下した木の実は、ゴンと鈍い金属音をたてて地面へとめり込んだ。そりゃ歯が立つワケが無い。

「痛いよー……」

うう、と涙目の双羽がゆらゆら戻ってくる。そして夕依の隣にべたんと着地し、そのまま歩き始めた。双羽が箒に乗らず歩くとはコレは重傷だ、余程痛かったらしい。

……気が付けば、夕依の手はその頭をぼんぼんと撫でていた。何故だろう、違和感が無い。

「何をしているのだ貴様らは」

「……」

そのまましばらく撫で続けていると、さすがに見かねたのか華月がツツコミを入れてきた。少し慌てて手を離す。

いや、本当に何していたのだろう。双羽はと見ると、先の涙目はどこへやら。にこにこ満面の笑みを浮かべている。

「さて、貴様らそこでわけの分からんことをしていたから気づかなかったのかもしれないが……アレは、何だ」

華月が森の奥を指さしたので、これ幸いとそちらへ目を向ける。白い固まりがいた。

「……何、アレ？」

「俺が今聞いたところだろう。知るか」

具体的には、“どっからどー見ても何者かが真っ白な布を頭から被ったと思しき物体”がヒョコヒョコ踊っていた。黒く目が書き込んであるあたり、何だろう、幽霊の扮装なのか。素晴らしいまでにこの森とミスマッチだ。

「はっはっは、私はこの森の主だ、命が惜しければ荷物を置いて去れ」

そして、喋った。しかも一言目の内容が、コレ。ついでに酷く棒読みである。

何がしたいのか、はよく分かったのだが、その他色々がさっぱり不明だ。

「……大田宮。コレ、どうするのよ」

「選択肢は、1・無視する、2・埋める、3・消すの三択だな。他には思いつかん」

「はっはっは、やめたまえ、そんなことをすれば罰が当たるぞ……つて、消す!？」

思わずツツコんでくるあたり、言動にそぐわぬ常識の持ち主なのかもしれない。しかしそうすると、次はこの状況の謎がよりいっそう深まるわけなのだ。

あと、埋める、は別に構わないらしい。

「ちなみに俺は3推奨だ」

「……私は1で」

でき得る限りこの手の人間と関わり合いたくない。

「ふむ、ならば把臥之はどれにす……と、どうした把臥之？」

「……？」

そう言えば。こんな状況で真っ先に口を開きそうな双羽が、今回に限り全く言葉を発していない。具体的には木の実をかじった後ぐらいから。

見てみればその双羽、顔色を真っ青にしてブルブルと震えている。ただでさえ小柄なのが更に一回り小さくなってしまったようだ。

「……お……お……」

「……お？」

「お、お化けー！！」

突然叫び声をあげる双羽。そのまま、ばしゅっとものすごい速度で前にいた華月の背へ隠れる。

どうやら彼、怖いらしい。この白いのが。どう考えたって、あの

木の実の方が余程気味悪いと思うのだがどうだろう。

「はっはっは、そうかそうか、この私が怖いか」

さて、ここでこの状況を喜ぶのがひとり。件の白いヤツだ。

「はっはっは、さて貴様、命と荷物、どちらが惜しい……？」

「う……う……」

「はっはっは、そうだな、まずは貴様を食ぶぎゃっ!？」

「……邪魔」

なんだか調子に乗り始めた白いのをやくざキックで蹴り飛ばす。

華月が双羽の防護壁役に忙しいため、これは夕依の役目だ。

顔面に蹴りが直撃したらしい白いは、もんどりうってそのまま一回転。木の根に頭をぶつけて転げ回っている。多分押さえているのは鼻だろう、見えないのでよく分からないが。

「はっはは……痛でええ」

頭から被っている布が邪魔なのか、足をバタバタさせるだけで起きあがる気配が無い。その裾から見えるのが裸足であることになんとなく嫌な予感を感じつつ、夕依はその布を一気にはぎ取った。

その下には、海パン一丁でもがく細身の青年が……

「……！！？」

「はっはっは、おおう」

手に持った布を取り落とし、ピシリとその場に固まる夕依。後ろの香月たちは夕依の陰になって状況が見えないのか、特に反応は無い。

「はっはっは……？ ……ほう」

急に動きの止まった夕依を訝しげに見る海パン野郎だったが、そのうち何かに納得したかのように手を叩く。その音に夕依はちらと反応したのだが、気づかないようだ。

「はっはっは、なるほどよく分かったぞ、今になってこの私の恐ろしさを理解して身がすくみゴベ」

皆まで言わせず、夕依の体重を乗せた右足が海パン野郎の顔面を踏み抜いた（非常に危険なのでよい子は真似しちゃダメ）。その顔に表情は浮かんでいない。

悲鳴すら上げず沈黙する海パン。

……これを見た双羽、後に“このときのカナちゃんはお化けなんかより数倍怖かった”と語っている。

……

「はっはは……ぬうつ……」

日が沈み、残光は木々に遮られ、早くも暗やみに包まれた森の一角。未だズキズキと痛む頭を押さえる海パン野郎がいた。自前のテントの中である。

ちなみにこのテントを出れば、前には2つ別のテントが並んでいるはずだ。片方はあの白衣の男、もう片方はあのおっかない少女と

少年の共同テントである。

「はっはっは、失敗したな……」

自作の幽霊装束で旅人を脅かして路銀を得る計画だったのだが、のっけから頓挫してしまった。

あの後気が付くと、何故か拘束されたまま紐で引つ張られていたのだ。この後もう一度出直して襲撃されてもうっとおしい、とのこと。まあ確かに全くではある。

……それにしても、ベンフィード公国までの道のりは長い。

「はっは……さて、どうする」

何を隠そう、彼もまた来訪者だ。ちなみに双羽たちが3人とも同種の間であることにもなんとなく気づいている。あの年齢層だけであそこまでお気楽な旅ができるのは、彼が知る限り来訪者という人種ぐらいのものだ。普通ならもう少し気を張っているだろう。

……今彼は、悩んでいた。

初めは普通の旅人を襲撃する予定だったが、なんと遭遇したのは来訪者×3である。捕らえて換金すれば路銀なんぞ余るほど手に入るだろう。幸い彼の魔法は相手の動きを止めるのに向いているし、彼自身腕に覚えはある。

問題は、今までそんなことやったことが無いという事だ。むしろ、それを避けんが為に今回のような手段を思いついたのであるからして。

「はっはっは、しかしやらねばならんだ！」

相手が来訪者であれば、逆に脅しという手段は通じないだろう。

この連行にだって尤もな理由は付いていたものの、このまま町に着けば換金所行きかもしれない。それは嫌だ。

ということ、決行。黒マントの少女は正直怖いし、あの白衣の青年には隙らしい隙も無かった。よって最初の標的はあの少年。

忍び足でテントを抜け出し、少年の寝るところまで向かう。まずは奇襲で少年を無力化、できればそのときに黒マントの方も何とかしたい。最後は白衣のアイツだが、勝てるかどうか……

「……呪術・金縛り」

ぴし、という幻聴を聞いた。体が動かない。そして後ろから聞こえてくる声、これはあの少女のものだ。

またものっけから躓いた。なんと彼女起きていたのだ。しかも先手を取られたわけだが、ここはできれば油断しておいて欲しいところ。可能なことなら、このままただの盗人と思われていたい。幸い口なら動く。

「はっはっは、一体どうした、何か用か」

「……他人の寢床に忍び寄っておいて、言うことがそれ……？」

すぐには、動かない。やるならば、チャンスは一瞬だ。

「はっはっは、いや、中々に大きな懐をしてるようなのでな、つい手が……」

「……来訪者なら、私たち捕まえた方が収入大きいわよ」

「はっはは、いや、そこもバレていたのか行け、毒針っ！」

会話中に用意しておいた魔法、“毒針”を後方めがけて多数放つ。一発当たれば、この動きを封じる魔法を中断させる程度のダメージを与えられるはず。案の定、放った直後に拘束が緩んだ。

「はっはっは、予定変更、まずは貴様から」

「……凶運・頭上注意」

「はっは……頭上？」

釣られて、ふと視線が上を向く。お陰様で、彼は上空より飛来する真っ赤な顔面と衝撃のキスを交わすこととなった。

「はっゴフエ!？」

落ちてきたのは、この森特有の人面木の実。不気味さと同じくらい堅さでも有名なソレが、なんとピンポイントで彼の頭上へと落下してきたのである。

ゴウン、と金属質な音を引き、彼の意識は暗闇へと落ちていった。

「……」

「おうふ」

……直後、目を覚ます。いや、強制的に覚まされた。



なんとあの黒マント、背中を蹴り飛ばしたのだ。痛い。あと頭がぐわんぐわんいつてて立ち上がれそうに無い。

「はっはは、何だね、負けた人間に何か用ぶっ!？」

「……………」

何故かまた蹴り飛ばされる。わけが分からない。

そう思いながら見上げたそこには、なんだか非常に怖い顔があった。後彼は語る、あの表情は彼自慢の幽霊装束とは比べてはいけなかった、と。

「……………なんか最近、色々ところ、溜まってるのよね。鬱憤が」

「はっはは……………ソレは私のせいではないと思うが……………」

「……………このタイミングで、襲撃掛けるそっちが悪い」

「はは……………んな理不尽ごぶっ」

「……………」

彼は、悟った。なるほど、自分はこうなる運命、いや役回りだったのか。

「……………」

「……………」

「……………」

夜の森に、悲鳴が響き渡った。

……………

「おはよー。……………あれ、カナちゃんどーしたの?」

「ふむ、妙に機嫌が良いな」

「……………そんなこと無いわよ……………」

「ふーん。……………あれ、そう言えばあの海パンの人どこ行ったんだろ」

「確かに、姿が見えないが……………」

「……………目的地が違うから先に出る、ってさっき言ってたわよ」

「ふーん」



第拾壹話 新町新亭・いかとほんとたたかいと（前書き）

……なんだか短いです、いつもに輪をかけて。

## 第拾巻話 新町新事・いかとほんとたたかいと

沼地を発つて早5日、双羽たち一行はそこそこ大きな町にいた。町の正中線を貫くメインストリート、そしてそのど真ん中に鎮座する時計塔が特徴である。地図と案内板に拠れば、町の名は“ナウエサ”というらしい。

幸い時計の形式は針による円盤指示だったので読めない事も無い。動力は魔法らしいが、そんなもの外見には関係無いのである。

「うんうん、読めればいいもんね」

「……何言ってるの。置いてくわよ」

今回は夕依の用事にお付き合い、華月はとつてある宿屋で留守番だ。平和な町ではあるらしいが、外に出るときは2人以上が望ましい。忘れがちだが彼ら、一応は追われる身なのである。

エサンに比べて全体に木造建築の目立つ町並みを進む。メインストリートには石が敷き詰められてそこそこ歩きやすい。まあ町間の街道なんかよりマシ、という程度ではあるが。双羽たちの元いた世界のアスファルト舗装なんかとは比べるべくも無い。

メインストリートのおちこちには露天が出ていた。町の雰囲気は落ち着いていること、造りがしっかりしていることからして常設だろう。そのうち一軒、適当に見つけた店へと立ち寄ってみる。鉄板の上には烏賊っぽい生き物の串焼きが並べられていた。

「うーん……テウエヨの姿焼き？ これ、おいしいの？」

「……この町の名産ね。食べたことは無いけど、見た目はちょっと……」

「おい、君らただの冷やかしよりも質悪いつてこと自覚してるか……？」

焼いている商品を眺めながら正直に感想を持たすと、店主っぽい人に苦笑される。確かに少し申し訳なかったので、一本買うことにした。

鳥賊つばいと言いつつも、これが鳥賊でないのは確かだ。まあ足が13本に目が3つで頭部がT字型になつてゐる鳥賊というのめかなり珍しいだろう。しかもこれ陸上生物らしい。一度生息風景を見てみたいものだ。

テウエヨの生態的謎に挑みつつ、上からカジってみる。

「……あれ、おいしいよ、これ」

「そう。良かったじゃないの」

海産物特有の独特な旨味が、いい。同じく特有のクセはあるが、それを補って余りある……いやこれ陸上生物だったか。

「カナちゃんも食べるー？」

「……私はいいわ」

「んじゃ、全部食べちゃうよ」

どうも夕依はこの見た目が気になるらしい。こんなに美味しいのに、勿体ない。一度食べればヤミツキだろうこれは。特産だか名産だか銘打たれているのも納得の味、値段。いやホント素晴らしい。

こうして双羽が食の素晴らしさに目覚め始めた頃。ようやく目的の地が2人の前に姿を現した。

少し周囲より大きめな店構え、そして同じく大きめな看板。そんなもって一見ガラス張りに見えるほど大きな窓も特徴か。

「ここよ」

「えーと、“ラーシユバジ立本屋”……立本屋？」

看板に書いてある言葉には、聞き慣れない単語が混じっている。

まあラーシユバジとかいうのも大概耳慣れない響きではあるのだが、まあこちらは固有名詞だろうということ自分で自己解決。問題はその後についてる立本屋というヤツだ。貸本屋なら聞いたことあるのだが、……立ち読み専用の本屋、よ。時間でお金を取るの」

なるほど、つまるところ漫画喫茶みたいなものだろう。中にはイスも見えるため、ずっと立っ立っていななければならないというわけでもないらしい、いや当たり前か。しかし実際ずっと立ちっぱなしの客が見えるあたり、どこの世界でも本の虫というヤツは似たような性質

を持っているようだ。

「……本読むのは、苦手？」

「嫌いじゃないよー。そんな好きでもないけど」

暇潰しとして本を読むのならよくあるが、他の何かに対して読書を優先させようとは思わない。まあその程度。苦手とは言わないが好きとも言えないだろう。

ちなみにどうも夕依は読書大好き人間だ、おそらく。傍目には何ら変わらないが、立本屋を前にして少しばかり目が輝いている。あと多分これ言ったら怒られる。

「それじゃ、私はここで少し調べ物するから。……適当に本読んで待っておいで」

「はい」

店の戸をくぐる。いらっしやいませー、というカウンターからの明るい声に、2人入る、と夕依。それではこちらに、と差し出された半透明な板に手を乗せる。どうやらこれがタイマー代わりらしい。出るとき差し出せば時間換算で精算できるようだ。

……とこの店のシステムに感心してる間に、夕依は本棚の間をすり抜け姿を消してしまった。今更だがこの店、決行奥行きがある。

「じゃ、僕も何か適当に読んどこ、っと」

大体のジャンルによって分けられた本棚を物色し、目当ての料理の本を見つける。未だ野営続きなのでまともに料理できる機会はないが、まあこの世界の食を知っておいて損は無いだろう。本を読む、となったときから決めていたのだ。

「……ふーん、ほへー」

わりかし熱心に読み始める双羽。本自体の質は元の世界より落ちるが、読みにくい程でもない。どうやらある程度の製紙技術はあるらしい。

……さて、実はひとつ、彼は聞き忘れたことがあった。まあそこはなんとなく、と思っていたのが悪かったらしい。何か、と言えば店を出る時間について、である。本好きにこれを伝えず野放すなん

て自殺行為である、と双羽が思い知ったのは、探しても探しても夕依が見つからず閉店時間になって諸共店を追い出されたときだった。魔動式街灯に照らされるメインストリートを歩きながら、二度と同じ過ちは繰り返すまい、と心に誓う双羽であった。

.....

夜。暗闇に沈み、その役割を一旦停止させている時計台。

むろん夜だからと止まるわけではないのだが、ライトアップされるとかいうことも無い。よって夜目の特別利くような人間以外には止まっていると同義だ。

..... そんな時計台の端、人影があった。通常、登れる場所ではない。つまり、この人間が通常ではない、ということ。

「町へ入ったのは3人だが今丁度2手に分かれているようだがどうする」

その口から発されたのは、女性のものと思われる高く綺麗な、そして棒読みの言葉。そこに感情の色は見えない。一流の役者に棒読みを依頼したかのような、声音。

むろん今のは問いだ、ということとは問われた者がどこかにいるはず。しかしそんな姿は見えない。そして、見えないままに返答だけがこちらへ届く。

「いや、どうする、って.....」

「..... そりゃまあ襲うに決まってるでしょう」

こちらは若い男性、の声ふたつ。中々物騒な返事だ。しかし棒読みセリフの主にとっては予想通りだったのか、何も言わず視線を下ろす。

街灯が裂く闇の中、連れだって宿屋へ入っていく後ろ姿。遠くに見える、アレが標的だ。

「..... いややはりしっかり寝静まったところを奇襲する」

「いやあ、姐さん.....」

「……性格悪いね！」

2人一組で返ってくる返答。言ってることは適当だがこれも了承だろう。いや、了承しかするはずがない。

「少し待ち合図と共に襲撃する……」

ふ、と目を細め、宿を窺う。しかし、その表情にはやはり何も映らなかった。

……

夜も更け、時刻にして2の刻少し前。むくりと起きあがる人影がいた。双羽である。

宿は一室しか取れなかったため、夕依も華月も同じ部屋だ。ちなみに双羽の横では夕依が寝ている。体格を考慮し、ふたつあるベッドの片方に夕依と双羽で寝ることになった。何故か夕依は反対していたが、まあ妥当な案だということで最後は渋々納得していた。

「……」

ぼけ、とした目で部屋の入り口を見る。そのまま、ふらふらと部屋を出た。旅装のまま寝ているのでまあそこは問題無い。

てくてこと廊下を歩き、階段を下り、宿の入り口に着く。そこで双羽は、ふう、と息を吐いた。伸ばした右手には、いつの間にか簞目はしっかりと開かれている。

「ゴメンね、宿屋のおっちゃん」

一言呟き、右手を一振り。ちやちな宿のドアはその許容を越えた衝撃によって吹き飛んでゆく。その後を追従し、宿の外へ飛び出す双羽。メインストリートから一本入った裏通り、この時間なので人っ子ひとりいない。

……いや、いた。いい感じに飛んでいた扉を、手に持つ剣で叩き落とした人物が。

「ほう貴様は気づいたか」

「……誰ぞ」



「名を聞くなればそちらから名乗るのが礼儀というやつだろう」  
「……………」

この人物の突きつけてくる、殺気。非常に久しぶりの感覚だが、どこか懐かしさを感じている自分が嫌だ。

首を振り、きつと前を見据える。

「把臥之……双羽、だよ」

「アリア・ハンケイジというよろしくでは早速だが死んでもらおう」

「……ま、前置き無しっ!？」

地を蹴り、一足飛びで双羽へと接近するアリア。とりあえず箒に身を任せて距離をとる双羽。片や使命、片やなんのこっちゃな状況の中、戦端は勝手に切って落とされた。

……せめて落ちる前に一言欲しかったな、とは思わないでもない双羽であった。

第拾弐話 夜宿賊戦・ばとるやどー（前書き）

気がつけば戦闘ばかり。閑話的な書くのって苦手です。

## 第拾弐話 夜宿賊戦・ばとるやどー

丁度双羽が宿屋の主人に心の中で謝罪していた頃。未だ夕依たちの寝る部屋へと忍び込む影がふたつあった。

「しっかり寝てる……」

「……寝てやがる！」

丁度幼稚園児ほどの体格。双子としか思えないほど似た顔。……いや、よく見ればソレが人の顔でないことに気づくはずだ。その身に赤と緑の色違いの服を纏うこの2人。

「あの少年、いきなり外行くもんだ……」

「……いやもう焦ったけどな。でもこいつらちゃんとして良かったぜ」

どういう原理で動いているのかは知らないが、おそらく生物ではない。人形だ。しかもどうやら華月たちを狙って侵入してきたようである。

ふたつあるベッドそれぞれに一体つつ忍び寄ってくる人形。赤いやつの振り上げた腕はいつの間にか鋭利な大鎌に変化している。緑の方はでかいハンマーだ。質量保存の法則どこいったとツッコみたい。

「さて、ここまでの旅……」

「……ご苦労さん、そしてさようなら！」

言葉と共に、巨大なハンマーが落下してくる。明らかに本体よりハンマーの大きいだる重心どこだよ、とツッコんでいる場合ははなさそうだ。

上半身を捻り、ベッドから転がり落ちる。残念ながらハンマーが粉碎したのはベッドの骨組みのみ。……流石にこのベッドは弁償かこれだけ粉微塵だと修理とかさういう以前の問題だろう、新調するしかない。

「……ぬう、俺のせいではないのだがな……」

「……避けただと!？」

驚いたように叫ぶ緑色。なるほど、先からワンテンポ遅れで喋っていたテンション高めなのがこちらか。

「こいつら、起きてやがった……」

「……起きてやがったな!」

見れば、夕依も同様鎌を回避したらしい。向こうのベッドは見事なまでにまっぴたつ。一晩でベッドふたつ弁償とかギャグにしたって酷い。いや、あれだけ見事な切断面なら接着すれば……いや、無理か流石に。

「金峰、ベッドの弁償は折半という方向でどうだ」

「……絶対、今真っ先に言う台詞としては間違ってるわよソレ」

金の話は重要だと思うのだが、どうだろう。先にしておいて大抵損は無い。

まあ、話す相手がいないのでは意味も無いわけで。とりあえずベツドの弁償額についてゆっくり検証できる時間が必要だ。それにはあの人形、邪魔である。

「こつなっちまえばしょうがない……」

「……まともに前から、戦うか!」

ざつとこちらから距離をとり、背中合わせになる人形ふたつ。向こうの戦法、互いに隣接することで精度を高めた連係攻撃、と見た。まあ余り関係無いが。

「俺たちの連けへエツ……!？」

「……呪術・強制リバウンド」

「……んな!？」

突然赤色が床に沈む。夕依の魔法だ。というか、そんなところで足止めるからだそちらが悪い。あと、相方がやられたからといって戦闘中余所見するのはもつと悪い。

たつと素早く緑色へ駆け寄る。驚いてこちらを見るが、まずその反応からして遅すぎる。

「……“重く”なれ」

「……………うごっ！ お、重っ……………！？」

“重”の字を書き込み、緑の動きを止める。書き込む場所は、もちろん額だ。あと重くしたのも夕依に合わせただけである。動きを封じる以外特に意味は無い。

自重でズブズブと床に沈み始める人形2体。まだ口は開けるようだが、ならばその出元とか色々答えてもらおう。

「さて、俺はこの人形共に聞くことがあるが。金峰、貴様はどうする？」

「私は……………大田宮手伝うけど」

「ふむ……………」

……………素直でないというかなんと言うか、何だろう。先から聞こえてくる金属同士の打ち合い音、これを聞く度にちらちらと動く視線。何も言わず行けばいいものを、この年代特有の何かだろうか。面倒な。

「……………いや、邪魔だな。金峰、貴様はこの部屋の外へ出ておけ」

「え、だから私も……………」

「邪魔だ、と言っている。戸は閉めておくからな、出ておけ」

「ちょ、ちよつと待……………」

まだ何か言っているようだったので、問答無用、扉の外へ押し出す。バタン、と音をたてて戸を閉め、振り返って人形2体の埋まるところまで近づいた。

……………しばらくし、たたと廊下を駆ける音が聞こえてきた。全く、めんどくさい。

「さて、まずは貴様らがどこで作られたか、というところからだ」

「……………そんなもん話すかって」

「“回”れ」

「ギョオオオ……………！？」

「……………だ、大丈夫か相棒！」

「さて、話すか？」

ドリルよろしく高速回転する赤をひとまず無視し、尋問を開始す

る華月であつた。

.....

相対するのは、女性。アリアという名前らしい。丈の長い和服の  
ような服装に片手持ち両刃剣が一本と軽装だが、それがその強さに  
一片の曇も落とさないのは身をもって体験済みだ。なんせ現在、箒  
を縦横無尽に駆使してなんとか防戦一方を保っている状態なのだか  
ら。

「剣をそこまで受け切るとは中々の腕ではないか侮っていたぞ」

「……せめて、そーいう褒め言葉だけでも抑揚付けて言つて欲しい  
よ……」

「以後気をつけよう」

たん、と軽い音を残してアリアの姿が消える。いや、そう見えた。  
静と動の差が大きいため人間の目は追いつけず、結果として消えた  
よう映つたのだ。対処法は単純、一度視界を左右に振る。実際消え  
る速度ではないため、中央に引き寄せられた意識を広げてやれば捉  
えることはできる。

実際に凝視されてる人間が消えようと思えば、ある程度衝撃波を  
耐え切る化け物でなければならぬ。そもそも、そんな速度を出せ  
る時点で十分人外だ。まあ、消えたように見せるだけでも若干人間  
を卒業する必要はあるのだが。

「はっ」

「てえいっ!」

がきん、と音がして、双羽の左下方から跳ね上がった剣を箒が遮  
つた。逆袈裟、というやつだ、確か。

「たあっ!」

「ぶん」

やられっぱなしではギリ貧だろつ。受けた箒をそのまま回転させ、  
相手の剣を持つ手を狙う。当たり前のように逸らされ跳ね上げられ

たうえで突きが返ってきたが。普通ならこれだけで確実に死んでる。  
「てやつ」

「ふ」

跳ね上げられた箒を反転、叩き落として突きを遮断。慣性の法則無視な双羽の箒だからこそできる荒技だ。コレがあるからこそ、彼はこんな半人外相手に粘ってられるのである。

「やはり受けられるがならこれはどうだ」

「おわっ！」

す、と半歩下がるアリア。そこから残像を幻視しそんな速度でこちらの右側面へ。異様な早さの足払いが迫る。

足払い、と判断した時点で双羽は上へ。箒を利用して滞空時間を延ばし……

「はあっ」

「のわあっ!?!」

空に浮く双羽の足元から、直角に跳ね上がる剣先。おかしい、あの剣はさっきまで普通の剣だったはず。じゃあ何だあの慣性の法則無視な動きは。そんなのふたつもない。

慌てて箒を真横にし、突き出す。ギリギリのタイミングで、金属特有の衝撃が走り。そして双羽の右上から振り下ろされる普通の剣。  
「……っ!」

箒を自身に体当たりさせる勢いで後退する。咄嗟に上体を捻ったのだが、右肩が熱い。あと赤い。すっかりかつつり切られてる。

今の一撃、二刀流などではない。下から跳ね上げた斬撃が箒を捉えた瞬間、その場で体を反回転させたのだ。言うなれば、胴廻し回転切り、である。

……などと言うのは簡単だが。これは先の説明に修正が必要だろう。半人外だとか人間卒業しかけとかいう次元じゃない、こいつは歴とした人外だ。

「今の連撃で仕留められんとは」

「いてて……」

幸い斬撃自体は肩骨で止まったらしく、傷はそこまで深くない。しかし、出血がわりかしシャレにならない感じだ。今すぐ意識がブラックアウト、とはいかないものの、処置無しならその内倒れること請け合いです。

「しかしこれで時間の問題だな」

「いちいち言わなくていいじゃんか……」

実際言葉として聞くとゲンナリしてくる。そもそも箒が利き手で扱うものでもなかったのは不幸中の幸いか。

「さてどうだ」

「つとと！」

それでも不利は覆せない。防戦一方この極み。跳ねる度響く痛みを顔をしかめる。

左方から来た大降りの一撃を受けると、勢いそのまま右上へ。そこから反転し、右上、真下、そして突きの三連撃が双羽を襲う。後半受けるのを諦め、大きく跳ぶ双羽。

地に足を着いた瞬間、視界が漆黒に染まった。

「わっ!?!」

ちよつとした血液不足、それに起因する視界のブラックアウト。一瞬のことではあるものの、双羽の着地を阻害し、かつよろめかせるには十分。

踏鞴を踏むその視界に、研ぎ澄まされた剣先が迫る。

「……やっちゃた?」

「つまりこれで終わりか残念だな」

いちいち剣を振り上げたりはしない。最短経路をもって双羽を貫くべく剣は走り。

「……呪術・金縛り！」

「おつと」

す、と身をかわすアリア。軽く地を蹴り、間合いを取る。その顔が微かな笑みを浮かべたのは見間違いでないだろう。ゆっくりと起き上がる双羽を庇うような位置取りで、黒いマントが翻った。



……なんとなく、立ち位置が逆のような気もする。

「カナちゃん。ありがと」

「双羽、血、出てる……」

「ん、大丈夫だよ。……今のところはねー」

一度深呼吸して鼓動を鎮める。やはりこれ以上血液を失うのは非常によろしくない。

「なるほど2対1かそれもいいな本気を出そう」

今までので本気でなかったというのか。正直気が滅入る。

……が、双羽の状態はお世辞にも万全と言い難い。狙うべくは、短期決戦だ。

「行くよー!」

VSアリア、第2ラウンド開始である。

第拾参話 剣速術師・ありあ（前書き）

題名は適當。あと双羽がなんかアレなのも仕様。

しかしまともな長さに仕上げたの久しぶり。続かない人間なので

……

## 第拾参話 剣速術師・ありあ

敵が、増えた。アリアの体はその戦えることの悦びに震える。

そこらの来訪者ごときなら、何人来ようとその剣の敵ではない。所詮平和の中から抜き出された者たち。生まれてこのかた剣を持つていない時間の方が少ないアリアにとって、その存在は蟻のようなもの。組織だった行動をもって初めて一矢報いることが可能となるような、か弱い存在に過ぎない。

その点、あのトモハネとかいう少年は違う。宿の外に潜むアリアの気配に気づき、その剣閃を受け切るその戦闘力。

……いや、そんなことではない。彼からは、同じ匂いがするのだ。仕方なくこの世界へと順応した来訪者とは違う、人生そのものに戦いを組み込まれた者たち特有の、匂い。詰まるどころ、彼女は“同族”の気配をそこから感じ取っていたのである。

結果として“試す”という大目的をきれいさっぱり忘れているアリアであったが。

「……呪術……」

「遅いな」

「えっ!？」

魔法を使おうとした黒マント、その懐へと瞬間移動の如く飛び込む。静から動へ、一瞬で。少年には効かなかったが、常人ならば確実にこちらの姿を見失うだろう。

案の定、黒マントはすぐ脇へと滑り込んだこちらに気づけていないようだ。明後日の方向に注意が向いている。

余裕をもつて的確に狙った足払いは、しかし地面へと突き立てられた筈によって防がれた。少年の援護だ。

「カナちゃん、下がって!」

掛けられた声に合わせ、後方へと跳ぶ黒マント。追い打ちを狙うが、高速回転する筈に進路を阻まれる。その隙に体勢を立て直した

黒マントの右手がこちらへ向いた。

「今度こそ……呪術・金縛り」

ぐ、と収束される力。その雰囲気からして、どうも動きを封じる魔法らしい。が、まあ当たらなければ意味は無いわけで。

上体を逸らし、結集した力から座標をずらす。

「単純過ぎるな」

「避けられた……!？」

今までこのタイミングで避けられたことは無かったのだろう、動揺が目に見える。しかし、その収まりを待つほどこちらもお人好しではない。

隙を突いた必中の切り上げは、しかしまたもや箒に阻まれた。いちいち支援が的確過ぎる。

……これは、本当に全力で行くべきか。

「しょうがない出し惜しみはもう無しにしよう」

「……わざわざ教えてくれてありがとー」

「……まだ全力じゃなかったの」

そろってうなだれる少年と黒マント。2対1とはいえその年齢でアリアの本気を引き出せたのだ、もっと嬉しそうな顔をすればいいのに。

まあいい、初めの一撃はサービスだ。不意打ちは彼女としても望むところではない。

「ツンセケハリクムアヤニエノイジノスアスウチスセニソ」

ぱす、と。なんだか気の抜けるような音が駆け抜ける。咄嗟に反応した箒の少年だが、こちらの狙いはそこではない。もっと、後ろ。気づいたのか、油の切れたカラクリ人形のような動きでギギギと振り向く少年少女。そこには、細切れになった街灯の残滓が。

「……カナちゃん質問。この世界の人って、0.3秒で鉄の棒一本くらい簡単にバラせたりする？」

「それ言って信じてくれる人捜すのは大変ね……」

「うん、安心。あの人が怪物なだけなんだね。良かった」

「……全然良くない」

「そろそろ良いか行くぞ」

「良くない、って言うてんだただね！」

ここまでサービスしたのだ、コントまで終了を待ってやる義理は無い。地を蹴り、右方上空へ。民家の二階部分に足を着き、次はそこを踏み台に箒少年へと跳ぶ。

「ヤコチシウツシコンアヤニエノイジノスアヤリツネウイヘソ」

同時、黒マントに向けて炎魔法を発射。直線状に伸びる炎筋の速度は中々だったが、辛うじてかわされる。しかし着弾時の爆風は流石に避けきれず、大きく吹き飛ばされる黒マント。民家の端に積んであった布袋の山へと突っ込み、盛大に粉塵が立ち上った。

「カナちゃん！」

「他人の心配をするとは随分と余裕のようだが私はこちらだ」

「……っ、わわっ！」

いったん少年の背後へ着地し、そこから跳ね返るような急突進。遠心力を乗せ、剣速よりもパワー重視の一撃を放つ。しっかりと防御されたものの、そこは先の怪我が効いている。踏ん張りがきかなかったのだろう、少年は丁度黒マントの吹き飛んだ方向へと転がっていった。

……まあ、双方まだくたばってはいないはず。そうでなければつまらない。

「えっと、さ。ちよーっと、強過ぎるんじゃないかな？」

「……あの剣技にあの魔法って……反則じゃないの……？」

ステレオの文句と共に姿を現す2人。少年には肩の傷、黒マントは裾の方が少し焦げているようだ。

満身創痍、というわけでもない。しかしもって、このままではアリアを倒すに不十分。さて、どうする。

「……ふう」

少年が、短くため息を吐く。何が変わったわけでない、が、しかし。

「カナちゃん、さっき言ってた通りに動いて」

「良いけど……どうしたの、双羽？」

「どうもしてない。ただ、少しは頑張らないと、って」

「……そう」

いやいや明らかに何か違うだろ、なんて無粋なツツコミ役はここにいない。アリアだってそうだ。

「そうかそうかそれは楽しそうだな少年！……シダコスヲサカウドリクミアヤニエノヌラウイジノスアネウイヘスキゾン」

つつけばつくほど何か出てくるあの少年、面白い。さて次は何だろう。期待を全身に巡らせ、先の炎筋より更に一段階上の魔法を発動した。数多の刃が地より突き出で、宙を舞う。

そうやって発生した無数の氷刃に紛れ、目指すは少年。それだけで軍の一隊を消し飛ばすであろう氷の刃群、これが全てアリアの意のままに動くのだ。

「あれは……戦略魔法！？ 双羽、アレ戦争で大砲代わりに使われるような魔法なんだけど……」

「大丈夫、なんとかなる」

言つと同時に、少年は箒でもってこちらへと一直線に駆ける。正解だ。

この過多の魔法、つまり面で迫る攻撃に対しての最善手は“全てを相手にしない”こと。事実、少年は極一部の氷刃だけを回避しつつこちらへ迫る。外周に位置する刃は内側の氷が邪魔になり、彼に届かない。

このまま接近戦に持ち込んでも良いのだが、それはアリアの流儀に反する。

「ウイクサケアヤニエノスアネウイヘセ」

「わ、つとー！」

指先に収束した雷光を少年めがけて解き放つ。それに対し、少年は急ブレーキののち箒を避雷針代わりに回避してくる。……だが、こんなもので終わりではない。

「シコンアヤニエノイジノスアリススウエ」

「シドハジイアヤニエノイジノスアヴァケジンテウエ」

「クノネセリウアヤニエノイジノスアチツナカテ」

「わ、と、と……って、早口言葉!？」

熱線が飛び、真空の刃が振り抜かれ、そこに細長い氷槍が一撃。

通常ならばまずもって驚かれるであろうこの連撃を、苦労しつつも少年はかわし切る。流星は来訪者、常識を知らない。

ちなみに黒マントの方は、氷刃群によって射線を塞いでいる。あの手の位置指定型魔法は、たいてい相手の現在地をしっかりと認識する必要があるのだ。数度散発的に放たれてはいるが、この状況で当たる方が難しい。

「なんで、当たらないのよ……!」

「だから言っただろう単純だとそれから不用意に言葉を発するのは狙ってくれと」

「ていやっ!」

「言っているような、おっと」

黒マントを狙おうと手を出しかけたが、絶妙のタイミングで少年が飛びかかってくる。

「……呪術……」

さらに、そこに向けて魔法を放つ黒マント。一旦氷刃を集合させた壁としてそれを防ぎ、少年の筭をはじく。そのままバックステップをとった少年を追撃、したあたりで異変に気づいた。

氷刃群が、動かない。基本、こちらの動きに追従するよう設定していたはずなのだが。

「何故氷が動かないとなるほどそういうことかやられたな」

黒マントの魔法を妨害せんと集めた氷刃が、逆にその魔法の標的とされたのだ。固めて壁としたことにより、一気に動きを止められたのだろう。

頭の片隅でそんな思考をしつつ、少年を追撃する手は緩めない。

残念ながら、あの氷刃の大半を無効化されたところで黒マントの魔

法には当たらないのだ。そもそもが防御より威圧用の戦略魔法、こうして少年が懐に飛び込んできたことで既にその役目を終えている。少年の方はといえば、流石に流血が効いてきたらしく辛そうな顔をしている。動きも先より悪く、防戦一方に加えて下がりはなしだ。もう先は短い。

「わわっ！」

……と思う内に、こちらの切り上げを捌き切れず箒が宙に浮く。すくい上げられた箒はその場で停止するが、一瞬少年の手には何も無いという状態が発生した。慌てず騒がずそこを狙う。

「……っ！」

対して少年、転がるように大きく後退。こちらとしても予想外の動きだったため初撃は外すが、この無理な動きによる体勢の崩れは致命的だ。小細工は無し、大きく踏み込む。

頭上にあつた箒が振り下ろされるが、これはしつかりと剣で受け止めた。これで箒のやっかいな自動操作を一時的に押さえ込める。

「凶運・頭上注意！」

黒マントも援護に魔法を放ったようだが、慌てたためか照準は見当違い。無視して前進し少年を剣の間合いに収めた。

「これで終わりだ」

「……君が、ね！」

少年の言葉を聞いた瞬間、アリアの第六感が警報を鳴らす。思わず上を見た彼女の視界に、倒れてくる街灯が映った。

「なんだ一体何が」

ピンポイントでこちらに向けて倒れてくる鉄の棒。そこに疑問を差し挟む余地も無く、アリアは背後へ跳ぶ。なんとかこの一撃こそ回避はしたものの、これによって崩した体勢は致命的。まさか数秒前のセリフがわが身に返るとは思わなかった。

「たあっ！」

そこを見逃す少年ではない。箒を縦に構え、真正面から打ち込んでくる。これも足を踏ん張りなんとか防御。



「……呪術・強制リバウンド」

直後、体全体に尋常でない重圧がのしかかった。ここにきて、街灯の一撃以後黒マントが意識から外れていたことを思い出す。失策だ。

そうやって後悔する時間も短く、今現在速度で勝る少年が後ろへ回り込むのを確認。慌てて振り向くも、そこにはもう少年の姿は無い。回り込むと見せかけ、アリアの周りを一周したのだ。

その事実気づいた彼女は振り向いた体を戻しつつ、後ろへと跳ぶ。体の重さ故に転がるような移動となったが、少なくとも少年の接近まで一瞬の間を作ることができた。

少年は高速でこちらへ突進してくるが、この距離ならば魔法が間に合う。黒マントはこの重量魔法を維持するのに手一杯のようだ。いける、なんとかなる。

「シコンアヤ……がつ!？」

「はい残念」

アリアの頭部を、予想だにできなかった衝撃が貫いた。しつかり脳を揺らしたその一撃は致命傷に遠く及ばず、しかし彼女の意識を刈り取るには十分な威力を持っていて。その閉じてゆく視界に、未だ警戒の眼差しを向ける少年。久々の強者との出逢いに感謝しつつ、アリアはその強固な意識を手放したのであった。

第拾肆話 交々理由・なぜなにそのわけは（前書き）

気がつけばバトルばかりしてる双羽たち。なんと全話の1/3は戦闘シーン。こりゃ多い。

ということだ。タグにバトルとか戦闘とか入れようかどうしようか  
悩み中。さてどうしよう。

## 第拾肆話 交々理由・なぜなにそのわけは

激戦から一夜明け。まだ朝靄の霞む時間、起き抜けの双羽一行は宿屋の裏手にある中庭に集まっていた。宿の部屋はすでに引き払い、全員しつかりとした旅装である。本来チエックアウトは昼頃なのだが、部屋やら扉やらぶち壊したことで半分追い出される形となってしまった。弁償はきつちりしたのだが、まあ心証的にしようがないところではあるだろう。

それにしても、3人とも妙に元気が無い。夕依はあちこちに傷跡が見えるし、双羽の右肩にはこれでもかと包帯が巻かれている。快調なのは華月くらいのものだ。それでも昨晩はあと2人の処置に係りきりだったため、寝不足の感は否めない。結果として全体に疲労の空気漂う一行であった。

「くそ、こんなところに埋めやがって……」

「……お前ら人をなんだとボヘツ!？」

「……あんた、人じゃないでしょ」

そんな湿っぽい空気もなんのその、地面から生えていた頭のうちふたつが騒ぎ立てる。そしてジト目の夕依に踏みつけられ、更に沈む。

生首オブジェとなって中庭に鎮座するのは、今は頭の上しか見えない人形含めて3つ。残りのひとつはアリアだ。なんかロープとかで縛っただけだと抜け出しそうだったので、縛った上でこうして首まで土に埋めてある。ちなみにこの状態、華月の文字魔法“埋”で3秒だった。

「……それで、大田宮。こいつら何なのよ」

「普通の人、じゃないよね。まず半分以上人じゃないし」

「ふむ、それなのだがな」

双羽と夕依がアリア相手に頑張っていた間、華月は残る人形2体を尋問していたのだ。昨晩は色々と忙しくて、その結果内容を聞け

なかったのだが。さて、一体この襲撃者たちは何者なのか。

「実は、さっぱり何も分からんのだよ」

「……は？」

「いやだから、こいつら何しても口を割らんな。さてどうしようかと思っただころで貴様らが戻ってきて、あとは知っての通りだ」

「……」

「うーん、せめて襲ってきた理由だけでも分かんないとねー。またいつどこで襲われるか、って予測もできないや」

ピンポイントでこちらが狙われているのか、偶然巻き込まれただけなのか。この町この地域故の出来事なのか、どこへ行くこうと付きまとうだろっ事件なのか。そのところが分かるか分からないかで、この旅の幸先も大きく変わってくる。

「この人形共をいくら脅そうとしても無駄だ」

……と、今まで会話に参加していなかったアリアが口を開いた。

相変わらずの棒読みだ。赤く腫れた顎が痛いのか少し喋りにくそうだが、誰も気にしない。

「……どうということ？」

「こいつらは決して事情を話さないよう設定されているからな例え体が粉碎されようと話さないだろう」

「ちょ、アリア殿……」

「……もごもご（それは喋ってはダメなのは）！？」

「ヨクヲクテウエ、貴様らは黙っている」

「……」

アリアが一言吹き命令すると、あれほどうるさかった人形はピタリと口を閉じる。まあ片方は埋まっているため分かりづらいが。

「ほう、特定の呪文を用いて命令する事によって操れる、と。面白いな」

「残念ながら登録された個人でなければ命令は不可能だ」

「なるほど、そいつは確かに残念だ。早速色々試そうかと思ったのだが」

なんだかよく分からないところに食いつく華月。それにすっかり返答するアリアも存外律儀な性格だ。

「……ちよっと。そんな話するために、わざわざ人形黙らせたの？」  
しかし、このままでは話が進まない。そう思ったであろう夕依が華月とアリアの会話を止める。

放っておけばこの話題で日が沈みかねない、と。そう思わせる何かがあった。

「いや違うぞ」

そしてその質問にも律儀に答えるアリア。性格が窺える。

「じゃあ何さ」

「端的に言つとおまえたちが気に入ったので事情を教えようと思つたのだが」

「ほう。気に入った、と？」

「私は強者が好きだからな」

何とも武人氣質な女性だったようだ。

「……ありがとう。じゃ、教えられることだけでいいから、よろしく」

「分かつたまずはそうだな私たちはベンフィード公国に属する者でその役目は召還した来訪者の選別で周囲の町に散在した上でやってくる来訪者を篩に掛けるということをしていたのだがこの人形2体はその補助用に作られたカラクリ人形で私の命令に従うよう設定されている」

「なるほどなるほど」

納得顔でうなづく双羽。しかしその後ろでは、黒マントと白衣が顔をつき合わせている。

「……聞き取れた？」

「部分的には、な。早口な上に棒読みで言葉に節が無いせいで、まるで呪文か何かのように聞こえたぞ」

「……そうよね。……じゃあなんで、双羽はしっかり理解できてるのよ……？」

もう一度首を捻る思案顔の2人だが、まあ答えが出るわけではなく、結局、双羽ならいつものことだと納得していた。それでいいのか。

「うーん、それだけ？」

「そうだ残念ながら今私が教えられることはこのくらいだ済まないな」

「そっか。ま、知りたいことは分かったし、いいかな」

ちなみにこの会話、片や土の中な状態で行われている。生首相手に屈んで話す少年というのも中々シニールな光景だ。

「……まあ、必要なことは聞けたようだな。出してやるか」

そろそろこの何とも言え無さに耐え切れなくなってきたらしい。

呟きつつ、“出”の文字を生首3つに書き込む華月。

「“出”てこい」

ばすん、と飛び出すアリアと人形たち。唐突な解放だったが、それでもしつかり余裕をもって着地したアリアは流石だろう。

一瞬遅れて人形ふたつが両脇にべちゃりと落ちてきた。まあ普通はこうなる。

「出してくれてありがとう済まないな礼を言う」

「ま、元々埋めたのは僕たちなんだけどね」

「そうされても仕方のないことをしたのかもしれない」

元々の元々を辿れば、双羽たちはただ襲撃されただけの被害者なのだ。今この状況だけ見ていると忘れそうだが。

「ところで済まないついでにひとつその少年に聞きたいことがある」

「ん、僕？」

「そっか」

何だろう。向こうの知らない情報をこちらが知っていると思えないのだが。

「私は今まで負けたことが無いとは言わなくとも負けた理由が分からなかったことは無かったのだが少年がああ戦いの最後に何をしたらかが未だに分からないので是非教えてもらえないだろうか」

「ああ、それね。それなら簡単、こうしただけだよ」

取り出した箒の柄を持ち、誰もいない方向へと勢いよく突き出す。呼応して伸びた箒は建物ひとつ分遠い石塀に傷を付け、次の瞬間には双羽の手の中に元通り収まっていた。実際には箒の柄を高速で伸び縮みさせただけなのだが、傍目には神速の突きと見えないこともない。箒が伸縮自在であることを利用した、双羽唯一にして最速の遠距離攻撃である。

「この箒、自由に長さを変えられるんだ」

「戦闘中は一切そんな素振りは無かったがそうかなるほどつまり私はまんまとハメられたわけか」

「人聞き悪いよ？」

ハメたのではない、歴とした情報戦略だ。どこが違うんだという意見はもちろん却下。

……つまり、のっけから全力で戦っているフリをしつつ、意図的にこちらの能力を一部隠蔽するわけだ。情報を与えないことによつて、ここぞというところで相手に作った隙をつく。ここでいう隙とは、あの街灯による一撃だ。それでも仮にアリアが箒の伸縮機能を知っていたなら、それを踏まえた上で体勢を立て直しただろう。最後の突撃時に魔法での迎撃という選択肢を選んだのも、ひとえに双羽のリーチを読み違えた故。知ってさえいれば、あの状況をも潜り抜けてきたに違いない。

ちなみに決め手となった街灯転倒攻撃だが、アレは双羽の仕業ではない。夕依の“凶運・頭上注意”だ。“凶運”とは対象に特定の不運を呼び込む魔法である。その一種である“頭上注意”、これは文字通り相手の頭上から何かが降ってくる魔法なんだとか。少し前だが、海パン野郎を伸したのもこの魔法だ。

本来相手に当てるべきこの魔法を、あるとき夕依は双羽の箒に対して発動させた。これと同時に箒の位置をアリアの真上に持って行けば、もちろん落下物は彼女にも被害を与える。夕依の魔法の着弾点的確に見切る、あの超反応を逆手に取ったのだ。結果として、

自分を狙っていないと判断したアリアは倒れてきた街灯に対する反応が遅れた。

……変則技による精神的な圧迫、そこに先入観を利用した不意打ち。このふたつが重なってはじめて、双羽たちは勝利を得ることができたのである。

「そこまで詰められていたのかそれならば私の敗北も必然だな」

「……そんなこと全部蹴散らしそうなくらい強かったけどねー」

「……ほんと、あれだけうまくいったのって奇跡よね……」

もちろんあのととき夕依は双羽の作戦を知っていた。それに合わせて動いた結果がアレなのだから。

しかしそこに今の解説を聞いて、改めてあの戦いの綱渡りっぷりが実感できたようだ。双羽に言わせればアリアのあのチート性能が全部悪いのだが。

「さて、もう俺たちは宿をチエックアウトしてきたわけなのだが。

アリアとやら、貴様らはどうするつもりだ？ 仮にも俺たちとは敵同士なのではないのか？」

「公国側の目的としては強者の選別なのでここで見逃すことには特に問題無いというよりそちらの強さが判明した後も戦い続けたのはただ単に私の趣味だ」

「……」

そんなことで命の危機やらされたのかという意味のジト目×2が、アリアを睨みつけた。本人は堪えているのかどうか分からないくらい無表情だが。

「済まないな悪かったとは思っているがどうもああなると抑えが効かないのだ」

反省の色も怪しいアリア。彼女、武人氣質かつ根っからのバトルジャンキーでもあるようだ。いい性格をしているが、巻き込まれる側としてはたまったものではない。

「というわけで私の方からそちらへこれ以上の干渉は無いので安心して旅を続けて欲しい」



「ん。それじゃ、これでお別れだね」

「そうだなそちらが公国を目指すのならばまた逢うこともあるかもしれないが」

「……次会うときは、敵じゃないといいわね」

まだしばらくはこの町に残るらしいアリアたちに別れを言い、双羽一行は旅を再開することにした。目的地のはっきりとしたこの旅、さっさと終わらせるに越したことはない。寝不足気味の体に文句を言われつつ、3人は先へと進む。

……町を離れ、それからしばらく。最後尾を歩く双羽がふと呟いた。

「……やっぱ、アリアリ、かな。うん」

実は朝からずっとアリアの愛称考えてた双羽なのであった。

第拾伍話 道中小話・ちょっとした（前書き）

なんだか説明回になってしまった。必要な話なんだけど、でももうちょっとなんとかならなかったのかな、と。技術不足です。

第拾伍話 道中小話・ちよつとした

《はいてんしよん白衣》

ひたすら続く平原を、ひたすら歩く。辛うじて見て取れる道を辿り、歩く、歩く、歩く。遙か遠くに臨む地平線へと、歩いて歩いて歩いて……

「……長いわ！」

「……どうしたのよ。とうとう頭やられた？」

延々と変わり映えしない景色への怒りを、何処へともなくぶつけてみる。が、しかし何とも酷い一言で夕依にぶつた切られた。せつかくのネタ振りだったというのに。

双羽だったらしつかり拾ってくれただろうか、と後ろを振り向く。夕依と華月の歩調に合わせてふよふよと低空飛行する筈、それに跨る少年。……いや、跨るといふのは間違いか。大の字うつ伏せの人間を体の軸だけ支えた状態。手足は重力に従って垂れ下がり、寝息に合わせて微かに動く。絶賛お休み中の双羽である。よくあの体勢で爆睡できるなと感心してみたり。

数日に一回、双羽はこうして朝から夕方まで寝通すことがある。理由は知らないし知る気も無い。ただ、ちよつとやそつとで起きないことだけはよくよく身にしみて知っている。つまり、今この場で話し相手は夕依のみだということだ。

「いや、この道なのだがな。いくら何でも単調過ぎるのではないか？」

「……しょうがないでしょ。この乾草原迂回したら、旅の期間が月単位になるわよ……」

「まあ、そうだったな」

このあたり一帯、一応草は生えるが人が暮らすに適した環境ではない。雨が滅多に降らないのだ。よって、町を辿ると丁度草原地帯の縁をなぞることになる。突っ切つて一週間のこの草原の、だ。い

くら何でも遠回りし過ぎだろう。……しかし、今ならそれでもいいかと思えてしまうのが怖い。

それにしても、暇だ。無論、歩を進めるといふ旅においてこの上なく大切な動作はしつかり継続中。しかしもって、生憎華月も約一年程前まではただの高校生だった。3日連続の草原オンリーな光景を娯楽に転化するスキルは、まこと残念ながら持ち合わせていない。結果として、歩きながら暇を感じるといふ器用な状況と相成ったわけである。

「まあそれでも、暑かったり寒かったりしないのは良いことだな。

これで真夏日とか言われでもしてみろ、俺は歩かんぞ」

「……じゃあ置いてくわよ」

「その貴様の冷たさが俺を救うということだな」

「……は？」

何言つてんのコイツ、つてな視線を差し向けてくる夕依。迂闊にも華月自身そこに異論は無い。

暇過ぎて自分の言動が制御し切れていない気もする。いやまず暇過ぎてという理由からおかしいか。

「……さて、俺はしばらく黙っているとするか。口を開けば開くほどカオスへ突き進む気がしてならん」

「太田宮の口からカオスなんて単語が出てくる時点でおかしいわよ……」

そうだろうか。……確かに、言われてみれば彼が横文字を使うのは珍しいかもしれない。特に普段からそんなことを気にしているわけでもないのだが。

「ふむ。つまり俺がカオスと言う事自体がカオスであるとして、しかしながらこれを俺の口で説明するためには最低二度のカオス発言が必要であるが、しかし今の時点でカオスと言ったのは3回、いや今ので4回目のカオス、といやまたもう一回増え……」

「……呪術・口パッチン」

「……！……？」

せつかく脳内の思考を口に出すことで纏めていたというのに、急に言葉が発せなくなつたため中断せざるをえなくなつた。どういう原理かはよく分からないが、とりあえず舌が巧く回らない。夕依の魔法だろう、思った以上に色々できるようだ。

そんな感想を抱きつつ、取り出した筆で左の手のひらに“喋”と書き込む。まだ墨の乾かぬその文字を口元に当て、望む効果を念じれば一丁上がり。

「……ふ、甘いな。それしきで俺の口を封じようとは3ヶ月早いわ」  
ちなみに発動した時点で対応する文字は消滅するため、顔に変な模様が付くことを恐れる必要は無い。自分で言うのもなんだが便利な仕組みだ。

「せつかく静かになると……」

「そうかそうか、そんなに俺の声が聞きたかつたか。濟まんな3秒ほど黙つてしまつて」

「……は？ 何わけの分からない……」

「訳の分からないとは残念なことだ。俺は貴様でも分かる程度には言葉の質を落としているつもりだったのだがまだ足りなかつたか」

「……あんた、バカにしてるでしょ……？」

さて、暇だ暇だと言い続けようとおかしな事を言ってみようと、暇である事実は厳然として変わらない。やはり、暇潰しには何かをイジるのが一番。物とか、人とか。

「バカにしているとは心外な。貴様に対して出来得る限り丁寧に振る舞つた結果がこれなのだぞ？」

「……それをバカにしてるって言ってるのよ……」

ただしこれまた人にしる物にしる、イジリ易さというのはある。

例えば、イジりにくい人間筆頭、双羽。『何をやってるこの阿呆が……と、阿呆とは言葉が難しすぎたな、意味分かつたか？』というフりに『うーん、コトバガムズカシスギタってどういう意味なの？』と返ってきたときは転けそうになつた。思わず『そこじゃないだろう』とツツコんだあたりで双羽が浮かべた笑みが素晴らしく輝

いていたのはよく覚えている。

対して夕依はイジリ易い方代表だ。今だって適当に放った言葉にしっかりと食い付いてくれている。しばらくは楽しめるだろう。

「そうかそうか。ふむ、困ったな金峰がここまで自己嫌悪に陥るとは。そんなに自分のバカさ加減を周りに」

「呪術・ロパッチン」

「（“喋”れ）……む、どうした金峰。そんな世の真理に気づいたつもりの黒マントみたいな顔してからに」

「……」

こうなれば完全に華月のペース。寝る時分くらいまでは退屈せず済みそうだ。

……そうやって、素晴らしき暇潰し方を見つけた華月。しかし、このとき背後より向けられる視線に気づかなかったことが不幸の始まりだなどと、まだ彼が気づく由も無かった。

「……何だこの締めは。続かんぞ」

……

時に人は、自らより優れたたるを憎む。生まれたときから自分よりモテる幼なじみ然り、酒の席の盛り上げスキル持ちかつ上司のお気に入りな同僚然り。

まあそのあたりはしょうがないものなのかもしれない。人間妬んでなんぼの生き物だ。そこは認めよう。

……しかしまあ、妬まれるという受け身側の体験は、中々に辛いものがある。

「……不公平よ」

「えー。だってしょうがないじゃんか、僕が選んだんじゃ……」

「……理不尽よ」

「えー」

……何って、双羽の箒魔法が不公平かつ理不尽だというのだ。こ

「つちは歩いてるのにその横を飛ぶのが目障りなんだとか。選択の余地無く修得させられた魔法について、さて上記のしょうがないは当てはまるのだろうか。」

「……でもさ、例えばカツちんの魔法……」

「……あ？ 何だ、よく聞こえなかったのだが」

「ん、“カツちん”？ もちろん華月君のことだよ、略してカツちへぎゃ」

「早急に撤回しろ」

「ふあい」

「前々から考えてはいたのだが、どうやらお気に召さなかったようだ。残念。」

「……で、俺の魔法がどうしたと？」

「そうだ、そういえばそんな話題だった。」

「例えばさ、華月君の魔法で“速”とか“浮”とか使えば、もっと早く移動できるんじゃないの？」

「何を言っている。貴様とは違うのだから、そんなことをすれば一瞬でへバるぞ俺は」

「そなの？」

「へバる、とはどういうことだろう。そもそも魔法の使用制限なんてあったらどうか。」

「……双羽。魔法はね、体力を使うの」

「体力？」

「そう。魔力とかそういう何か別のものじゃなくて、体力」

「じゃ、魔法使い過ぎると普通に疲れるんだ」

「そうよ。……あと、これは来訪者なら知ってることだから……」  
「来訪者なら知っていること。つまり、召還された際に植え付けられる基礎知識に含まれているのだろう。知らぬ様子の方こちらを見、華月が不思議そうな顔をするわけだ。」

「……あれ、じゃあなんで僕疲れないの？ 最近いつも飛びっぱなしなんだけど」

「知らないわよ。……だから、理不尽、って言ってるの」  
「確かにそうだな。俺も“飛”で飛べるが、10分も続けられ立てなくなるぞ」

思っていた以上に魔法というのは燃費が悪いものらしい。唯一使える筈魔法がそのあたりチートだったため、今初めてそのことを知った双羽である。思った以上に恵まれた状況だったのかもしれない。ちなみに彼は知らないが、魔法の消費体力には種類に関わらず法則がある。基本的には発生する現象分のエネルギーを消費し、さらに消費量は発生地点と使用者との距離に比例するのだ。例えば物を動かす魔法の場合、“重量×移動距離×使用者からの距離”だけ体力がさつ引かれる。ゼロ距離で使えば手で持つて運ぶより楽なもの、そう頻発できるものでもないのだ。

あとついでなのだが、アリアが戦闘で使っていた魔法の消費体力合計はフルマラソン2回分ほど。流石人外である。

「魔法って便利みたいだけど、思ったより使うの大変なんだね……」  
この世界、日常生活でも簡単な魔法は使われている。が、それに頼り切った文明が形成されてないのもこの性質に拠るところが大きいの。まあ、そこで機械文明の代わりに魔法道具が発達しているわけなのだが。

「ま、楽なことばかりしてちゃ、人間成長しないもんね！」

「……じゃあ歩け」

「……ヤダ」

廻り廻って、結局話はそこに帰着するのであった。



第拾陸話 嵐港大船・あらしのちみなと

窓の外に見えるはずの大きな時計塔は、霞んでいてよく見えない。ナウエサのやたらと立派なやつに比べれば流石に見劣りするが、それでも町のどの建物より高く大きい三角屋根の塔。それが霞んで見えるほど、今天より降り注いでいる雨は激しかった。

「今は……ふむ、1の刻か。それにしても暗いな」

「……今日中に止みそうもないわね……」

「つてことはもう一泊？」

「そういうことだな。暇で死にそうだ」

乾草原地帯を抜け、途中目的地であるユヒナ港まで辿り着いた華月たち一行。あとはここから一週間船の旅をすればベンフィード公国はすぐそこ、だったのだが。

「それにしてもさ、あの河のところ凄かったよねー。僕、雨の壁つて初めて見たよ」

「奇遇だな、俺もだ。……雨が降らない、というのも、まさかあのレベルだったとはな……」

丁度乾草原地帯の端には河が流れている。信濃川とかよりは大きい。アマゾンだとかそのあたりよりは遙かに小さい、そんなサイズの緩やかな河川。曖昧だが、まあ大体そのくらいの流れが草原地帯の北半分を包むように横たわっているのだ。ちなみにその河まで辿り着いたのは、草原地帯に入ってから8日目の夕方である。

で、その河に何本か架かっている橋を前に、3人は謎の光景を目にした。丁度河のど真ん中を境に、こちらは晴天、あちらは曇天通り越して大雨暴風警報状態。まるで河の形が天に写し取られたかのように、黒雲と青空との境界がそこには出来上がっていたのである。

そこから先は慌ただしかった。華月の魔法“傘”で雨を突破して、港に着いたはいいけど風強すぎて船が出航できなくて、そのために急遽宿を取って一泊して、それでもって今に至る。残念ながら、一

晩越した今朝でも変わらずの豪雨暴風フルコンボだ。これはまあ、ほぼ確実に2泊目突入である。

「気は急くけど……船が出ないんじゃ、しょうがないわよね……」

「ま、お金はまだあるしさ。いつまでに着かなくちゃってワケでもないし、今日は一日のんびりしようよ」

「そういうことだな。さて、問題は外にも出ずに何して時間を潰すかということだが……」

「……本でも読んでるわ……」

さて何かしようぜ、という華月の言外の誘いをのっけからぶった切る夕依。なんだか少し悲しくもなるが、これもいつものこと。この程度じゃ華月はメゲない。

「ふむ。……把臥之、少し……」

「あ、この宿つてさ、確か厨房借りれたよね」

「……あ、ああ。確か借りられたと思うぞ。表の看板に書いてあった」

流石に無料というわけでもないが、厨房の貸し出しをしている宿は多い。特に、旅人向けのそこそこ余裕のある宿なんかは大抵やっている。旅銀の少ない旅人などは、ここで半自炊することで食事代を浮かせるのだ。貸出料金も、まあまともに外食するよりはリーズナブルなお値段である。

「じゃあさ、僕久しぶりに料理してくる！ この世界の料理教えてもらいたかったんだ！」

「む、そうか」

言うなり、ててと部屋から駆け出していく双羽。置いて行かれた感満載の華月。というか料理などしたのかあの少年は。そこそこ驚愕の新事実だ。

なんとなく横を見るが、夕依は既に本の世界へ入ってしまったている。

それにしても、その大量の本はどこから出てきたのか。明らかに彼女の荷物袋の容積を超えている気がしなくもない。……いや待て、

明らかにこの町で発行されたと思しき本すらある。一体いつの間に「……ふむ。つまりすることが無いのは俺だけ、と」

なんだか悲しい事実に気づいてしまった華月である。こう見えて元の世界ではアウトドア派だった彼にとつて、外出を制限された状況というのは非常に辛いものだ。限られた空間を楽しむ術なんぞ生憎持ち合わせてはいない。

「……しょうがないな」

ここはひとつ、考え方を変えよう。楽しもうと思うから、いけないのだ。何か……そう、何か今後の役に立つ暇つぶしとか、無いだろうか。

「何かを買う……のは無理か、外には出られん。ならば、何か作るか？ いやしかし、旅に役立つものなど……」

まあ少々頭を捻ったからといって、そんなアイデアがすぐ出てくるほど華月は天才でない。というか、まず自作できるお役立ち品という時点でハードルが高過ぎる。なんたって華月はものづくりに関して素人だ。そんな彼が特別作れるものなんて……

「いや、あるぞ」

あった。彼だけに作れる、特別な、それでいて役に立つ品が。

「まずは……そうだな、白い紙が必要だ。それから、紙の束を纏めておけるような……」

こうしてやることを見つけた華月は、ぶつぶつ言いながら部屋を出ていく。確か宿の一階にちよつとした雑貨店があった筈。目的のものは、そこにあるだろう。無くても、意外となんとかなるかもしれない。

「なるほど、なるほどな。こういうやり方もあったか」

暇つぶし探しの思わぬ収穫“文字魔法の新たな使い道”に、自然類の緩む華月であった。

……廊下ですれ違った宿泊客の尽くが、そんな彼のマッドな笑みにぎよつとしたというのは余談である。

一夜明けた。バケツどころか風呂桶ひっくり返したみたいなあ  
の雨も、今朝方12の刻頃には止んでいたようだ。窓から見える朝日  
には一片の曇りも無く。それに追隨するような雲ひとつ無い晴天。  
どうにも両極端な天候である。

「ふあああ……あ、おはよ、カナちゃん」

「……おはよう」

窓から入る角度の緩い日の日光に目を射られ、ゆるゆると起き出  
す双羽。昨日は結局宿の厨房の営業時間いっぱい居座っていたら  
し、一行の晩ご飯は彼の実験料理フルコースだった。初めて作った  
この世界の料理と言う割に、そこそこの味を出していたことには驚  
いたものだ。料理好きというのは本当なのだろう。厨房係の人にも  
筋が良いと褒められていた。

「……む、朝か。いつの間にか寝てしまったようだな……」

部屋の空気が動き出したためか、華月もごそそと動き始める。  
寝不足気味の目を擦り擦り、ベッドの周囲に散らばる紙切れをかき  
集め始めた。

なんか変な模様が書いてあったり書いてなかったり、長方形だっ  
たり菱形だったり丸かったり。とにかく統一性の無いその紙が何な  
のか、夕依にはさっぱり全く分からない。しかし昨日の晩は遅くま  
でその制作に勤しんでいたようだ。夕依が寝た時点では散らばる  
ばかりだった紙切れだが、今は完成品と思しき長方形の紙がいくつ  
かの輪っかに纏めて留められている。けどやっぱり何なのかは分か  
らない。

ごそそと身支度を整える2人を待ち、夕依は窓から外を眺める。  
いつもこの3人の中で最も早起きなのは彼女だ。ひとり旅が長いせ  
いかもしれない、眠りが浅いのである。昨晩も雨の音で何度か起き  
ていた。

「準備完了っ。華月君まだー？」

「うむ、もう少し待て。昨晩は結局片づける間無く寝てしまったからな」

「そーいえばさ、それって何なの？ 昨日から一所懸命書いてたけどさ」

「まあ、俺の新兵器、といったところだ。具体的な内容は見てのお楽しみだな。……よし、こんなものか。終わったぞ」

大量の紙切れを袋に詰め込み、華月が声を掛けてくる。見れば、双羽なんぞは早くも部屋の外へと行ってしまっていた。宿泊票も持たず何しに行くつもりだろうか。

「……鍵は閉めておくから。先に外出て」

「おう」

華月が出た後、忘れ物が無いか部屋を見渡す。無論他の2人も同じことをして部屋を出ているため、これはただの確認だ。

来たときとほぼ変わらない部屋を一通り確認し、廊下に出て戸を閉める。そこに鍵穴らしきものは無いが、流石魔法が幅を効かせるこの世界。宿泊票である金属板を取っ手に翳す、これでオーケー。宿泊票に掛けられた魔法が扉の魔法と反応し、かちりと小さな音が出る。試しに戸を引いてみるがびくともしない。施錠完了だ。

先にカウンターまで来ていた双羽と合流し、宿泊票を渡して料金を精算する。前の宿みたく頭の痛い追加出費こそ無かったものの、2泊したためそこその値段だ。地味に双羽の自炊は助かった。3人もいれば、一食分の料金だってバカにならない。華月の手持ち含めてまだ余裕はあるが、この先どんな出費があるか分からないのだ。「……しかし、見事に晴れたものだな。あの暴風雨は一体どこへ行った」

「そーだねー。ま、これだけ晴れてたら船も動くでしょ」

まだ濡れている石畳を歩き、夕依たちは港へと向かう。流石に海の近傍だけあって、あちこちで海産物が売られていた。双羽は色々々興味深げに見回しているが、ナマモノ手に入れてもしょうがない。こちとらまともに料理できない旅暮らしなのだ。

途中でたこ焼きっぽいものを購入して3人で分けつつ、海の音がする方へと歩く。

「……なんだこれは」

「鶏皮……じゃないわよね。海の幸って書いてあったし……」

「んー、ま、美味しいからいいんじゃないの？」

なんか蛸でなくてよく分からない具材が入っていたが、双羽の言うとおり美味しいのでまあ良しとする。

丁度12個人入りのたこ焼きもどきを食べ終え、さてこのゴミどうするよと入れ物の処分に頭を捻る頃、一行は港に到着した。漁師あたりが個人保有してそうな小舟から、そこそこ豪華な巨大客船まで様々な船が一樣に並んだその景色には、どこか元の世界を思い出させるものがある。

「えーっと、一昨日と同じだから……18番だっけ？」

「そうよ」

「今日の前にあるのが5番、ということとは……そうだな、あの底の赤いやつか。思っていたより大きいではないか」

町に着いた日は、そもそも港へ入ることすらできなかった。暴風で波が高くなっていたのだから、まあ一般人立ち入り禁止は当然の措置といえる。その時は乗船受付所で乗るべき船の番号だけ確認したのだ。

この町の港はいくつかに区切られ、それぞれ番号が割り振られている。1から20番港までが大型船、それ以降60番港までが小型船用だとか。客船が停まるのは、もちろん20番までのどれか。今回乗る“ゲイヌシン行き”の船は、18番港にその大きな船体をつけている。覚えているだろうか、ゲイヌシン。目的地たるベンフィード公国、その首都だ。

雨の明けた直後な為か、大体の停泊所に船があった。ここでは先と代わり、華月がその目に興味を宿している。放っておけばまた雨で船が出なくなるくらいまで見てそつだ。

「ふむ、なるほど……側面から取り入れた水を、後方へと噴出する

ことで推力を得るわけか。実に興味深い仕組みだな。ただ吹き出すだけならば大して進まんだろうが……魔法で固めているのか？ それとも何らかの方法で質量を増加させて……」

「はいはい、それはいいから先行くよー」

しかたがないので、双羽に言っただけで引きずって来てもらった。何故夕依がしないって、んなメンドクさいことしたくないからに決まっている。

乗船受付所で受け取っていた札を係りの人に渡し、3人分の乗船許可証をもらう。これがあれば、対応する船には自由に乗り降りできるのだ。出港自体は昼頃になるらしく、それまでに乗ってさえいればいいとのこと。

ただ、これから一週間ほど居室となるであろう割り当てられた寝室も見ておきたい。あと、後ろに控える男2人がきつちり時間を守るかどうかも疑問だ。双羽は素でうっかりやらかしそうな雰囲気を感じ出しているし、華月も放っておけばふらふらと別の船を見に行くだらう。正味、その点全く持って信用できない彼らである。

「カナちゃんカナちゃん、まだこの船出ないんだよね。じゃあちょっとあつち見てきても……」

「ダメ」

「えー……」

「……双羽は、大田宮がどこか行かないように、しっかり見張っておいて。乗り遅れて置いて行かれました、なんて、冗談にならないんだから」

ゲイヌシン行き、これを逃せば次の出港は4日後だ。本来3日の一度出ている便なのだが、雨による遅れを調整するため時間が開いているのだとか。合計一週間宿暮らしとか、ホント勘弁願いたいものだ。主に懐具合的な意味で。

「……ん、分かったよ。万が一、ってこともあるもんね」

双羽の方は納得してくれたいらしい。華月は夕依のセリフなんざ聞いてもいなかっただろうだが、双羽が引きずっていったので良しとす

る。

「ここから一週間、船の旅だ。何事も無ければ、7度日を拝んだ頃にはあのベンフィード公国の地を踏むことになる。そこには、おそろく……」

「私も、乗っておかないと……」

「……先のことばかり、今考えていてもしょうがない。ともすれば暗く沈みがちな思考を引き上げ、船へと乗り込む夕依であった。

……

「へえ、大きな船じゃないの」

「そりゃま、数百人乗せますからね。このくらいの大きさは要りますよ」

双羽たちが乗り込んでから大体一刻の後、18番港へと集まる十数人の男たち。総員荒事慣れしてそうな屈強な者ばかりだが、場所が場所だけにそんなに目立っていない。海の男なんてまあ大体そんな感じの人ばっかだ。

しかしそれ故、そんな集団の中央に立つ人物は逆にかなり浮いていた。女性なのだ。無造作に肩まで下ろした髪と、男集団の中でも埋もれない高身長が特徴か。気の強そうな自信に満ちた目をしている。

「姐さん！ 人数分の乗船許可証貰ってきましたぜ！」

「ありがと。あと、“姐さん”はやめてって言うてるでしょーが」

「でもなあ。姐さんほどその言葉似合う女性ひともいないっしょ」

「そうだよなあ」

「全く。そー言われて喜ぶ女性はいないわよ」

本当に慕われているのだろう、同意を求めた男に数人が真顔で頷く。いつものことなのか、女性も呆れ半分笑顔半分で男衆にチヨツプをかましている。

……そんな彼女こそ、この集団、即ち“アーサミー盗賊団”のり



「ダーに当たる人物だ。一見なんだか和やかな雰囲気流れる人たちだが、ユヒナ港より北西の地域で最近よく聞く新興盗賊団である。金持ちばかり狙うのと、絶対に殺しはしないということとで有名だ。かといって義賊的なものかというところというわけでもなく、結局のところちよつと変わった盗賊団といったところである。むしろ、効率主義であるとする言えるかもしれない。金持ち狙った方が稼ぎは良いし、殺しをしないことで無駄な抵抗を押さえられる。底まで考えているのなら中々だが、さてどうだろうか。」

「……分かる人がこの盗賊団の構成員を見れば、驚愕の余りその目を疑っただろう。その昔猛威を振るった、残酷にして悪逆非道、史上希に見る大規模極悪盗賊団。北西の掃討戦で壊滅したはずの彼ら。そんな集団の中でも強者として知られた団員の顔が、そこにはずらりと並んでいた。」

「だつてなあ。姐さんじゃなきゃ兄貴とでも呼べば良いんギャツ！」

「姐さんチョップ！ あんまそんなことばっか言ってたら、そのうち湖に落とすわよ！」

「……自分で姐さん言ってるじゃないですか……」

「……とてもそうとは思えないジャレ合いを続けながら、船へと乗り込む盗賊団なのであった。」

第拾質話 船上発事・しーじゃつく？（前書き）

相変わらずメインキャラじゃない人は名前が出てきません。設定としては有るんだけど……なんででしょうかね？

第拾質話 船上発事・しーじゃつく？

「海っ、海ー！」

「どうした把臥之。海に何か未練でもあるのか」

絶賛ハイテンションな双羽が船上を駆け抜ける。船の端の柵を行き来しては海海叫んでいるその姿、まあ見た目ははしゃいでいる子供そのものだ。ちなみに補足しておくが、ここはただっ広い塩水湖であって決して海ではない。

軽いノリに身を任せ、彼は船上にいくつか置かれたイスのひとつへと狙いを定めた。んでもって全力ダツシユ、そして跳躍。……いや違っ、最後跳んだのは何かに躓いたらしい。

「わああああ！」

「……え」

咄嗟に体を丸めた双羽は、走ってきた勢いそのままイスへと衝突する。バキガシャドカンとおよそ人間の衝突では出そうもない音を立て、少年とイスは衝突地点から放り出された。無論、そのイスの上で寝ていた人物も一緒に。

頭を押さえながら立ち上がった双羽は、目の前に黒衣の修羅の顕現を見る。

「……双羽」

「ひゃい」

こちらも頭を押さえた夕依が、角とかオーラとか幻視しそうな形相でゆらりと立ち上がった。相当お冠のようだがまあしょうがない。人間食べ物と睡眠の恨みは恐ろしいのだ。

「あんたは、何が楽しくて私の安眠を邪魔するの？」

「え、えーと……」

「言い訳しない」

「ひゃい」

ことここに限り、夕依の言っていることは大分理不尽である。し

かしもつて華月は双羽を弁護したりしない。この件、完全に彼の自業自得だ。それに見てて楽しい。だから止めない。

「ええっと、でも……」

「口答えしない」

「ひゃい」

彼らの会話を横手に聞きつつ、華月は空を見上げる。今日で出港から丸3日、変わらぬ快晴だ。時刻は1の刻を少し過ぎた頃。太陽は南方を中心とした左右線対称な位置から水平線を照らしている。

この世界に来た当初は見る度違和感しか感じなかった双子の太陽だが、今では見慣れたものだ。むしろ太陽がひとつな状態の方が想像しにくくなっている。この世界に慣れてきたということだろう、それが良いことかどうかは別にして。

因みに余談なのだが、華月はあの太陽を『連星』なのではないかと考えている。季節によって位置関係の複雑に変化するふたつの恒星、一点を中心に双方が公転する連星だとすれば説明がつくかもしれない。別にそんなしつかり観測とかしたわけでもないため、現状ではただの推測でしかないのだが。

「……分かった、双羽？」

「ひゃい、分かりました……」

華月がこの世界の天体へと思いを馳せている間に、あちらの方も収束してきたようだ。いつの間にか双羽は正座、それに対し夕依は腰に手を当て仁王立ち。特に夕依、普段の内向的な彼女の性格からはちと想像し辛い程饒舌である。こちらも、少なからず船旅の空気にあてられ昂揚していたようだ。

「……気楽な旅だな」

他人に便乗する船旅とは、これほどまでに気楽なものだったのか。今までの行程とは全く違うこの感じ。

まず、歩かなくて良い。体力を消費しない旅ほど楽なものも無いだろう。自分で操縦しているわけですらないのだ。疲れる要素が皆無である。毎食食堂を利用できるのも大きい。まあ、これには毎日

宿の一泊分ほど金を取られているわけだが。それでも、目的地まで宿屋ごと移動していると思えばそんなものだろう。

また、道中の危険も大きく減る。例えば船旅であっても悪天候等のハプニングは付き物だろうが、陸路に比べれば遙かにマシ。どういうわけか、陸地の上だと天災に加え人災が頻発するのだ。特筆することでも無かったが、実は華月たちも数回野党の襲撃に逢っている。なんとたつて子供2人に青年1人の3人旅。彼らからすれば狙ってくださいと言わんばかりなのだろう。

……まあ、それでも全て逃げ切り事無きを得たわけだが。逃走という点に置いて、無詠唱魔法のアドバンテージは計り知れないのである。

「むっ？」

船旅の素晴らしさを噛みしめる華月の耳に、軽快な調子の短いメロディーが流れ込んできた。ここ3日で数回耳にした音。船内放送の呼び出し音だ。どこそこに忘れ物があるとか、もしくは誰かを誰かが呼んでいるだとか。船内放送の用途は大体こんなものであるため、基本華月には関係無い。何処からともなく聞こえてくる音声伝達の仕組みなら知りたいと思うけれど。

つまりこういうわけで、華月はこの放送を意識半分には聞いていた。故に内容を聞いた時、他の乗客と同じく理解にワントンポ必要だったのは致し方無いことだと言えるだろう。

「あー、あー、マイクテストマイクテスト。聞こえますね？ はい、ありがとうございます。……えー、たつた今この船はアーサミー盗賊団が占拠いたしました。命とか色々惜しい方は是非大人しく我々の指示に従ってくださいお願いします。……あー、繰り返します。たつた今、この船はアーサミー盗賊が……」

……

3度程同じ内容の放送を流し、一旦スイッチを切る青年。防音性

に優れたこの部屋にも、にわか慌ただしくなつた外部の空気がな  
んとなく伝わってきた。無論船として重要な操舵室と動力室は既に  
ピンポイントで押さえてあるわけだが。まあ、早いとこ次の指示を  
すべきだろう。パニックに陥つた群衆なんて相手にしたくない。

「あら、終わった？」

背後の戸が開き、1人の女性が船内放送室へと入ってくる。髪を  
無造作に肩まで下ろし、安物のシャツに似たような長ズボンとに  
かく飾り気の無い人物。彼女こそが、アーサー盗賊団のボス、通  
称“姐さん”だ。本人はこの呼称に違和感を訴えているのだが、む  
しろこれほどこの人を端的に表した言葉は無いと思う。

「終わりましたよ。けれど、早く指示を出しておいた方が良いです  
ね。何も言われないことで不安を強めた乗客が……」

「あー、そのあたりはアンタに任せるわ。アタシはそーいうの苦手  
だしねえ」

「……分かりました。と言うか、分かつてました」  
訳あつて彼女をリーダーとするこの盗賊団だが、大体いつもその  
頭脳役は参謀である青年の役割だ。姐さんは基本的にめんどくさが  
りなのである。故に頭脳労働もいつもこちらへ丸投げ。彼の心労は  
溜まる一方だ。

「……船底後方に、大型の貨物倉庫がありましたよね。そこに乗客  
全員の荷物を集めさせましょう。その上で、乗客の皆さんにはそれ  
ぞれの船室で大人しくしておいて貰います。少々無理はありますが、  
これで乗客の荷物目的の占領だと思わせられるでしょう。我々は仮  
にも盗賊団なので、盗賊団らしくしておかないと余計な疑い  
を掛けられます」

「そんなもんなの？」

「そんなもんなんです。後ついでですが、ゲイ又シンへ直行するよ  
うにさせましょうか。一応寄港無しでもあそこまで辿り着ける程度  
の燃料は積んでいるようですし、何より姐さんの目的には……」

「んなこといちいち気にしないで良いわよ。むしろアタシにとつち

や、その目的っていつの自体モノのついでみたいなものだよねえ。無理して下手打つのは最悪よ？」

「まあ、それもそうですね。なら先ほど話した通り、乗客は全員最初の寄港地で下ろす、ということが良いですか」

「だーかーら、そーいう細かいコトはそっちで考えて、つてば。アタシに振られても答えらんないわよ」

「では、そうしておきます」

こんな彼女だが、決して盗賊団の面々は嫌々従っているわけではない。むしろ喜んでそこに付き従う者がほとんど。参謀役の彼に当たって同じである。……彼らは皆、“姐さん”が居なければ今こうしてまともに生きてること叶わなかったであろう境遇なのだ。有り体に言えば、彼女は命の恩人なのである。無論、ただそれだけの理由でその下に付いているわけでもないのだが、そこはまあ話すと長いので省略する。

「ではまた放送しますので、姐さんは貨物倉庫の確保をお願いします。恐らく放送と同時に乗客が押し寄せることになるでしょうから、可能な限り迅速にやってくださいね」

「誰に言ってるの、任せなさいって！で、その貨物倉庫ってどこだっけ？」

「……船底後方です。放送室前の見張り1人2人連れて行って良いですよ」

一瞬沈黙でもって応えそうになるが、そこをぐっと耐える。大風呂敷を広げるだけ広げてど真ん中に穴ぶち空けるのは彼女の得意技だ。こんなことでいちいちメゲてちゃここの参謀は務まらない。

「んじゃ、行ってくるわねえ。ここは任せた！」

「任せました」

とつっという掛け声と共に放送室を飛び出していった彼女の背中を見送る。階段を駆け下りる音が聞こえなくなったあたりで、青年は放送機へと振り向いた。

手慣れた様子で機器をイジリ、船内全域放送であることを確認。

ついで扉が閉まっていることも確認した上でスイッチをオン。ウン、と、魔動式放送機特有の重低音が響く。次いで放送開始を知らせるアナウンス音が放送され、船内が静まるのを感じた。

「あー、先ほどお伝えしました通り、乗客の皆様は今からいくつか指示を出します。どうぞ騒がず静かに聞いて、静かに従ってください」

我ながら無茶なことを言っていると思う。しかし、ここは姐さんの仕事に期待だ。騒ぐ群衆の鎮圧とか、きっと彼女の得意分野に違いない。

「まずひとつ、船底後方の貨物倉庫へと手持ちの荷物全てを持って来て頂きます。これらは全てこちらでお預かりしますのでどうぞよろしく。次に、荷物の引き渡しを終了した乗客の方は各自の船室で大人しくしておいてください。下手に出たり彷徨いたりすればどうなるかとかは、まあ言わずともご理解なされていると思いますので敢えて言いません。ご協力お願いします。……えー、で、繰り返しますが……」

はじめの放送と同様、3度同じ内容を繰り返す。面倒だが、集団へしつかり意思伝達を行う上では必須の作業だ。これだけで伝達効率は大きく変わってくる。

「……というわけで、重ね重ねご協力お願いします」

数言数句違いはあったものの、概ね同内容の放送3回目を終了。まず最優先でスイッチをオフに、そして放送が切れたことを確認した上で大きく溜息を吐く。

実はこの指示ふたつ、大きな抜け穴がある。まず、荷物を受け渡す必要が無いこと。少し冷静さを残す者ならば、とっとと荷物ごと部屋に引きこもるだろう。どこかの船室に集結されて、そこから反抗とかされるかもしれない。たったこれだけの指示で、確実に荷物を集めるのは難しいのだ。

「……もの見事なまでに綱渡りですね、ほんと」

まあ、急場凌ぎの作戦としてはこんなものだろう。実は乗客の荷



物なんざどうでもいいのだが、それを言ったところで混乱が深まるだけなのは分かり切ったこと。ならば、ありがちなシージャックに見せかけるのが一番。見えない何かよりも、見える脅威にこそ人は冷静な判断を下せるものなのだ。

「さて、これからどうしますかね……」

さつき姐さんは見張りを2人連れて行ったので、今ここには参謀役の彼と見張りが4人。実際もう放送室はいらないのだが、あつさり放置して妙な勘ぐりされるのも鬱陶しい。よってある程度固めておく必要があつてこの体制なのだ。

暇なのだ。そもそもここを取り返しに来るような、勇気ある一般乗客がいるとは考えにくい。傭兵だとか騎士だとか、そういう戦闘を生業とする人種が乗っていないことだけは確認済み。あと不確定要素としては素性不明の旅人数グループだが、彼らが急に連携できるとも思わない。単独で攻めるには、盗賊数人の壁は厚いだらう。

「さつぱりやること無いですね。……放送室なんだから、何か音楽を放送できる設備とかないんでしょうか……？」

畜音魔石と呼ばれる棒状の石に音を記憶させ、再生する装置が存在する。なかなか高級な道具であるため一般人はそう持っていないが、こんな大型客船とかなら置いてありそうなものだ。なんとつてあの放送アナウンス音も何かしら音を記憶してあつたわけで……

「……ん？」

放送機器の裏をこそごとと漁っていた参謀な彼だが、ふと気づいて耳を澄ませる。がた、どか、という何かと何かをぶつけ合うような音、そして怒声。あれはそこで見張りに立っている団員の声だ。

防音設備のせいで聞き取りづらいが、間違い無い。

「まさか、襲撃してくる人がいるなんて、ね……」

油断はあつた。まず防音機能付きのドアを閉めっぱなしというのがマズい。目の前でドンパチやってくれたから良かったものの、下手すればそのまま奇襲受けるところだったわけ。

そう思考を回しながらも得物を回収してドアの取っ手に手を伸ば

し、ふと考えを改める。放送室の手前は細い廊下。仮にそんな地形に彼が加勢したところで、盗賊団側の戦力の増加はほとんど無いに等しい。襲撃者側が突破できなかった場合、特に問題無し。もし見張りが突破される戦力だった場合、青年の加勢に意味は無し。つまり、今彼に取れる最善の一手は、ここ入り口の手前死角で息を潜めること。

ここまでを0コンマ3秒で考え、実行。彼の手に馴染む大降りのダガーナイフを脇に寄せ、気配を殺して壁に寄り添う。気配に関しては今更な気がしなくもないが、まあそこは気分の問題だ。

そうこうする内に、扉の外での戦闘の気配が静まる。直後、自然に開けられる扉。そこから覗いたのが青年のよく知る顔でないことを判断、素早くダガーナイフを突きつけた。……が、あっさり棒で払われる。あの木棒、見張りの1人が持っていた得物だ。

「……やっぱり、部屋の中にもまだ居ると思っただー」

「「」明察をどうも」

軽いバックステップで距離をとったのは、少年。まだ10と少しぐらいか。ただ、纏う雰囲気はもう少し上。驚いたことに、彼以外に人の気配は無い。たった1人で4人の盗賊を無力化してのけたというのだろうか。

「さて、しかしこちらとしても、この部屋を明け渡すわけには……」

「うん、それはどーでもいいんだよ。君が逃げ出そうとしてることも含めてね」

「……どういうことですか？」

確かに青年は逃走を第一に考えていた。目の前の少年の容姿に騙され、盗賊4人が敗れ去った事実を忘れるほど彼は耄碌していない。……が、それで良いとはどういうことか。別に、これ以上の増援を呼ばれてもどうにかする自信があると。そういうことなのか。

「んー、どーいうことって言われると困るんだけど。とりあえず僕が聞きたいのは、アサミ、って人について、なんだよね」

「……姐さんに、何か？」

アサミ。確か姐さんの名前だ。

「あ、やっぱり居たんだここに。名前からしてそーじゃないかとは思ったんだけど」

「……これは、思っていたよりずっと悪い方向へと事態が転がっているらしい。素性の知れない旅人が、姐さんを探す理由。十中八九、来訪者がらみだろう。」

盗賊団の面々は、皆彼女が異世界からの来訪者であることを知っている。そしてそんな来訪者に懸賞金が掛けられていることも、もちろん。むしろ、それ故に彼女を守ろうとわざわざ盗賊団を結成したりという経緯があるのだが今それは関係無いので置いておく。

「端的に聞きますが……あなたが彼女を捜す理由は、来訪者、という言葉に関係有りますか？」

「んー……まあ、関係は、あるね」

確定か。こうなれば、意地でもここでこの少年を足止めするしかない。賞金目当ての人物の汚い手に、姐さんを触れさせてたまるかと。

「……ならば、あなたをここから移動させるわけにはいきません」

「……え」

「良くて足止めでしょうが……その身削らせて頂きます！」

「え、ちょー!？」

ダガーナイフを構え、素早く接近。牽制に突き出した左腕、その死角からナイフを振り上げ……

「がっ……!？」

「あ、えーと、ごめん、つい……」

側頭部に強い衝撃を受けた彼は、そのまま昏倒してしまう。時間にして、僅か1秒以内の出来事。

時間稼ぎさえ無理だったか。ブラックアウトしていく意識の片隅で、青年はそう自嘲した。

「……で、さ。一体どーいうことなの……?」

……ひとり、残された少年の疑問に答える者は、いない。

## 第拾捌話 船底遭遇・ふねのそとでこんにちわ

客船前部の職員用階段を一段とばして駆け下り、角を曲がる。前方には船体に沿って軽く湾曲した廊下が伸びていた。後はこれを船尾まで直進すれば、指定された貨物室だ。

はじめは全員で放送室へ向かっていた華月たちだったが、その後の放送で貨物室の方も重要だと判断。そこで二手に分かれ、片方はそのまま船底へと降りてきたのだ。

「はあ、はあ……ちよつと、待つて……」

「……体力無いな、貴様」

軽く息を整えていると、手すりに乗りかかるような体勢で夕依が降りてきた。華月の全力ダッシュに付いて来たため、息絶え絶えである。

「しょうが、ない、でしょ……走る、速さが、違う、のよ……」

「別に無理して喋らなくても良いぞ。どうせここからは急がん。少し休むか？」

「そう、させて、貰う、わ……」

壁に背中を預け、荒い息を整える夕依。たかが船といえ、甲板から船底階までは4、5階建ての建物相当である。それだけの距離を男性の全力ダッシュに付いてきたのだ。彼女もその年代の少女としてはスタミナのある方だろう。

言っておくが、何も別に好きこのんで船内全力疾走していたわけではない。というか、船後部へ行くのにわざわざ前部の職員用階段使ってるのだからちゃんと理由がある。まあ隠すことでもなし簡潔に言おう。混んでいるのだ、後部の階段は。

そもそもこの船、前部に機関室や操舵室等の乗員室、後部に客室類が配置されている。通常一般人の訪れない船底以外は大体この基本構造通り。よって、乗客用の昇降階段は後部に2組、合計4つしか存在しないのだ。少ない気もするが、構造上の問題とかあるのか

もしれない。

そこに、先の放送。許容量以上に人間の押し寄せた階段は、完全にその機能を停止させていた。それを避け、こちらの職員用階段を使ったのである。

……因みにこの場所、本来ならば一般客立ち入り禁止エリアだ。よって当たり前に掛かっていた鍵なのだが、これは華月の魔法で難無くクリアしてしまった。立派な犯罪行為な気がするものの、今は緊急事態、つまり仕方無い。あと、急いでいたのも途中で“乗員に”見つからないためだったりする。

「……ふう。……行けるわよ」

夕依の息も整ったようだ。

さて、ここからは隠密作戦である。とりあえずやることは、貨物倉庫を偵察し、相手の規模と程度を把握すること。あと、具体的な目的も。もし仮にそれがこちらのやることを阻害しなければ、このまま指示に従うというのも手なのだ。そのためにも、こちら的一般乗客とは違う怪しい動きを相手に見られたくない。

双羽の方は逆に放送室を襲撃し、あわ良くば占領する手筈である。いざという時、迅速な情報伝達手段である船内放送を掌握していること。これは大きなアドバンテージとなるからだ。これは双羽自身の作戦でもある。

因みに彼曰く、この役目は逃走に適した箒魔法が適任なんだとか。特に否定するわけでもないので了承したが、どうも双羽には別の目的があったような気がする。最初の放送の時も、『もしかして、この名前って……いや、いくら何でもまさかそんなことは無……くも無い、かなあ……』とか何とか呟いていた。相手に心当たりでもあるのだろうか。

……まあ、今そんなことを気にしていても始まらない。先ずはやるべきことを、だ。

「一応注意しておくが、相手に見つからんようにな」

「分かってるわよ。……呪術・路傍の石……」

もごもごと呟く夕依。す、と存在感が薄くなる。意識を逸らせば、そこにいることを忘れてしまいそう。そんな希薄な気配。

華月は知る由も無いが、双羽と夕依が出会ったときにも使われていた魔法だ。

「ほう、そんなこともできるのか。まあ俺も似たようなものだがな。

……“隠”せ」

手のひらに“隠”の文字を書き込み、発動。自分では効果を確認しづらいが、今他人が華月を視認することは難しいだろう。気配云々ではなく、ただ単に対称へ焦点を合わせにくくするという仕組みだ。まあ、結果としての効果は似たようなものだが。

「行くぞ」

足音に気を付けつつ、廊下を進む2人。華月の場合見えなくなっているのは姿だけなので、音で居場所のバレる可能性がある。その点、気配丸ごと消してる夕依は気楽なものだ。普通にすたすたと歩いて羨ましい。まあこの先の貨物倉庫には乗客が押し寄せてる筈なので、あまり音とか気にし過ぎたところで仕方無いのかもしれないが。

そのまま廊下を進み、貨物倉庫の入り口が見えるところまで辿り着く。予想通り、そこには溢れんばかりの人の波。しかしまあこの船、こんなに人が乗ってたのかと感心してしまう程だ。これでは盗賊団の姿なんぞ見えやしない。

「どうする、金峰。貨物倉庫に入るのは無理そうだぞ」

「……壁に穴でも空ける？」

「なんだそののつけから物騒な案は。船壊してどうする」

「あら、確かにそうねえ。いい方法かと思っただけ」

「仕方無いわね……それなら、入り口に詰まってる人を……」

「だから何故貴様はそう発想が物々しいんだ。もう少し様子を見てから決めても……ん？」

……いや、ちょっと待とう。今、明らかにおかしいセリフが混じってはいなかったか。

「でもあそこ入っとかないと困るのよねえ」

「ああそうか。……で、貴様は誰だ？」

ゆっくりと振り向き、いつの間にやら背後に立っていた人物を見据える。ざっくばらんな黒髪を散らした長身の女性。誰だ。

「……！ ……いつの間に……？」

遅れて気づいた夕依が、驚きに目を見開きつつゆっくりと後退る。華月だって、会話に参加してこなければもっと気づくのが遅れただろう。

「まあ、質問はひとつづつ、ってねえ。あ、因みにここ来たのはついさっきよ。なんか会話してる2人組居たから、何かな、って」

何だ言って、律儀に答える女性。ちよつと順番が逆のような気がするが、そこは気にしない。

「どうも回答を有り難う。……ということ、もう一度聞こうか。貴様は、誰だ」

「人に聞くときや自分から、ってよく言うけどアタシはあんまり気にしないしねえ」

「やっぱり気にしないらしい。」

「アタシの名は、アサミ。名前のまんまだけど、今回シージャックしたアーサミー盗賊団の団長よ」

「ほう？」

「……！」

「ぴし、と一瞬体を強張らせ、即座に戦闘態勢で距離をとる夕依。」

華月もそれとなく構え、警戒を強める。対してアサミはえらく余裕だ。何か秘策でもあるのか。

「まあ、それよりも。アンタたち強そうねえ」

「……それよりも、って……」

「あ、もしかしてアンタたち、来訪者でしょ」

「……！ ……なんで、そう思うの……？」

「何故、分かったのか。特に不審な行動はしていないはずだが。」

「なんで、って、変な魔法使ってるでしょうが、アンタたち。アタシの目は誤魔化せないわよ？」

そういえばこの女性、はじめから夕依を認識していた。つまり魔法が効いていない、もしくは何らかの方法で魔法の効果を潜り抜けたということだ。ならば、奇妙な魔法を使っていることにも気づくだろう。そこで、確信を根本にカマを掛けてきたわけだ。夕依はそれに見事に引つかかった、と。

「しかしな、言わせて貰おう。……それに何の意味がある？」

「大有りよ。なんたってやり合う大義名分ができたじゃないの」

「……やり合う？」

それまたおかしなことだ。華月たち襲撃された側が盗賊団へ挑むのならいざ知らず、彼女がこちらとやり合いたがる意味は無い。懸賞金目当てでもなさそうだが。どうということだろう。

「いまいちそちらの言っていることが見えんのだが……」

「そうねえ。乗客の人巻き込むのもアレだし、あっち行ってくれる？」

「……もう一度言おうか。意味が分からん」

「んじゃ、5数えたら攻撃するわよ」

「おい」

なんかもう会話が成り立っていない。

「5、4、」

「おい」

……まずい。このアサミとかいう女性、本当にやるつもりだ。しかも来訪者と知って挑むのだから、それなりに実力はあるはず。何も無しに受けるわけにもいかない。

「3、2、」

手のひらに“防”と書き込もうとしたが、ふと悪寒がして止める。これは、まず場所を移動すべき。

なんか展開について来れてない夕依を引きずり、とりあえず指定された方向へ離脱。華月だって乗客の皆さんを巻き込みたくはない。

「1、」

隠れる場所は無し、どこかに文字書く暇も無し。……もっと温存



しておきたかったのだが、しょうがない。アレを、出そう。

「、0、つたあ！」

「……“防”げ、防符！」

大きく振り抜かれたアサミの手元から、何か青白いものが迸る。

同時、華月の懐から取り出された紙の束が散り、それぞれに描かれた“防”の文字が薄く輝く。一泊置いて、両者激突。相殺し合ったのが偶然なのかは知らないが、綺麗に両方吹き飛んだ。

「へえ、やっぱりやるじゃないの」

「そいつはどうも」

華月としてはわりかしフルパワーに近い防御だったのだが。一撃で吹き飛ばされるなんて想定外も良いところだ。

……というかそもそも、何なのだろうこの状況は。なんで華月は攻撃されているのか、答えてくれそうな人はいない。

「んじゃ、次いくわよ、次！」

「ぬお……！」

またも放たれた青白い何かを、今度は夕依ごと枝分かれした廊下に飛び込むことでやり過ごす。目標を失った攻撃は、華月たちの代わりに廊下の内壁を切り裂いた。一撃でなんか激戦後の光景みたくポロポロになった壁を見、アレは絶対に食らってはいけないものだという認識を強める。

「……聞いて良い？」

「なんだ」

やつとこさ、夕依が復活したようだ。余りにフルボツ口な壁に驚いたためかもしれない。

「……なんで、私たちが襲われてるわけ？」

「さあな。……しかし、分かっていることがひとつあるぞ」

とりあえず廊下を奥へ進む。逃げたつてしょうがないのだが、アレはそう何回も受け止められない。

ならばまずは、良いポジションを確保することから。当面の目標は、廊下の途中に放置されたあの大きな木箱だ。かなり頑丈そうだ

し、「堅」とでも書き込んでやればしばらくは保つだろう。

「……………あの人の名前？」

「それを含めればふたつか。いやな、まあ簡単なことだ。……………とりあえず、一度奴をなんとかしなくては」

「……………それもそうね」

「だろう。ということ、やるぞ」

「しょうがないわね……………」

どうも相手さん、話を聞いてくれそうもない。ならば、先ずは倒すのみ。話し合いとか他の手はそれからだ。

お互いに戦闘の意思を確認しつつ、ついでに飛んでくる青白いのも確認し、揃って木箱の裏へ飛び込む2人であった。

第拾玖話 紙札蒼斬・おふだだつたりあおかつたり

多少背後を気にしながらも全力ダッシュ、突き当たりの角を右側へジャンプ。翻ったマントを掠めるようにして青白い閃光が迸るが、そんなもの気にしない。次の角を左に曲がった白衣を目に捉え、追隨して滑り込む。見れば前を走っていたはずの華月は歩を止め、壁に向かって何やらゴソゴソしていた。

「……何してるのよ」

「壁の補強中だ。流石に逃げるのにも飽きたのでな、ここらで反撃開始といくぞ」

「そうね……」

短く答え、そつと角から頭を出す。どうやらまだアサミは向こうの角まで来ていないらしい。存外ゆつくりとした足音が聞こえるのみだ。……彼女が姿を現せば、その時が戦闘再開の合図である。

「まあ幸い、奴の魔法とその特性、あと性格等は大体掴んだ。次からは、そうやられっぱなしということにもならんだろう」

「それならいいけど」

まあ、先程からかれこれカップラーメンの待ち時間2つ分は逃げ続けてる。そろそろ走り回るのにも限界が来ていたところだ。こちらで腰を落ち着けた方がいいのかもしれない。

「……それで、どうするの？」

「まあ、基本は今までと同じだな。俺がああ魔法を捌き、その内に貴様が攻撃を仕掛ける。今回は壁にも相当な補強を掛けておいた。先と違うのはそこだ、これである程度は耐え切れるだろう」

あのアサミを相手取るにあたり、とにかく脅威なのが彼女の魔法、その攻撃特化した性能だ。あの青白い閃光自体は、どうも“斬撃”を射出しているものらしい。で、まあこれはいい。問題は、華月の渾身の防御を一撃で消し飛ばすその威力、そしてついでの如く廊下一本ボロボロにする攻撃範囲、これだ。この特徴のせいで夕依たち

は防戦、というか逃走一筋になってしまっている。

無論、弱点だってちゃんとあるにはある。あの蒼い閃光、操作性が妙に大雑把なのだ。おかげで華月の防御札を用いた“逸らし”が有効なわけだが、それも前述の広範囲特性が補ってなお余っている状態。狙いを絞るうにも、余波がわりかしシヤレになっていない。決定打こそ無かったものの、華月、夕依共にあちこち傷だらけだ。あまり芳しい状況ではない。

「壁を盾にして、防御と攻撃を役割分担……結局は同じじゃないの？」

「いやまあ待て、誰もそれだけとは言っていない。ついさつき貴様に言ったあの作戦もあるだろう。他にもいくつか仕掛けてはいるぞ……なんせ、見るからに搦め手に弱そうな雰囲気だからな」

「……まあ、あんまり物事考えてなさそうよね……」

今さつき会ったばかりの人物だけに何とも言えないが、これは2人の共通見解だ。あれだけ戦闘向きな魔法なら色々やりようもあるだろうに、ひたすら真っ直ぐこちらへ打ち込むのみ。バカとか何とかいうよりも、愚直とか武人氣質とかそういうものに近い感じがある。

「さて、お出しました。まず仕掛けるか……」

向こうの曲がり角へ姿を見せたアサミをみとめ、小声で指示してくる華月。まあ無駄なことだとは思っただが、んなこと彼にだって分かってはいるはず。

「……呪術、金縛り」

ちらと廊下の角から向こうを覗き、歩いてくる女性に照準を合わせて魔法を発動……するが、当たり前のように避けられる。今までと同じだ。特に見えたりする類のものでもないのに、しっぴかりかつり回避されてしまう。

「そこねえ。ていやっ！」

気合いと共に放たれた閃光を見、慌てて頭を引っ込める。直後華月が投げ付けた紙切れによってその軌道は逸らされ、結果として天

井が一部薄くなった。なんか破片落ちてるし、上を人が歩いたら底抜けそんな気もする。

「ちっ、コイツも少なくなってきたな。何か別の手を考えるか……」  
懐から取り出した紙束と睨み合い、ひとり思考を回す華月。様々な漢字一文字と複雑な模様の書き込まれたその紙切れ、彼の新兵器である。その名も“札”。今のところ、初めに使った“防符”と今閃光を逸らすのに使っている“曲符”のみ夕依は確認している。もちろん他にも色々あるだろう。華月の魔法、その最大の弱点である発動の遅さと付随する連射性の低さを補う強力な武器だ。

ちなみに実は文字周りに刻まれた模様とか適当で、ものとしては紙に書かれた文字を魔法として発動させているだけ。非常に簡単な仕組みだ。よって量産が簡単というのも利点のひとつではある。模様付けたのは男のロマンらしい。よく分からない。

「全く、いつまで逃げてんのよ。ちよつとはやり合う気無いの？」  
「……そもそもそちらが勝手に仕掛けてきたのだろう。このまま見逃してくれさえすれば文句は言わんが」

「うーん、そりゃ無理ねえ」

「そうか……なら、多少の強攻策には目を瞑ってくれたまえ」

廊下の角越しに言い合いをするというのみなかなかに滑稽な図だ。しかもセリフの応酬しつつも攻撃の手を緩めないあちらさんのせいでツッコむ暇さえ無い。器用なものだ。

「良いわよ、何するつもり？」

「誰が敵にそんなこと教えるか。身をもって知るがいい」

「ケチねえ」

「ケチでも何でも良いがな。……これでも食らえ」

突然身を乗り出した華月は、アサミに向かって何かを投げつけた。いくつも重ねられていたであろうそれは、空中で分裂するとそのまま廊下の向こうへと散らばる。空を切り、結構な速度で飛ぶ細長いシルエットは……

「……か、紙飛行機……」

「無論ただの折り紙では無いがな」

明らかに不穏なこの紙飛行機群に対し、しかしアサミは冷静だ。自分の方へと飛んでくるものだけを確実に魔法で撃ち落とす。精度こそ悪いものの、ただの紙なんぞ余波が触れた時点で真つ二つ。そうやってアサミを避けるように広がった紙飛行機たちは。

「……“爆”<sup>は</sup>ぜろ、爆符」

突如、爆発した。どうも書かれていたのは“爆”の字らしい。変則遠距離型爆符、とでもいったところか。

流石のアサミもこれには少し驚いたようで、もうもうと立ち上る土煙から一歩引いたところで立ち止まる。……この、タイミング。

「今だ、金峰」

「……凶運・頭上注意」

予め決めてあったタイミングで、夕依の魔法を発動。当たり前のようにアサミは回避行動をとろうとして、戸惑う。恐らく魔法の照準が自身でなく下方へズレていることをいぶかしんだのだろう。だがそれでいい、止まってくれることにこの攻撃の意味はある。

「え、ちよつとそれアリ？」

そんな彼女に向けて、いや違う、そんな彼女の足下の床めがけて、先程爆発させず煙に巻かれていた残存紙飛行機が雨の如く落下した。床に対して発動した“運悪く上から何か降ってくる魔法”に従い、空を漂う紙飛行機は落下軌道を描いたわけだ。いくら夕依の魔法を確実に避けてくる反射といえど、これは避けきれない。

「それって反則じゃないの、ねえ」

「芸が無くて済まんが……“爆”<sup>は</sup>ぜろ、縛符」

ドゥン、と。廊下の遙か向こうまで響くような音を立て、煙はさらに広がる。ただ砂地とかでもないこの場所ゆえ、大した視界妨害にはならない。どうやってかあの爆発を受けきつたらしいアサミの姿もばつちり見えてる。

ならば、狙える。

「……呪術・金縛り」

「いったー、つて、あら、動けない」

「これで何とか動きを封じ……」

「んじゃ、もうちよつと本気出すわよ？」

「え、本気って……きゃあつ！？」

突然夕依の体にもすごい負荷がかかる。アサミが、金縛りに抵抗しているのだ。しかもあれ、きっと腕力だけでやっている。人間じゃない。

「あらら、思ったより堅いじゃないの」

「……っ、これ、もう保たないわよ……」

「十分だ。……“縛”れ、縛符！」

華月の号令に反応し、廊下の隅っこに仕掛けられていた札が一斉に飛び出した。それらは瞬時にしてアサミに張り付き、体を覆っていく。それにつれ、夕依は体にかかる負担が軽減されていくのを感じた。

「あつちや、これは流石に無理ねえ。全く動けないわ」

「……済まん、金峰。今しばらくその魔法を続けておいてくれ。」

正直俺の縛符のみでは止め切れる気がせん」

「まあ、まだしばらくは続けられるわよ……」

似たような魔法の重ね掛けでようやく動きを封じているこの状態。どちらかが気を緩めれば面倒なことになりかねない。そのところ念頭に置き、慎重にアサミに縛られる場所へと向かう。

「大丈夫よ、降参降参。別に放されたからつてもう暴れないから」

「信用はできてしまふのがなんだが、そう簡単に解放するのは無理だな。貴様を使ってこの騒動そのもの止めさせる必要がある」

元々それは選択肢のひとつでしかなかったのだが、アサミが問答無用で仕掛けてきたためこれ一択となってしまうのだ。今更盗賊団の指示に従うというのも変な話だし、この人質をネタに彼らと交渉、通常航海に戻させるのが今現在のベストである。

「うーん、でも仲間が捕まるのは嫌ねえ」

「観念しろ」

「アレ以外居場所無いのよ。人捜してるんだけど、それにも足とか必要だし」

「事情は分かるが、こちらにもこちらの都合がある」

「そうなのよねえ。困った困った」

いまいち困ってなさそうな口調だが、表情が陰っているあたり割と本気か。それを見、さてどうしよう、なんか心証悪くなってきたぞと腕を組む華月。しばらくその真似して首をひねって見たが、夕依の発想力じゃ良い案は出ない。

そんな彼女は、特に何というわけではなく後ろを振り向いた。強いて言うなら首をひねることに飽き、新しいことをしてみただけだ。が、おかげさまで夕依はとても珍しいものを見ることができたのだ。った。

「……だよね、居ると思ったよ何となくそう思ったけどやっぱり聞こう、お姉ちゃん、なんでここにいるのさ!？」

いわく、頭を抱えて叫ぶ双羽なんぞというレア風景、そう見られるものでない、と。



第拾玖話 紙札蒼斬・おふだだったりあおかつたり（後書き）

……場面転換が無い。ついでに脈絡も無い。キャラクターが制御できない……

第廿話 心情内情・うちにひめたる（前書き）

……話が進まない。

もっと一気に沢山書くべきかもしれないですね……

## 第廿話 心情内情・うちにひめたる

「……双羽の、お姉さん、ね……」  
「なんとというか……偶然というのも、まあバカにできんものなのだな」

激戦の痕残る船底の廊下、そこに直接面したとある船室にて。とある姉弟の久方ぶりであろう語らいを、ぼけつとした顔で見守る夕依と華月が居た。上記の台詞は、そんな2人がどちらと無く漏らした言葉だ。まず姉弟にしては全然似てないだとか何だとか、そーいった小さいことはこの奇跡的出会いの前に霞んでしまっている。なんとたつて、拉致同然に連れて来られた異界で同様の境遇を持つ肉親に遭遇したのだ。偶然、で済ませるには勿体ないサプライズと言えるだろう。再会した2人の心中は推して知るべしである。

「……」  
「どうした金峰。……思い出しているのか？」

「……そうね。もう、ほとんど忘れかけてたけど……」  
「奇遇だな、俺もだ」

無論、というか何というか。今やこの世界にも相当馴染んでしまった華月だが、元居た世界に帰りを待つであろう人はいる。夕依だつてそうなのだろう。本来ならば祝福すべきこの再会の場面が、しかしどこことなく寂しい空気を持つていること。それは、彼らがここにいる理由。いつか必ず帰るべき場所を持つ、彼らの。

「……帰れると、思う？」  
「ふむ……俺たちを召還したという、あの国まで行けばいいのではなかったのか？」

「そう……よね。そのはず……」  
「……」

……ひとつ、華月には不思議に思えることがある。明確な目的を与えられた来訪者の中にあつて、何故夕依は未だベンフィード公国

へと辿り着いていないのか。

華月の場合、あの小屋を本拠地に少しづつ行動範囲を広げる計画だった。そうしてこの世界の常識を学びつつ旅の準備を整え、全てがしつかり用意された状態で旅立つつもりだったのだ。基本彼は用心深い人間なのである。まあ、結局本拠地を滅茶苦茶にされたゆえ半強制的に放り出されたわけだが。

対して夕依。彼女が既に長い旅暮らしだということは、見ていればなんとなく分かる。一行の中で最も旅慣れているのは彼女なのだ。しかし双羽と出会った経緯を聞くに、ベンフィード公国を目指していたとも考えづらい。どこかしらよりあの国へ至るにあたって、どのルートを用いるにせよキツキを経由するのは不自然なのである。一応無理して通ることも可能だろうが、旅慣れた人間の採る旅程としては理に適っていないこと甚だしい。そんな仮定より、彼女は全く別の目的を持って旅していた、という方が余程可能性として有り得る話だ。

それだけのことを考え合わせ、思い至る可能性。道中への異様な詳しさ、そして公国が近づくにつれ次第に悪くなってゆく顔色。そこに今の煮え切らない発言が加わり、華月はほぼ確信に近いものを得た。

……夕依の旅の目的地、それは公国でないどこか。そして彼女の“今の”旅の出发点、それは恐らく“ベンフィード公国”。つまり、夕依は一度あの国へ到達し、そして何らかの理由をもってこの旅を続けている。そう考えれば、様々な事象の辻褄が合うのだ。

「……まあ、とりあえずはベンフィード公国を目指すしかないだろう。俺たちに与えられた目的は、そのみなのだからな」  
「そうよね……」

しかし、以上の思考は全て華月の仮定に過ぎない。全て、あの国に着けば分かることだろう。ここで辿り着いた結論。それは、今のところ彼の心中で完結させておくべきことなのである。

そう結論づけ、華月は未だ頭に渦巻くそれらへの思索を振り払っ

た。

「あ、そうだ。カッチンカッチンギャウ」

そうしておいて、何の前触れ無く謎の名を連呼し始めた双羽に殴符を投げつけ黙らせる。こういう時、発動の早い札術は便利だ。もう少し種類を増やしてみようか。

「イ、イタイ……」

「……双羽って、懲りないわよね……」

「……で、なんだ。何か用事か？」

なんだか危険な感じに目を光らせた朝美より目を背け、話題を進める。まだ一度魔法合戦しただけだが、その性格ならなんとなく掴めた。あの手合い、隙を見せれば喜々として人の弱点抉ってくるタイプだろう。この渾名ネタからはとっとと離れるに限る。

「あ、それなんだけどさ。乗客の人たちに、盗賊捕まえました、って言つとこうかなって」

「……でも、他の盗賊はまだ……」

「あーそれねえ。実はアタシら、通信用の石持つてんの。それでアイツらには降参って伝えといたし、まあアタシが言うならって納得してたわよ」

ちなみに彼女、今回の件起こした盗賊団のリーダーなんだとか。ついさつきそれを聞いた直後は驚いたが、少し考えるとなんだか納得してしまった。まだ彼女とは出会って少ししか経ってないが、早くもそのキャラクターが見えてきた気がする。

「……なるほどな。そんな物を持っていたからこそ、俺たちを見つけてられたわけだ」

「そーいうこと。副長から連絡来ないんで、ちょっと気張ってたのよ。そしたら、隅っこでこそそこそと気配隠してる2人組見つけたってわけ。ま、白衣のアンタは隠すの下手だったけど」

「ふむ、そいつは手厳しい」

……なんとこの女性、華月や夕依の隠遁魔法を素で見破っていたらしい。重ね重ね本当に人間かと問いたくなるスペックだが、まあ

双羽の血縁というからには分類的には人族なのだろう。魔法だ何だとファンタジーなこの世界においても、残念ながら未だ華月は人間以外の知的生命体を聞いたことが無い。だから多分、鬼だとか魔人だとかそーいのではない、はず。多分、きつと。

「それでさ、僕とカツ…華月くんでお客さんの誘導しようかなって」  
「……それなら、全員でやればいいんじゃない？」

そついう作業は多人数でやった方が効率が良い。その観点からは夕依の言うことも尤もなのだが、何かワケがあるのだろうか。

「実はねえ、アタシが行っちゃあマズいのよ。なんせアタシ、あの貨物室で荷物の受け取りしてたから。大半の乗客に盗賊だったことバレてるのよねえ、多分」

「なるほど。まあ、そんな貴様が行けばパニックになるのは当然か。……では、金峰が残るのは何故だ？ 今更貴様を独りにしたところで、そう裏切りなどするとは思えんのだが」

そもそも、双羽と合流した時点で朝美の拘束は解いている。彼女なら、今の時点でこの場の3人から逃げ出すなどわけも無いだろう。そこに夕依一人残したところで意味があるとは思えないのだ。

「そりゃま、アタシが暇だからよ」

「……は？」

聞き間違いだろうか、と。己の耳を疑い過ぎて、不覚にも夕依とハモってしまった。不覚だ。重要なことなので2度言った。

「やー、流石に独りこの部屋で待つのは暇過ぎるでしょ。だから話し相手が欲しいな、って。それにできれば同性が良いし」

「……そう、ですか……」

「……何故だろうな、今の説明に納得してしまう俺がいる」

「しょーがないよ、お姉ちゃんいつもこんなだもん」

自分勝手というかマイペースというか、いや何なのだろう。当初、弟であるはずの双羽とはえらく似ていないと思ったものだが。しかもって、朝美の行動原理を成す独自のリズムにはどこか彼を彷彿とさせるものがある。まあ、それでも対極姉弟であることに変わり

は無いのだが。取り扱い辛さばかり似るとは、どうにも傍迷惑な人たちだ。

「……んじゃ行こっか、華月くん。カナちゃん、大変だと思っけどお姉ちゃんをよろしくね」

「そっだな……うむ、まあ金峰、精々頑張ると良い。応援だけはしておくぞ」

「……え、と。頑張つて朝美さんの相手、を……って、あれ、頑張つて……?」

「なーんかアレねえ、アタシの扱い悪くない?」

「ん、気のせいだよきつと。それじゃ行つてくるねー」

言うことだけ言つて、とつとと部屋を出て行つてしまふ双羽。こ  
ういうところが似ていると思うのだが、さて彼らに自覚はあるのか  
……いや、自覚有りの方がいくらか厄介な気もする。

「む。流石に一人任せにするのは悪いな。……ということで俺も行く  
くとしよう」

適当に理由を付け、部屋を出る。その際夕依が何か言っていた気  
もするが、まあ聞こえない。当たり前のように部屋の前で待ってい  
た双羽と合流し、船後部の階段へと歩を向ける。

「僕がお客さん飛び越えて上の階に行くよ。華月くんはこの階の人  
お願い」

「ふむ、理には適っているな。よし、良いだろう。この階は任せられ  
たぞ」

「ん、お任せします」

いつも通り箒で楽する双羽に並び、あちこち抉れた廊下を歩く。  
改めてこう見てみるとアレだが、派手にドンパチやらかしたものだ  
とはいえ、まあ残る傷跡の大半は朝美なわけで。いやしかし、全く  
もって豪快な女性である。そしてやっぱり、双羽とはほとんど似て  
ない。ホント似てない。

……しかしそんな朝美が、弟にだけは似合わぬ優しげな表情を向  
けていたこと。まああれだ、兄弟のいない華月にとっては羨ましさ

半分、といったところか。

「……んー、お姉ちゃんも遠慮無しだね……華月くんとか力ナちゃんがやったんじゃないんでしょ、コレ」

「俺にこんな大量破壊可能な技は無いぞ。ほぼ逃げただけだ」

「そっか。……うちのお姉ちゃんが、ご迷惑おかけしました、と」

「まあ、確かにご迷惑は被ったな。……が、良い姉ではないか。弟を、本当に大事にしている」

「ふふ……そだね。僕の、自慢のお姉ちゃんだよ」

そう言って、自然に笑みを浮かべる双羽。今までのどこか何かを被ったような、作り物臭い笑いでなく。恐らく華月には初めて見せたであろう、素の表情だ。

……また少し、思い出してしまう。あの日、こちらへ来なければまた出会っていただろう人たち。やっていたであろう様々なこと。

兄弟云々は置いておいて、また双羽に何か羨望に似たものを感じる華月であった。

「おっと」

少し考える間に足が止まっていたのだろうか。気がつけば少し先行していた双羽の箒を、心持ち早足で追いかける。

「済まんな把臥之、少し遅れ……」

軽く掛けた声は、しかし途中で中断する羽目となった。ちらと見えた少年の目に溜まった、透明な滴のせいだ。

「あ、華月くん……えっとね、別にちよつと目にゴミが……」

「……把臥之」

なんかよく分からないまま言い訳してみたこと言い始めた双羽を、華月は手で制した。先まで自分のこと考えてた頭を、手早く外向的に切り替える。口八丁は華月の得意とするところ、ここは自分の役目だ。

「ひとつ言っがな。年下に遠慮されるほど、俺は落ちぶれた記憶は無いぞ」

「……うん？」



「まあ聞け。……俺はな、貴様が外見より上の年齢だろうことは分かっている。精神的なものなら更に上をいくのだろうことも、なんとなくだが理解はしている。俺たちを完全には信用していないことも、な。むしろ、警戒している、と言った方が近いか」

「……華月くん……」

泣き顔寸前の目でこちらを見上げてくる少年。しかしその実、精神的なものではこちらを遙かに凌駕する人間。

旅は人の内面を浮かび上がらせる。その節々で見えた彼の聡明さに、似合わぬ落ち着きに、何度違和感と驚きを感じたことが。

「だがまあ、ここまで一ヶ月程の旅路を共にしてきたわけだ。そろそろ少しは信じてくれても良いだろう」

「えっと、でも僕は……」

「聞けと言っているだろう。貴様が話すと簡単に言いくるめられかねん」

「……」

「何があつたか、貴様は身の丈にそぐわん精神力を手に入れた。そして、それを誤魔化しながら生きていくわけだ。まあそこに何かしら理由は有るのだろうが、俺は聞かん。興味はあるが、ここでは聞かん。貴様が自発的に話すまではな」

押し黙つたまま、見上げる目に真剣さを宿す双羽。その表情は、暗に華月の指摘を肯定するものだ。

「しかし貴様はひとつ忘れてる。貴様はな、まだ子供だろう」

華月だつてまだ法律的には子供だが、それとこれとは別の話。今はツッコむべきでない。

「子供が泣くのを控えてどうする。感情を思うままに発散してこそ、だ」

「でも僕は、そんな……」

「だから聞けと。……ただ泣くのを控えていれば、それで良い。そう、思うか？ 貴様なら分かるだろう。感情を押さえつけること、その弊害。外面ばかり気にしては潰れかねん」

「……………」  
「まあここまで偉そうなことを言っておいて何だが、ひとつ免罪符を用意してやるう。……男泣きというのはな、女に見せないことで許される。嬉し泣きならなお良しだ。……どうする、ここにその条件を邪魔する者はいないぞ？」

「……うぐ、ひっぐ……」

割と適当に言ったのだが、最後の台詞は一番効果が有ったようだ。俯いたまま、軽くしゃくりあげる声が聞こえ始める。ここで女性なら抱きしめるなり何なりしてやれば良いのだろうが、あいにく華月にそっちの気は無い。代わりに、軽くポンポンと頭に手を置いてやった。

「泣け泣け、たまには感情表に出してみろ。しっかり泣いて、それが終わってからやること見据えればそれで良い」

「……うう、ひぐっぐ……」

決して大声は出さず、しかし俯いた顔には満面の笑みと涙を浮かべ、双羽はしばらく泣き続けた。無論華月もそれに付き合う。

……似合わんことをしたな、と、こっそりシリアス疲れを吐き出す華月であった。

第廿話 心情内情・うちにひめたる（後書き）

最後の華月君の一言は作者の代弁に近いです。マジメなお話は疲れる。もっとこうノリの軽い会話を書きたいなー。

## 第廿巻話 終船未先・まだあともちよつと

目の前に、黒マントを羽織った小柄な女の子が座っている。正直あまり似合わないと思うのだが、そこは口を閉ざしておいてあげよう。なんせ朝美が指名し残ってもらったのだから。

……それにしても彼女、さっきからなんとなく挙動不審である。

「えーっと、夕依ちゃん、だつたっけ？」

「あ……えと、そう、です……」

……確か朝美の記憶が正しければ、彼女は弟のことを呼び捨てていたはず。というか、旅の仲間と思しき2人に対してこんな慇懃な態度を取ってはいなかった。いやまあ当たり前なのだろうが、それにしたつて朝美に対しては低姿勢過ぎるのではなかるうか。

そういえば先の相談時、夕依は朝美の言葉に一切反応していなかった。双羽の言うことにはかり受け答えしていた様だ。避けられているのか。それにしたつて、原因が全く分からない。一応、ついさつきまで魔法を交わしていたという心当たりも有るには有る。しかしもつて、それはなんだか違う気がするのだ。

「あのさ、夕依ちゃん」

「……何、ですか……？」

しかし朝美、ここで大人しく悩むタイプの人間ではない。見えている解決手段の中で、最も短絡的経路を選ぶ。そんな彼女の採った手段は、もちろん。

「なんかさ、アタシ夕依ちゃんに避けられてない？ いやー、お姉さん傷つくわー」

直接、聞く。ここで、ちょっとした事情を鑑みるとかいう配慮、もしくは選択肢を期待してはいけない。

「え、ええ……そんなのじゃなくて……」

「じゃ、何なのかしらねえ。もしかして、まだ会ったばかりってことで緊張しちゃったりしてる？」

「それも、違、います……」

「もー、それじゃなんでアタシにはそんな他人行儀なのよー」

遠慮なんぞ一切無く夕依を追いつめてゆく。朝美がじわじわ距離を詰めると、夕依もじりじり後退する。そんな移動は少しばかり続いたが、間も無く部屋の壁にまで到達してしまった。もう逃げ場は無い。

「さーで、なんで逃げるのかしらねえ」

「……え、それは……朝美さんが寄ってくるから……」

「だーかーらー、そのご丁寧な態度の理由教えてくれればいいのよ。別にそんな無理言ってるわけじゃないでしょ」

なんか話し相手が余所余所しい、というだけの話題だったはずなのだが。どうしてこうなったのだろうか。まあ、結果として暇つぶしにはなっているので止めないが。

「……えと、私、年上の人には敬語使うことにして……」

「あらら。それだけ？」

「そ、そうです……」

なんだそんなこと、と納得しそうになったがちょっと待とう。見た感じ、あの華月とかいう白衣の青年も彼女よりは年上に見えたのだが。実は背が高いだけのガキんちよだった、とでもいうのか。それにしたってマセすぎだろう。将来が心配なレベルだ。もしそのままいけば、確実に禿げる。

「あの白衣、帰ってきたら生え際に気を付けるよう言っところかしらねえ」

「……は？」

「やー、なんでもないわよ。気にしない気にしない」

どうも朝美には、頭の中の思考を結論から喋る癖がある。そのために時たま、今のようない見謎の台詞が飛び出すのだ。某剣の人風に言ってみると、考即言、ってな感じ。かつこよく言っって何がどーなるワケでないが。

とりあえずはあれだ、華月が禿げる云々は置いておいて、本題に

移ろつ。

「ところで夕依ちゃん、なんで年上には敬語使うの？」

「……別に、大した理由は……」

問いに返す夕依の目を見るが、何か裏があるようでもない。実際の習慣とかそのあたりだろう。ならば、大丈夫だ。

「それならねえ。夕依ちゃん、今からアタシに敬語使うの禁止！

そんな大して歳離れてないみたいだし、部活の先輩後輩とかでもないんだから」

「え、でも……」

「でも、じゃないの。あのねえ夕依ちゃん。確かにアタシは年上かも知らないけど、この世界に来たのはつい最近なのよ。つまりここに関しちゃう夕依ちゃんのが先輩ってわけ。分かる？」

「そ、それは、そう、ですけど……」

「夕依ちゃん、この世界来て長いんでしょ？ 双羽もねえ、アタシは頼りになるって言ってたわよ」

「……双羽、が……？」

何故そこに反応する。アレか、青い春過ぎて秋じゃなく春來てる感じなのか。よし、双羽には後で拳一発落としておこう。理由なんて、なんとなく気に入くない、で十分だ。

……ちょうどその頃壁何枚向こうでは、件の双羽が頭を押さえつつ2連続でくしゃみをしていた。

「でもねえ、アタシが夕依ちゃんに敬語使っつていうのもやっぱり落ち着かないでしょ？ だからさ、アタシ達は対等。どちらが上ということは無く、見下すことも低頭することも無い。アタシは、夕依ちゃんとそんな関係で話してみたいの。ダメかしら？」

「……別に、ダメってことは無いけど……」

「それじゃ決定ねえ。今から敬語は禁止、アタシと夕依ちゃんは同じ目的持った同志、よ」

「……分かったわ。よろしく、朝美さん」

「んー。まあ、いきなり“さん”付けまで止めろつてのは難易度高

いわよねえ。そこはしょうがないか。んじゃ改めまして、よろしく、夕依ちゃん」

どちらともなく右手を差し出し、握手を交わす。話し相手約一名確保、である。

「……そういえば……」

「ん、何？」

しかし、やはり今までは多少無理して敬語を使っていたようだ。先ほどまでの切れ切れな喋り方に比べ、今は随分と聞き取り易い。良いことである。

「……なんで、朝美さんはシージャックとかしてたの……？」

「そりゃま、足が欲しかったからねえ」

水上の移動において船ほど有効なものも無い。それは当たり前のこと。

「えと、そうじゃなくて……」

しかし、夕依が聞きたかったことはまた別らしい。

「……ベンフィード公国目指すなら、何もせず大人しくしていれば……」

まあ、それは確かにそうだ。そもそもこの船はゲイヌシン行き。元から目的地へ舵を取っているわけで、そこをわざわざ占領することに意味が無い。

……それはあくまで、本来ならばそうだった、というだけのことだが。

「ま、いくつか理由は有るんだけど。実は、アタシの目的って人捜しだったのよねえ。何処に居るとかさっぱりだから、とりあえずあの国目指してたってだけで。だからある程度自由の効く移動手段が欲しかったのよ」

「探してたのって……双羽？」

「そのとおり。どーもアタシと同じことになってたっばかったしねえ」

ある日突然消えた弟。そして、何故かそこに関心を持たない周囲

の人間。朝美自身、気を抜けば双羽のことを忘れてしまいそうだった。

そんな中で朝美はこの世界へと呼び出され、この地へ降り立ったのだ。状況から考えるに、双羽の身にも同様の現象が起きたのだからと予測できる。ならば、ここは草の根分けてでも探し出してやるう。

見つけ出して、そして一緒に元の世界へと帰るのだ。

「ま、双羽は運良く見つけられたわけだし。ここからは来訪者らしく旅するだけねえ。ってことで、この先付いて行くんでよろしく」

「え、と。別に、良いと思うけど……他の2人にも聞かないと……」

「ま、無理にとは言わないけど。どうせ目的地は一緒なんだしねえ」  
どのみち、ここからベンフィード公国まではほぼ一本道だ。双羽や華月が同行を許可してくれなければ、今まで通り盗賊団を率いつあの国を目指すだけ。そうなると、移動速度的に考えて双羽達を追いかける形になるだろう。一緒になくとも、大して変わらないわけだ。

「あ、そーいえば。夕依ちゃん達に付いてくとなると、アイツらどーするか考えないとねえ」

「アイツら、って……盗賊団の人たち？」

「そーそ。元々、双羽を見つけるまで、って話で付いて来てもらってたんだけど。流石に何にも無しでほっぽり出すのもアレよねえ。なんだかんだでいいヤツばっかだし」

初めは力付くで言うことを聞かせていたのだが、気が付けば団員達全員に慕われていた。正直、暴力でもって色々強いていた記憶しかない。どこでどう転がって今みたく懐かれたのか、いまいち心当たりも無いのだ。分かるのは、彼らがすっかり自らの意志で朝美に付き従ってくれている、ということだけ。まあ実際、それで十分なのだけだ。

「……朝美さんは……なんで、盗賊団のリーダーなんてやってるの？  
……女の人なのに」



「別に女性が盗賊率いちゃダメってことも無いでしょ。ま、アレよ。そもそも切っ掛けはねえ」

思い出すのは20日程前。朝美がこの世界の地を初めて踏んだ直後だ。そう、右も左も分からなかったあの時……

……朝美の思い出話により、ゆっくりと時間は過ぎていった。

……

「で、この船の船員の人に盗賊だってバレちゃってねえ。今更シラ切り通すわけにもいかないし、じゃあいつそのこと盗賊らしくこの船占領しようか、ってことになって」

「……朝美さんって、思い切りいいわよね……」

「あら、誉めたって何も出ないわよ？」

誉めてるのがどうかは正味微妙なラインだが。まあ、プラスに受け取ってもらえたのならそれで良いだろう。

流星に長かった思い出話に聞き疲れを感じたため、壁に背を預ける。巨大な船だけあって、いかにも頑丈そうな材質だ。合金か何かだろうか、金属の冷たさが心地良い。……ついでだが、改めて朝美の魔法の規格外っぷりを認識してみたりする。木造建築とかなら楽々と撃ち抜けるのではなからうか。

「ん、そういえば。なんかさっきからちょっと騒がしいわねえ」

「え？ ……あ、言われてみれば……」

朝美に言われ、耳を澄ませてみる。微かにだが、複数人の話し声っぽいものが聞こえてきた。……あと、なんだろう、少しづつ大きくなっているような。

「近づいて来てる……？」

「みたいねえ。というか、アタシあの声に聞き覚えあるんだけど」

「……誰？」

「招かれざる客、よ。ホント、忘れてたわ。この船の船員さん」

「……あ、それは……」

朝美の身の上話によれば、シージャック決行当初、手当たり次第船員を叩きのめしては荷物置きに放り込んでおいたらしい。一応出会った船員にはもれなく同様の措置をしておいたのだが、そもそも遭遇していない者も居たのだろう。妙に音声識別能力の高い朝美の聴覚を信じるならば、近づいて来ているのはこの船の乗員全て。仲間救出された船員達は、船を襲った賊に立ち向かおうとここまでやって来たわけだ。その勇氣、もっと別のところで発揮して欲しかった。

更に問題なのは、彼らが恐らくは放送を頼りにここまで来たということ。もちろんその場合、目的地は船後部の貨物倉庫になる。十中八九、通るのはこの部屋の前を抜けていくルートだろう。んでもって、件の貨物倉庫では乗客の誘導に双羽たちが動いているわけで「……放っておくと、このすぐくややくしいことになりそう……」「ま、勇んで来たところ悪いけど、ここ通すわけにはいかないのよねえ。うん。ってことでアタシはアイツらの足止めするけど、夕依ちゃんどーする？」

「え、と……私は、朝美さん抜けてきた人、止めてみる」  
本来ならば一緒に手伝いたいところなのだが。朝美の魔法の性質上、あまり付近に味方がいると逆に戦い辛いだろう。廊下という密閉された細い空間なら尚更だ。よってこの部屋の辺りに隠れつつ、運良く朝美の弾幕をかい潜れたラッキーな船員の足を止める。これが多分、最も効率の良い配置だ。

「りょーかい。もちよつと夕依ちゃんと話してたかったんだけどねえ。ま、良い暇潰しってことで、精々暴れてくるわ」

「……気をつけて」  
朝美なら問題無いとは思いますが、万々が一ということもある。気をつけるに越したことは無い。

「誰に言ってるんの、アタシがそんな柔そーに見える？」

「見えない……」

「その即答、女性として喜ぶべきかどーか微妙なラインねえ。っと、

そろそろ行くわよー」

「……呪術、路傍の石……」

自身に気配薄化の魔法をかけ、部屋を出る朝美の後を追う。ちょうど、部屋を出た位置からギリギリ見える角に一団の人が居た。音だけでどうやったか知らないが、朝美はこのタイミングを狙っていたのだろう。この位置取りならば、夕依は朝美の戦闘を目視しつつ機に乗じて動けるのだ。

「……ん？ おい、人がいるぞ！」

「乗客か？」

「いや……ちよつと待て、あいつだ、あの女が盗賊団の首領だ！」

「なに、あの女性が！？」

朝美を発見したことで少し戸惑い、乗員の集団は足を止める。そこに、無造作な足取りで近づく朝美。それを見てもまだオロオロしているあたり、彼らは戦闘に関して素人なのだろう。……まあ、当たり前だが。むしろ乗員が皆戦闘のプロな客船とか何それ恐すぎる。むしろここで気をつけるべきは彼らでなく、その肩に担がれた円筒形の物体だ。通常業務中の乗員があんな物を持っているところは見たことが無い。それに何となく、元居た世界のバズーカ砲が何かを彷彿とさせる造形である。

これらのことより推測できるひとつの事象。即ち、あの白い長筒は不審者対策の武器か何かなのではないかと。

「……つ、とにかく、ヤツを拘束する！ 全員構えろ！」

「へえ、やり合うつてワケねえ。面白いじゃない」

バズーカもどきの先端が、全て朝美へと向けられる。夕依の予想は大体合っていたようだ。まだ爆発物なんかを打ち出す物かどうかは分からないが、あの距離の取り方からして、飛び道具であることは間違いないだろう。対する朝美も腕を引き、完全に戦闘態勢だ。あまり直線上に居座ると流れ弾を受ける可能性があるため、部屋の入り口から体半分だけ中に引っ込んでおく。

「撃てっ！」

「っ、ていやっ！」

バズーカもどきから、真っ白な球状の物体が打ち出される。それらは全て朝美へと殺到するが、ぶつけるように放たれた蒼い閃光がそれらを阻んだ。一瞬にしてバラバラに切り裂かれ、周囲へ飛び散る白い物体の破片。いくつかこちらへも飛んできたため、扉の奥へ頭を引っ込めやり過ごす。

……直後、破片の着弾地点から次々と白い炎が吹き上がった。どうやらあの物体、当たった対象に張り付いたのち高温で燃焼し始めるといった性質を持つようだ。一介の客船に装備される個人火器としては、少々やり過ぎな気がしなくもないが。しかし実際に盗賊やら怪物やらが彷徨くこの世界、その手の備えに行き過ぎという言葉は無いのかもしれない。

「ぶっ、つと、せい！」

「がっ!？」

「っく、距離を取れ! 近づかれるな！」

夕依がそんなことを考える間に、朝美は乗員を3人ノックアウトしていた。どうやら怪我をさせるつもりは無いらしく、全員素手で叩きのめしている。魔法はあのバズーカもどきによる砲撃を防ぐのに使っているようだ。そうしつつ、巧く位置を取ること乗員を全て廊下の片側へと留めていた。正直、夕依の出る幕なんぞ全く無い。……更に2人ほどの乗員が、朝美のハイキックと続く回転蹴りを頭部に受けて昏倒した。すぐ仲間に助け起こされているもの、すぐには動けないだろう。そのお返しとばかり、足を振り抜いた体勢の朝美へとバズーカもどきの一斉砲撃が降り注ぐ。それを、先行数発は魔法で叩き落とし、残りは地面へと大規模な閃光を打ち込む反動で回避。一瞬援護しようと思ったが、まだまだ問題無いようだ。ついさっきまで朝美の立っていた位置には、一瞬遅れで白い球体が次々とぶつかった。

そして、吹き上がる水柱。

「な、何だ!？」

「あらら」

二言話す間も無く、朝美と乗員たちは溢れ出した水流にのみ込まれる。強力な攻撃を立て続けに受け、船底が破れたのだ。そう理解したときには、夕依の元へも荒れ狂う水は迫ってきていた。

「……っ、呪術・強制リバウンド……！」

体を極限まで重くし、ドアにしがみつくことで鉄砲水のような第一派を何とかしのぐ。しかしすぐに水位は上がり、塩水は容赦なく夕依の顔を叩いた。仕方なくドアを放し、魔法も解除することで夕依は浮き上がる。

初めのような荒れ狂う水の流れはもう無いものの、狭い廊下をまるで川のように巡っているため流れが速い。それでも、ここは何とかして階段のある方面へと泳いでいきたいところ。だんだん水嵩も増ってきているため、時が経てばこの船底部に呼吸をできるような場所は無くなるだろう。

しかし……

「……泳げないのよね、私……」

夕依は、カナヅチであった。学校での半強制的な水泳の授業を受けたことだつて、もちろんある。むしろ、そうでなければ今頃浮くことさえ出来ずに沈んでいるだろう。なんたつて着衣水泳なのだ、浮かんでいられるだけでも彼女は頑張っていると言えるだろう。

……が、それでも多少泳ぐことさえ出来れば、流れを利用して上の階へと向かうことも可能ではあつたはず。今この現状では、ただ流されるままだ。そろそろ位置把握も難しくなってきた。それに、気合いと根性八割で保たせていた立ち泳ぎもそろそろ厳しくなってきた。

「……なんとか、壁に……きゃっ！」

塩水が顔にかかり、息が続かなくなつてゆく。流される途中で何かにつづけたのか、右足の感覚が無い。

ゆっくりと、非常にゆっくりと、体が水流へと沈んでいくのを感じる。そろそろ視覚が役を成さなくなってきた。

……なんともしようもない終わり方ではないか。生きるため、ただ生き延びるために続けてきた旅の終着点がこんな場所とは。なんだか、罰が当たったような気がしなくもない。自嘲と共に湧き出た諦念が、夕依の意識を曇らせてゆく。

「……………ん！ 力……………ん！」

薄れゆく意識の中、夕依は誰かの呼ぶ声を聞いた。彼女の記憶は、一旦そこで途切れることとなる。

第廿弐話 漫湖流廊・ながれみずつみのみち

盗賊団の指示と偽った上で、乗客を各々の部屋へと誘導する。双羽の容姿に一瞬怪訝な顔をされたが、そこは“脅されて従っている”体でクリア。我ながら驚きの演技力だった。頑張って悲愴な顔をして見せていたとき、横で吹きだし掛けていた華月の向こう脛を小突くのだって忘れてない。

……そんなこんなで、まだ貨物倉庫へたどり着いていなかった乗客含め、とりあえずほぼ全員を上階へと移動させ終えたのだった。やはり、慣れない仕事は疲れる。階段の一番下の段に腰掛け、うーんと伸びをする双羽。船底部のこの場所に、今人はいない。

一仕事終えてグツタリしている間に、各自部屋への誘導も終わったららしい。こちらも普段より疲労度2割り増し状態な華月が、一段一段踏みしめるように階段を降りてきた。ご苦労様である。

「華月くん、お疲れさん」

「む。把臥之も、な。しかし、慣れないことをするものではない。妙な箇所に疲れが溜まったぞ」

言いつつ、肩をコキコキとまわす華月。こういった類の作業は、えてして使っていない筈の体の部位に効いてくるものだ。双羽にしても、今一番疲れているのは足だったりする。ほとんどずっと筈で飛んでいたというのに。

「とりあえず、あの部屋へ戻るとしようか。一旦集合すべきだろう」

「だね。船員さんも結局一人も来なかったし、お姉ちゃんとカナチやんが止めてくれたのかも」

「そもそもここへ来る気からして無かったのかもしれんがな。まあ、そこは俺たちの知るところでもないが」

朝美たち盗賊団がノした上で一纏めに放置して置いたという船員たち。見張りすら付けていないあたり、あの盗賊団の適当さが滲み出ているが、まあそこはいい。

船の運航係であり、同時に船の安全管理者でもある船員たちが、このまま大人しくしているだろうか、と。双羽の見立てでは、十中八九この船には不審者撃退用の武器か何かが配備されているはずだ。無論、それらを使いこなす為の訓練だつて行われていると考える方が自然。ここは元の世界と違う、危険と日常とがコンスタントに接近する異世界なのだ。こんなめいたいな船が、狙われることを想定していないなんて考える方が難しいくらいである。

……なんて色々言つてはみたものの、結局は誰も来なかったわけだが。まあ双羽としても出来れば外れていて欲しかった予想だけに、ここは素直に納得しておくこととする。

「んじゃ、早く部屋に戻る……ん？」

「どうした把臥之、何か忘れ物でも……む、何だ？」

箒に乗つていざ行かん、という体勢で双羽は停止する。一瞬遅れ、華月もソレに気が付いた。何かこう、廊下を埋めて押し進むような、圧迫感のある振動音。階段を下りてすぐのところ、廊下は曲がっているのだが、その向こうを見ている気がちよつとしんない。

「何だ、この重低音は……」

「うーん……なんかどつかで聞いたことあるよーな……」

頭に手を当て、記憶を高速検索に掛けてみる。……一件ヒット。

あれだ、昔行つた防災科学センターとかいうところで見つた、暴風時の高潮模型……

「……華月くん、壁作つて！」

「なに……いや、立ち上がれ、“壁”！」

双羽の意を汲み、聞くより先に防壁を展開する華月。“壁”と書き込まれた船底の床が盛り上がり、廊下を下八分目まで隙間無く塞ぐ。

……次の瞬間、廊下の向こうから猛烈な勢いで流れ込んできた水流はその壁にせき止められ、一時その勢いを弱めた。水位はだんだん上がってくるが、あの壁を越えるまではまだ時間があるだろう。

「……狭いところを水が勢いよく流れてくる音、だったんだよね……」



「……把臥之が、そんなどうでもいいことを覚えている奴で助かったな」

まさに間一髪、であった。

それにしてもこの大量の水、一体何処から出てきたのだろうか。状況からして、おおかた船の外部から流れ込んだもので違いはない。とすれば、最も考えられる可能性は“船底に穴が開いた”こと。

ちなみに穴が開いていたとして、その位置は船の横でなく底辺部だろう。もし横っ腹やら喫水線あたりに穴が開いていたならば、この壁なんざあつと言う間に越える勢いで水が流れ込むはずだ。そうならないのは、底辺部を開いた穴から少しづつ、空気を押しつけるけながらの湖水流入が発生しているためだと思われる。

ついでにひとつ。この船内洪水事件に夕依や朝美が関与してないなんてことはまず有り得無い。船底構造部なんて頑丈な物に大穴空けられる存在、正直なところ朝美くらいしか思いつかないのだ。この世界の船の詳細構造なんぞ知らないが、多少岩なんかにつけた程度じゃ穴が開いたりはいしないようになってるだろう。でなければ危なっかしくて航海なんぞしてられない。

「……さて、どうする？ 上の階へ行く、もしくは廊下を完全に塞いでしまうというのも有りだが」

「んー、それもいいんだけど……」

夕依や朝美がこの現象の原因だとすれば、その時に近辺にいた可能性が高い。とすると、2人ともこの暴水の初動に巻き込まれたのではないか。

……ちなみに、だが。残念ながら双羽は姉の心配を余りしていない。なんせ、魔法が無くても色々チート気味だったあの朝美だ。“この世界に来た”彼女が、水流ごときに飲み込まれたところでどうにかなるとも考えづらい。

問題は夕依である。まず、使う魔法がこういった状況に弱いと思われることがひとつ。また、それなりに運動音痴であると思しいこ

とでもうつひとつ。旅の途中、盗賊やら猛獣やらから逃げるときにまず疲労を見せるのが彼女だったのだ。……初めに足を止めるのは双羽だったりするのだが、まあそれは今置いておこう。とにかく、このはつきり異常と言える事態の渦中であって、彼女の現状と安否こそが最大の懸案事項なのだ。

なんたつて、旅の仲間なのだから。

「……ということ、僕向こう側見てくるね」

「何が、ということ、だ。何でもかんでも貴様の基準で考えるな。しっかり理由を言え、理由を」

「ん、じゃあ……カナちゃん心配だから見てくるねー」

「姉の名が入っていないあたり気になるが……まあ、アレだからな。……うむ、とりあえず合格だ。行ってこい」

「行ってきまーす」

なんか今、自分の姉に対して地味に失礼な台詞が呟かれた気がする。が、しかし、双羽は気にしない。だって彼も同じ認識だから。朝美の前じゃ絶対言わないけれど。

そんなことを考える間に、箒は無意識を汲み取り高度を上げていた。そのまま、特に意識するでもなく最も入りやすい角度で廊下を塞ぐ壁の上部をすり抜ける。初めの頃に比べれば上達したものだ。これまで意識して箒を使ってきた甲斐あって、今では物理的に許される大抵の動作が可能である。単に飛ぶだけならば、姿勢に関わらずほぼ無意識で行うことだって出来るのだ。バック飛行に悪戦苦闘していたのがまるで嘘のような上達ぶり。自画自賛を嫌う双羽だけれども、こればかりは他に誇れる技だろう。誇ったって仕方無いけど。

「うーん……これで部屋の中に居るとかだったら、ちょっと見つからないよね……」

廊下の天井スレスレを比較的ゆっくりと飛行する。一部の小部屋は戸が閉まっており、まだ中に水が入り込んだりはしていないようだ。しかし、すでに水圧で扉が動かないところまで水位が上がって

きているため、もし夕依や朝美がその中にいるとなるとどうしようも無い。双羽としてはしつかり回避してくれたことを願うのみだ。

とりあえず、夕依たちの待っていた部屋へ向かってみる。この廊下から上階へ行く階段は、位置的に双羽たちが居たところとあとひとつだけ。そうなると、彼女たちがそのもうひとつの階段あたりにいる可能性は低くない。んでもって、そこへ行くにはどのみちあの部屋の前を通った方が近いのだ。もしドアが閉まっていれば、その部屋だけは中を見ていこうと思う。

「えっと、こつちがこつちで……うーん、ややこしい」

それにしてもこの船底部、流石本来乗客の降りてこない階層なだけあって、廊下の作りが非常にややこしい。最も外周を船の輪郭に沿って一周する道はいいでしょう。しかもって、そこから内部に伸びる大小様々の通路は、正直人を迷わそうとしているようにしか見えないヒネクレっぶり。こちらで合流しているかと思えば隣はすれ違ってあちらに伸び、あつちが行き止まりだったとすればこちらはループして枝分かれて一部は結局Uターン。そして道の先を隠すかのように林立する柱群。十中八九、外周以外は後から増築した空間だろう。元々がらんだったところに様々な壁材などを組み込んだに違いない。それにしただって設計者の正気を疑う程度には力才すな構造なわけだが。

とはいえ、普段ならそれも笑い話の種で済んだだろう。それらの道は階段部分で全て外周通路に合流しているため、階段から階段までの行き来なら特に迷うことも無いのだ。問題は今みたいな人捜しに限り難易度が急上昇すること。全域を虱潰しとか、んなこととしてたら日が暮れる。

「……んー、見あたんないね。やっぱ部屋に……ん？」

……というわけで、双羽がその細い通路に目を遣ったのは、ほんの偶然だった。いや、そこに一瞬注意を向けたこと自体は、人捜し故必然だったかもしれない。しかし、人間ひとりごとと通れる道の向こう、そこを双羽とは反対方向に横切った物体を、意識の端に

捉えたこと。これはもう奇跡とか幸運だとか、そういった言葉で表現すべき稀なる事象だろう。

「……っ、アレは……!!」

流れていた物、それは黒くて分厚そうな布で、それはとても見覚えがある物で、それは確か夕依の着ていた……

……そこまで考えたときには既に、双羽の無意識が箒の先をそちらに向けていた。その時点で、もうその物体は見えなくなっている。水の流れが速い。回り込もうにも、こう入り組んでいてはその行く先を予想することも難しく……

「……行くよ!」

考えるより、動け。今はとにかく、流されていったあの黒い物体に追い付くこと。一言声に出すことで、それを自身全体にしつかりと認識させる。

一瞬身を屈め、空気抵抗を減らした姿勢から渾身のスタートダッシュ。すぐに眼前へと迫った柱を掠るようにかわし、眼下の水流を巻き上げ箒は空を切る。

この超常の移動手段を手に入れて初めて、双羽は本気で飛んだ。この世界に来て早々木にぶつかりかけてから、すつと避けていたフルスロットルの全力飛行。人が目で追える速度を超え、物理的な限界すらをも超えた急制動で角を曲がりきる。体に掛かる強烈な慣性を意識から外し、僅かな間に距離を空けた目的物に集中。しつかり捉えたその姿は、もう紛れもなく、夕依だ。

「カナちゃん! ……カナちゃんっ!」

名を呼びつつ、流れる海水を割って夕依のもとへと飛ぶ。一瞬彼女がこちらを見た気もするが、直後その体が沈み始めた。意識を失い、水を吸った衣服に引きずられたのだろう。このままでは、間に合わない。

……焦りを押さえ、身を屈め、他の全てを意識の外へ。流れで底の見通せない水流に、飲み込まれ行く少女を。まさに一筋の銀閃と化した双羽は、間一髪その手を掴むことに成功した。そのまま勢い

と力に任せて夕依を引き上げる。気絶した人間の片手を引くのは宜しくないのだそうだが、今そんなこと言ってる場合でない。いつの間にもやらすくそばまで迫っていた壁に驚くが、そこは慌てず騒がず急減速。風圧で流水を盛大にまき散らしつつも、何とか壁ギリギリで止まりきることに成功。減速ついで、慣性に任せて夕依を抱き上げておいた。俗に言うところのお姫様抱っことかいうやつだが、まあ今この場にそんなことツッコむ余裕のあるヤツなんぞいない。

「カナちゃん！ 大丈夫、カナちゃん！？」

とりあえず、息はしている。少し足に痣が見えるのは気になるが、骨が折れているようには見えない。しかし意識が無い。目を開く様子も無く、グッタリとしていて……

「カナちゃん、カナちゃ……ん？」

ふと、箒をまたぐ足に冷たい感触を覚える。帯空位置は、相変わらず天井ギリギリ。つまり、水位がかなり上がっているのだ。このままここには危ない。

「……ふう。とりあえず、ここ出なくちゃね」

珍しい双羽の焦りを、足に触れる冷たい水が洗い流してゆく。まず、今やるべきこと。水に埋まりつつある船底部からの脱出、及び旅の連れとの合流だ。夕依を叩き起こすのは、それからでも遅くないはず。

「一番近いのは……確か、こっち！」

今の位置から最も近いであろう階段へ、双羽は飛行を開始する。夕依に負荷が掛からないよう、今度は安全運転を心がけて。

……数分後、大型客船の底部は、流れ込んだ湖水によって完全に水没することとなる。

第廿弐話 漫湖流廊・ながれみずつみのみち（後書き）

双羽視点にすると、地の文が長くなるの法則。だからこいつで書くの嫌なんだ。

……でも、主人公って双羽なのよね、一応……

## 第廿参話 生存難航・なんとかなったはいいけれど

ゆらりと波に揺られ、夕依は緩やかに目を覚ました。ぼんやりとした視界に入ったのは、見慣れた緑の布。少し首を捻れば、3、4人がゴロ寝できそうなテントの内部っぽい空間も見て取れる。ただし、初めに書いた通り、ここは陸上でない。夕依が今まで寝ていたのもテントでなく、定員4名の屋根付きゴムボートだ。もひとつ付け加えておくならば、そのボートは現在推進力無しで大海原（塩水湖だけど）を漂っている。いや、もう少し簡潔に言おう。この船は、現在絶賛遭難中であつた。

……寝起きの鈍い頭を起こしついで、彼女はここ数日の記憶を遡ってみる。今のこのゲンナリする状況と、その発端について。あの時、船の底で水流に巻かれた夕依は、そのまま意識を失い……

……

ゆらりと波に揺られ、夕依は薄く目を覚ました。意識こそ覚醒したものの、頭痛が酷く、とても目を開ける気にならない。

そのまま小声で唸りつつ痛みに耐えていると、正面から聞き覚えのある声が降ってきた。

「ん？ もしかして……カナちゃん起きた？」

相手を見ようと、細く目を開く。輪郭がハッキリとしないが、そのシルエットは確かに夕依のよく知る少年のものだ。

「……と、双羽……」

「あ、喋るのキツかったら無理なくていいよー。今は安静一番だしね」

「……」

無言のまま頷き、肯定の意を示す。視界を閉じ、改めて体の力を抜いたところで自分が横になっていたことに気づいた。背にあたる

感触は、何だろう、ビニール素材に近いような気がする。

それにしても、一体何があったのか。残念ながら、気絶する寸前までの記憶は意外にすっかり夕依の脳に焼き付いている。まさか頭打って記憶が改竄とかいうこともまあ無いだろう。最後、夕依が水流に巻かれて沈んだというのは確かはずだ。しかしもって、ここが水の底でも地の底でもないことは双羽の存在より自明。

……まあ、いくら考えても知らないものは知らない。ここはその間の経緯を知っていそうな人物に問うのが正解なのだろう。目を閉じたまま、なるたけ少ない単語数で質問を双羽に伝えてみる。

「……なんで、私、ここに……」

「もー、無理して喋らなくていいってば。……カナちゃんさ、自分が溺れかけてたのは覚えてる？」

「……ハッキリ、覚えてる。そのまま、沈んだことも……」

命の危機を目前にしたとき、人の意識というのは極限にまで研ぎ澄まされる。それは恐らく、記憶力という感覚機能のひとつにもしつかり作用するのだろう。種々様々の記憶よりも遙か鮮明に、夕依は水の中で意識を手放す瞬間をしつかりと覚えていた。

「んー、半分正解。実は、完全に沈んじゃう寸前で僕が間に合ったんだよ。ま、そのときは覚えてないみたいだけどねー」

「間に、合った……？」

「……把臥之に感謝しろよ、金峰。コイツは船に水が流れ込む中、箒でもって水流渦巻く廊下を巡り、貴様を探し出したのだ。……いくら空を飛べるといえ、把臥之自身が言うほど軽く、そうおいそれと成し遂げることはない。その能力と精神、どちらかが無ければ今貴様はここに存在することすら出来なかったのだぞ」

少々不足する双羽の説明を補足したのは、相変わらず長ったらしい華月の口上だった。いつの間にか夕依の側まで来ていたらしい。言ってること自体はもつともだが、いかんせん後半部分が不必要である。もう少し物事は簡潔に述べて欲しい。

それにしても、あの時間こえた声は双羽のものだったということ



か。確かに、思い返してみればそんな気がする。それにまあ状況的に考えて、あそこから夕依が生還する経緯はそんなものだろう。

「……分かってる、わよ。……ありがと、双羽」

「ふふ、どういたしまして」

目は瞑ったままだったが、双羽の微笑む顔が瞼の裏に浮かんだ。同時に、どつと安堵感が押し寄せてくる。

一度生存を諦めていたためか、夕依の感情は、自らのくぐり抜けた死地をごく淡泊に捉えていた。自分はその時死に掛けたのか、そうなのか、と。単なる現象として、それらの事実を受け止めていた……それが、何故だろう。今はただ、自分は生き延びたのだ、という実感が心を埋め尽くしている。目覚めてから初めて、夕依は自身の体温を感じた。

「さて、俺は他の場所も見てこようか。把臥之はここに居るといい」「ん、僕も行くよ。今は飛べた方が何かと……」

「一般人の前で飛び回るつもりか？ 一瞬だけならまだしも、そんな高機動を見せてみる。この世界の大抵の人間は不審を抱くぞ」

呪文魔法にも飛行魔法は存在するのだが、えてして使い勝手が悪い。そうでなければこの世界、もっと空路が発達しているだろう。

「うーん、じゃあちよつとしか飛ばない方向で……」

「……言葉の裏を読み。貴様はここで金峰を見ている、と言っているのだ」

「あー……うん、りょーかい」

渋々、といった感じで了解の意を示す双羽。しばらくして足音ひとつが遠ざかり、華月がこの場を離れたことが分かる。見えないためハッキリとはしないが、今この場所にいるのは双羽と夕依の2人だけだ。

「……………」

「……………」  
が、しかし両者喋らない。元々無口な方である夕依はともかく、いつもなら独りでも騒いでそうな双羽まで何故か無言でただそこに

居るのみ。だんだん楽になってきたといえまだ頭痛は残っているの  
で、この静寂も悪くはない。悪くはない、のだけれど。

こうなると、視界を閉ざしている夕依には周りの様子がさっぱり  
分からないのだ。しょうがないのでうつすらと目を開いてみるが、  
見えるのはなんだかビニール質な天井のみ。そりゃまあ仰向けに寝  
転がっているのだから当たり前ではある。

「……双羽」

「なーに？」

まだ続きそうな静寂を破ろうと、双羽の名を呼んでみる。思いの  
外返答は早かったものの、いかんせん次の言葉が続かない。特に何  
か用事があったわけではないのだから。

「……どしたの、カナちゃん？」

「あ……えと、今、私たちの居る場所だけ……」

なんだか不審がられてしまったため、慌てて質問を取り繕う。よ  
くよくよく考えてみれば、今現在の状況はさっぱり分かっていないのだ。  
この機会に聞いてしまおう。

「あ、ここ？ これねー、あの客船に付いてた緊急救命ボートなん  
だつてさ」

「救命ボート……」

「船の底に穴開いてさ、機関室が浸水しちゃったとか何とかで船が  
動かなくなつたんだ。それでね……」

朝美と船員たちとの交戦により発生した水の流入は、結局船底よ  
り3つ目の階層を床下浸水させたあたりで鎮静したそうだ。おかげ  
でこの船の動力を発生させる装置が水にやられ、動作停止状態に。  
一応乾燥させれば復旧も可能とのことだが、装置自体が水面下の部  
屋に固定されているため現実的でない。

結果、乗っていた人は乗員含め船を放棄することとなった。この  
船の救命ボートには、緊急戻港機能とかいう機構が備え付けられて  
いるらしい。なんでも、漂っていれば自然と直前寄港した港へ近づ  
くという便利機能なんだとか。船が動かない今、とりあえずそれを

用いてユヒナ港まで戻ることと相成ったのだ。単独で漂うのは流石に危険だが、これだけの集団ならまあ無事に戻れるのではないかとのことだった。

「ちよつとだけ後戻りになっちゃったんだよねー」

一応定期連絡船代わりだったこの船が大破したことで、しばらくユヒナ港からゲイヌシンへの湖上ルートは使えない。その復旧など待っていては、ベンフィード公園へ辿り着くのはいつになるやら。ここは湖の外周を回り、他の港を経由する方向で予定を組み直すべきか。

ほとんど癖でこの先の旅程を考える。双羽の説明を聞きながら湖岸の都市を思い浮かべ、人伝に聞いた話から行き先を絞り……

……そうする内に、夕依はまた自然に眠りへと落ちていったのであった。

……

……次に目を覚ましたときには頭痛も治まり、夕依は初めて自分の乗っていた救命ボートから外を見た。そこで見た緑一色のゴムボートの群に軽く圧倒されたのは記憶に新しい。乗客・乗員は寄り添い、一つの船団として動いていた。

降伏の意を見せたことで、とりあえずはアーサミー盗賊団も同行港に着いた時点で町の警備隊に引き渡され、処遇が決定されるとかいうことだったらしい。これと決まった法律のようなものは少ないが、町毎にある程度原始的な司法施設は存在するのである。

……そうやって、丸一日ほど航海したときだった。予兆は無かった、と思う。もし仮にあったとして、一体誰があんなこと想定できただろうか。

ちよつと昼食時で、一行3人に朝美を加えた4人がひとつのボートに集まっていた。朝美の同行については華月、双羽共に快諾したのだが、どちらかと言えば彼女がアーサミー盗賊団の首領であるこ

とがネツクであつた。扱いとしてはこの件の主犯なのだ。そのままはいサヨナラというわけにはいかない。幸い死人は出なかつたこと、ユヒナが貿易港であることを考えるに、恐らくは罰金刑を言い渡されるだろう。ここは素直に罰を受け、色々と精算した上で旅立つべきだと。

……はつきりと覚えている。そういつたことを話し合い、さて他の盗賊団員にもそのことを伝えてくる、と屋根付きボートの出入り口をくぐつた朝美。その彼女が、にわかになつた。一生に一度見れるかどうかの珍しい光景だつた。

次いで、それ不審がつた双羽と華月が後ろから外の景色をのぞき込み、以下同文。待つても事態が動きそうになかつたので夕依も、以下同文。

視界には、遙かなる水平線。流れる水と青い空、吹き抜けるちよつと潮つぽい風。それらは今、この船が高速で動いているということを示していた。無論、ゴムボートと思しき緑色なんぞ足下以外にやどこにも見えない。……こうして、夕依たち4人はめでたく遭難者となつたのであつた。

因みに後ほど船を調べた華月曰く、緊急戻港装置が誤作動を起こしていたらしい。通常ならば方向の補正を行うだけの装置が、何故か全出力であらぬ方向に向かつて推進していたのだそうだ。おかげで装置は燃料切れ。方角すら分からず波に揺られて流されて、そんなでもって冒頭へ戻る、と。

幸い食料は大量に積み込んでいたので、数日間なら餓死する心配は無い。すでに遭難開始より丸一日ほど経過したのだが、まだまだ余裕がある。今は見た感じどうも双羽が哨戒に出ているようなので、特にやることも無いだろう。

……暇潰し代わりの回想も終えてしまつたため、夕依はもう一度眠ることにした。正直眠たくはないが、それでも横になる。この薄いビニール状の感触にももう慣れてしまつた。

ボートの底を通して伝わる波は、未だ緩やかな繰り返しを崩さな

い。それは待ち人の如く静かに、しかしはつきりと蠢いている。

## 第廿肆話 危険湖域・さいなんのいるところ

疲れ切った体を引きずり、船のテントの入り口前に横たえさせる。ちらと奥を見れば、べちゃっと広がる黒い布切れ、ではなくへバる夕依がいた。普段ならここで気力回復がてら適当な言葉を投げるところだが、流石の華月にもそんな余裕は微塵も無い。なんたってここの一日、彼らはこの湖の真の姿をたつぷりと見せつけられていたのだ。

例えば今、前方恐らく300メートルほどで遙か天高く立ち上る巨大な渦潮なんかがそれである。分かり難ければ、巨大竜巻の風を水に置き換えたものでも考えてもらえればいい。発生原理なんて知らない。知りたくもない。

……とにかく、こういつた超自然現象に昨日から丸一日晒され続けているのが現状である。むしろどちらかと言えば、あの巨大渦潮を見て心が和む程度に今まで起きたことは常軌を逸していた。立っていることすら難しいような豪雨、いつか見た太陽表面のように3Dでねじ曲がった水流、突然真横から飛来する巨大な氷塊etc.

最後の現象など、どこからの攻撃かと辺りを警戒したものだ。が、それはまあいい。つまるところ、それらを乗り越えたゆえにこうしてへバっているのは至って普通なのだと、そう言いたかっただけなのだが。

「……揃って妙なスペックを持っている姉弟だな、全く。あれが、特殊な退魔士の血筋とかそういう中二的な何かなのか」

魔法は超常現象でありながら、決して万能なる奇跡の業ではない。エネルギー効率がとても良く、かつ多少なり物理法則を度外視できる夢の技術。しかしもって、起こした現象に見合うだけの体力をこつそりと奪われるというのも、また事実だ。

よくあるような、熱線をバスバス乱射したり氷塊の群を操ったり、

なんていうのはまさに達人の領域なのである。常人ならそんなもの1回発動した時点で気絶昏睡確定だろう。

それを、片や丸一日に近い時間飛行を続け。片や100メートル全力疾走に匹敵する体力を消費するであろう魔法を乱発し。よくもまあそれでなお動き続けられるものだ。何って、華月たちと似たような勢いで仕事してきたはずなのに、まだあそこで元気に飛び回っている姉弟のことだ。今も渦潮相手になにやら奮闘している。まあ放っておけば巻き込まれる可能性がある以上、そこに対策するのは何らおかしくない。……真っ向から渦潮を消し飛ばす、とかいう方法でなければ、と注釈は入るわけだが。

「む……終わったか」

先程まで渦潮のあちらこちらで断続的に発生していた蒼い閃光が一瞬止む。直後、立ち上る渦の根本付近で巨大な閃光が炸裂し、逆巻く水をすべて天上へと跳ね上げた。大質量の落下による津波の発生を防いだのだろうか、それにしても相変わらずの破壊力である。

朝美の恐らくフルパワーと思しき魔法の威力に感心していたところで、跳ね上げられた後落下してくる湖水が視界の端に映った。この世界にも変わらない重力というものが存在する以上、いくら上へ飛ばしてもそのうちに落下してくるのは自明の理なわけ。その法則に従った水滴群は、豪雨よろしくボートへと降り注ぐ。

「……面倒だな。……撥ね除けよ、“傘”」

また少し減った華月の体力に呼応し、ボートの上に不可視の障壁が展開された。こんなこともあるのかと、予め各所に仕込んでおいた“傘”の文字を一斉に起動させたのだ。結果、降り注ぐ水滴はうまくボートを避けるように湖面へと着水してゆく。いまいち原理のよく分からない現象なのだが、便利なのでよく使っている魔法でもある。特に最近使用率が高い。

「たっだいまー」

「ふう、流石に疲れたわねえ」

一仕事終えた双羽の箒が、水を滴らせながらボートへと滑り込ん

できた。どうも帰ってくる途中で雨に降られたようだが、まあ自業自得である。

「うわあ、びつちよびちよ」

「そこで絞るな。外へ出せ外へ」

双羽が箒に乗ったまま服を絞ろうとしていたので、とりあえず引きずり下ろす。そのままボートの端へ引きずっていると、箒から朝美が降りてきた。いつもより箒の柄を長めに固定し、それでできた双羽の後ろのスペースに乗り込んでいたのだ。足場は金属の棒一本なわけだが、彼女曰くなかなか良い乗り心地なんだとか。……まあ、乗ってみたいとは思わないが。

「お疲れ、ととりあえずは言っておこう。しかしだ、この雨は何とかならなかったのか？ “傘”の魔法もタダで使えるわけではないのだぞ」

「まあいいじゃない。こんな美女の濡れ姿拝めるのよ？」

「自分で言うな、自分で。あと貴様を見て眼福など思えるほど俺の脳は腐っていないぞ」

「それ、女性に言う言葉じゃないわねえ」

「なら貴様には問題無いな」

一応言っておくが、朝美は決して醜女ではない。というか、まあぶつちやければ相当な美人である。……が、先にその内面を目の当たりにしたせいとか、どうもそういったところを評価する気になれないのだ。一言で言うと、残念なイケメン（女性）、ってな感じである。あんなこと言っちゃいるが、そもそも本人だって女性扱いされないことなど気にしてなさそうだ。

「……終わったの……？」

「あ、カナちゃん復活ー」

黒いボロ切れ、ではなく相変わらずすへちやばった夕依がテントの入り口から頭を出した。魔法の使い過ぎというのもあるだろうが、それより客船での溺死未遂が効いているように見受けられる。ずっと顔色が優れないのは、極度の疲労のみによるものではないだろう。



「うむ、とりあえずは何とかなったぞ。その影響でさっきからこの土砂降りだな」

「……渦潮抜けて、土砂降り……？」

夕依は渦潮に遭遇した直後から伏せていたため、そもそもの作戦と事の顛末を知らない。そんな状況では、まあ水の竜巻と土砂降りの雨に共通点は見いだせないだろう。あの超自然現象を直接消し飛ばすなんて方策、一体誰が思いつくというのか。

「あの渦巻きね、お姉ちゃんが振り飛ばしちゃったんだよ。だからその水が降ってきてるの」

「……え？」

「やー、アレは流石にちよつとキツかったわねえ。かなり全力に近い威力で打ち込んだんだけど」

「……吹き飛ば……す？ ……えつと？」

「気にするな、金峰。俺も一度は通った道だ」

「……あ、ありがと？」

朝美のオーバースペックっぷりは夕依も良く知るところだろう。

しかし、真実はより奇、だったわけだ。そこはついさっき華月も経験した思考ルートである。

同意と同情の念を込めて夕依の肩を叩いたのだが、なんだかお礼を返されてしまった。どうやらかなり混乱している模様。ここは優しく放置といこう。

……まあ、当面の危機は去ったわけだ。しばらくは、次の災難に向けて英気を養うと……

「お姉ちゃんお姉ちゃん、アレ、何だと思う？」

「んー、アタシの目にはくちばしのひん曲がった鳥の大群に見えるけど」

「……多分それ、キヒキソノウ、だと思う……」

キヒキソノウ。確か、穴を開ける鳥、とかいう意味だったと記憶している。ドリル状に発達した嘴でもって、遭遇したあらゆる無機物に穴を開けていくとかいう、まこと傍迷惑な飛行生物だ。もし航

海中の船舶なんかが遭遇してしまえば、その被害は甚大だろう。しかし大きな群の移動経路は地域ごとにほぼ固定されており、大抵はそこを避けるように航路が設定されているのだとか。

以上、華月の脳内にインプットされていた“キヒキソノウ”についての情報である。

「……問題は、アレだ。会ってしまった場合の解決策が見あたらないことか……」

「んー、全部打ち落とせばいいんじゃない？」

……その単純過ぎる思考回路が羨ましい。しかし、それしか方法が無いのも確かだ。何かこうキヒキソノウ除けになるような物とかあるのかもしれないが、夕依の絶望に沈んだ表情を見るに望み薄だろう。ここで最大にして唯一の問題点は、あの群の数がどうも臍目に見ても云千云万の単位な事くらい。大したこと無い。

「……まあ、どのみちアレに対抗するには把臥之の箒が必須なわけだが」

「休憩無しだねー、頑張らないと」

「んじゃ、もー一回行ってきますか」

華月は直接戦闘に向いておらず、夕依はごらんの通りダウン状態だ。支援はできても真っ向からやり合える状態ではない。悪いが、ここは先程と同じペアで出てもらうとしよう。残りは頑張っただけの守備だ。

「さて、と。……面倒だが、もう一頑張り、だな」

朝美を乗せて飛び立った双羽と箒を見送り、本日何度目か分からない溜息を吐く華月であった。

……

……で、だ。

「……どうしてこうなった……」

唐突に華月の呟いた言葉に対し、無言ながらその場の全員が同意

の意を送る。そりゃまあ、あんなことになれば誰だつてそう言いたくなるだろう。

因みに現在地は水面から数メートル上空、総員もつて飛行中である。リムジンの如く伸ばしきった筈に4人全員が乗っている状態。流石にバランスが悪いらしく、さつきからふらふら低速飛行だ

「ほーるいんわん、つて感じだったねー」

「……双羽、それ違う。どこにも入ってない……」

「じゃ、バツティングセンターのホームランが近いかしらねえ」

……何のこつちゃ、というツツコミはひとまず脇へ置いておいて、まずは起こった出来事をありのままに説明しよう。

途中まで、キヒキソノウ迎撃作戦はうまく機能していた。双羽と朝美はものすごい速度で群を撃ち落とし、華月と夕依もボートへ向かってくる散発的な集団に対し余裕を持って対処できていた。こう言うと途中で何かしら破綻が生じたのかとも取れそうだが、実はそうでもない。もう少し厳密に言えば、それは破綻とかそんな生易しいものではなかった。突然なる終局、とかが一番しっくりくる。

あるキヒキソノウを、朝美が撃墜した。衝撃を受けて吹き飛ばすキヒキソノウは、そのままひとつの小集団に突っ込む。そこまではまあ、問題無い。効率良く数を減らすための作戦だ。

……問題は、ちょうどビリヤードよろしく弾き飛ばされた群の中の一羽が、真っ直ぐボートの方向へすつ飛んでいったことか。タイミング良くか悪くか、華月と夕依の防衛組もそこそこ大きな群に対処していた。僅かな隙、というか何というか。一閃の矢のように飛来したキヒキソノウは、薄い素材で構成されたボートにしっかりと大穴を開けることと相成ったのであった。

「……バツティングセンター、ね……」

「でしょ？ やっぱその表現が一番合ってると思うのよ」

「うーん、弾き飛ばして的確に当てる、つて意味なら結構ぴったりだね」

口を開く気力も無い華月は放っておいて、3人はしょうもない話

題で盛り上がる。

食料とかその他諸々がほぼ水中へ沈んでしまった、今のこの状況。もし長期間続けば、彼らの旅はここで終わりを迎えるだろう。それが分かっていいるからこそその、こつした賑やかな雰囲気なのだ。

……そうやって、全体に口数が減っていき。全員が沈黙したままただ進む筈の上で、ふと進行方向から逸らした視線の先に、それは映った。

「……あ！」

「どしたの、カナチャ……わ、やったじゃんか！」

「何とかなったかしらねえ」

「……なっていることを、祈ろうではないか」

船の沈没から、体感にして数時間の後。夕依の指さした方向に、一行は久方ぶりの大地を見たのであった。

第廿肆話 危険湖域・さいなんのいるところ（後書き）

新章突入、ってな感じになるんでせうか。確かに今までとは少し変わりますけど。

まだ章管理機能使う気は無いんですよねー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8206v/>

---

剣と魔法と世界と篇【改】

2011年10月26日12時40分発行